

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

——作者・並木宗輔の追善興行としての初演と、初代豊竹麓太夫の改訂本文による再生——
附リ・並木宗輔浄瑠璃本著作年譜

神 津 武 男

はじめに

『日蓮聖人御法海』は宗祖・日蓮（一二三二—一二八二）の一代記を描いた物語で、宝暦元年（一七五二）十月十日初日、大坂道頓堀豊竹座興行で初演された、人形浄瑠璃の作品である。ただし純然たる初演作品ではなく、かつて並木宗輔が書き下ろし、延享四年（一七四七）十月、江戸肥前座が初演した『いろは日蓮記』を改題・改作したものである。

並木宗輔は義太夫節の浄瑠璃本の作者として、第一世代の近松門左衛門に比肩し、その次世代・第二世代を代表する存在である（同世代に竹本座では文耕堂や初代竹田出雲があった。宗輔は宝暦元年九月七日に没し、その翌月に初演された『日蓮聖人御法海』は、日蓮宗の信徒である並木宗輔の追善興行として位置付けられたと考えられている^{〔1〕}。本作に続いて、絶筆となった『一谷嫩軍記』が初演されたことはよく知られているが、筆者のみるところ、さらに初作『北条時頼記』の再演興行が続いたらしい。並木宗輔を追悼記念する一連の興行があったと考えられる点を本稿では明らかにしたい。

『日蓮聖人御法海』の再演は、初演から五十一年後、享和二年（一八〇二）十月十五日初日、大坂北堀江市之側西側芝居興行である。宝暦元年の初演興行では当時の豊竹座の紋下太夫・豊竹筑前少掾（初代竹本此太夫・陸奥此太夫）が語った三段目切「勘作住家」を、享和二年当該興行の紋下太夫・初代豊竹麓太夫が再演したものである。

本誌前号掲載の拙稿「『壇浦兜軍記』三段目切「琴責の段」の現行本文と曲風の成立時期について——竹本大和掾と初代豊竹駒太夫、初代豊竹麓太夫の影

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

響^{〔2〕}——」では、初代麓太夫の活動のひとつに、竹本座初演曲に豊竹座の音楽特徴によるアレンジを施して再演することがあった点を指摘した。初代麓太夫にはほかに〈豊竹筑前少掾の初演曲を継承する〉という方針もあったと考えられ、本稿では『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」を例として、初代豊竹麓太夫がこんにちの義太夫節の伝承に果たした役割について考えてみたい。同人の活動の概要を把握するために、一六九⁽³⁸⁾頁以下に「初代豊竹麓太夫出演年譜（稿）」をまとめたので適宜参照されたい。

並木宗輔の作品は人形浄瑠璃文楽はもちろん、隣接する演劇である歌舞伎でも伝承が絶えることなく上演され続けていて、この点、近現代に多く復活された近松門左衛門よりもはるかに大きな影響を残し続けた作者だといえる。しかし並木宗輔の〈著作年譜〉、作品年表にはいまだに正確なものが備わらない。たとえば本作『日蓮聖人御法海』でいえば、作品名を「上人」と誤記するもののほか、作者を初板未改訂本に拠らず、改訂本を以て捉えるなどしているのが現状である。歌舞伎作者・並木正三の最初の署名は本作だとされるが、それは改訂本に出るのであって、未改訂本に正三の名前はない。

作品の成り立ちに誰が関わったのか／関わっていないのかを正確に把握せずしては、作品研究そのものが成り立たないだろう。並木宗輔研究の基盤を再整備して、人形浄瑠璃文楽研究の精度を上げることを目的として、「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」をまとめてみた。一五二⁽⁵⁵⁾頁以下に掲げるので、あわせて参照願いたい。

一、「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」について

並木宗輔の研究史を振り返る。

人形浄瑠璃文楽の作者に関する研究は、戦前では基本的に第一世代の近松門左衛門について行われたもので、ほかに第二世代の竹田出雲についての伝記研究——親子二代をひとりとみなした段階から、実は同名で二代あったことの再発見——があった。第一世代の紀海音、第二世代の並木宗輔という豊竹座の作者が盛んに研究の対象となるのは遅れて戦後のことである。

並木宗輔の伝記研究では、角田一郎氏「並木宗輔伝の研究」⁽³⁾がはやい。作品研究では、森修氏「浄瑠璃合作者考」⁽⁴⁾がはやく、第二世代以降の作品に固有の課題であるところの、合作における作者たちの執筆分担を説明するとの問題を設定された。これに呼応する形で、内山美樹子氏の数多くの作品論が展開されたものである。

冒頭にも述べる通り、並木宗輔の作品は人形浄瑠璃文楽において主要なレパートリーとして伝承され続けてきたし、また隣接する演劇である歌舞伎でもその他の人形浄瑠璃文楽の初演作品とともに、殊に東京では昭和期以降、歌舞伎オリジナルの作品以上に重用されている。

戦後においてもっとも研究の進捗の幅の大きかった作者は日本近世演劇分野では、並木宗輔だと考える。しかし今に至るまで正確な著作年譜が編まれていない、といわねばならないのは残念なことである。

「作品の数足りない」「作品名の文字を書き誤る」「作品名を読み誤る」「初板本を見逃すために作者の連名を捉え切れていない」など、不正確さのレベルはまちまちである。下の表は著作年譜類の、タイトルの誤記について一覧するためにまとめたものである。「No」「作品名」欄は、一五二(55)頁の「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」と対応している。

著作年譜類については、発表年の新しいものから古いものの順に並べた。

「玉川」は、義太夫節正本刊行会編『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集』(玉川大学出版部)が第二期(二〇一一年)以降の巻末に掲げる「義太夫節人形浄瑠璃上演年表(二七六—一七五二)」の「興行名」をみたもの。

「図録一」「図録二」は、図録『並木宗輔展—浄瑠璃の黄金時代—』(早稲田大

表 並木宗輔著作年譜類の誤記一覧

No.	作品名	玉川	図録一	図録二	神津	講座	要説	岩波
09	本朝檀特山			×壇				
18	那須与市西海硯			×一				
21	荀萱桑門築紫幘		×筑			×筑		×筑
25	丹生山田青海剣						×梅	
27	奥州秀衡有髻増						×婿	
29	鷗山姫舎松			×捨		×捨	×捨	
44	双蝶蝶曲輪日記						×々	
48	日蓮聖人御法海						×上	
49	一谷嫩軍記	×嫩	×嫩	×嫩	×嫩	×嫩	×嫩	×嫩

学演劇博物館、二〇〇九年十二月。以下、「図録『並木宗輔展』と略す」の、七十一頁から八十四頁に掲げる「図録解説」の見出しの文字をみたのが「図録二」、八十五頁から八十八頁に掲げる「浄瑠璃作者並木宗輔略年譜」をみたのが「図録二」である。

「神津」は、拙著『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九年二月)の、付録「近松没後義太夫節初演作品一覧(未定稿)」の「作品名」をみたもの。

「講座」は、『岩波講座 歌舞伎・文楽』第九卷「黄金時代の浄瑠璃とその後」(岩波書店、一九九八年)の、内山美樹子氏「並木宗輔」の「並木宗輔(千柳)作品一覧」の「作品名」をみたもの。

「要説」は、国立劇場芸能調査室編『浄瑠璃作品要説(5)』「西沢一風・並木宗輔篇」(国立劇場、一九八八年)および『浄瑠璃作品要説(4)』「竹田出雲篇」(国立劇場、一九八六年)の、目次の作品名をみたもの。

「岩波」は、『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四年)の「並木宗輔」項(内山美樹子氏)の文中に掲げられた作品名をみたもの、である。

表中に「×」印をつけた作品名に誤記があり、×のあとに誤字を記した。たとえば学部生が卒業論文で作者並木宗輔に取り組もうと考えたとき、あるいは

研究者に限らず、日本の伝統演劇に関心を寄せる人々が並木宗輔の何事かを知りたいと思ったとき、手引きとなるのは、書名にその名を示した図録『並木宗輔展』や『浄瑠璃作品要説(5)』『西沢一風・並木宗輔篇』であるだろう。その両書において誤記が多い。

では並木宗輔の作品名を誤記していない資料は無いのか、といえば、ただひとつ『義太夫年表 近世篇』(八木書店、一九七九—一九九〇年)だけは作品名をすべて正しく記していた。人形浄瑠璃文楽の資料研究・歴史研究の水準を、常に『義太夫年表 近世篇』の段階に保っておかなければならない、と筆者は考える。

ただし『義太夫年表 近世篇』は、興行年表としての性格上、番付の異同を徹底する一方で、浄瑠璃本については各年代の担当者が実見し得た任意の一本に拠る(複数点はみることを条件としたと伺う)としたために、初板初摺本に基づることが出来ていない。また作品名の読みは、典拠資料に記載されない限りは、補って記すということをしないので、作品名を何と読むのかは不明確である(索引篇の排列・五十音順の前後に拠って、およその推測は出来るが)。

作品名の読みは、前掲・内山美樹子氏「並木宗輔(千柳)作品一覧」がすべてふりがなを記しているので参考になるが、資料に基づくものか/推定に拠るものかの区別を示されない。

先行研究の欠を補うことを目的として、本稿では、

- ・ 作品名は、浄瑠璃本の初板初摺本の内題を採ること、
 - ・ 作品名の読みは、浄瑠璃本の初板本の包紙に基づくこと、
 - ・ 作者の署名は、浄瑠璃本の初板初摺本に基づいて記載すること、
- を原則として、「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」を作成したものである。

作品名の読みは、浄瑠璃本の内題および題簽には記されず、販売時に本を覆った包紙にふりがなとして記される。下の【写真1】は『日蓮聖人御法海』の包紙である。枠内左端(豊竹駒太夫の左側)に空白があるのはここにあった板元名を削ったためで、このことから後摺本に付された包紙だったと判るが、太夫の連名は初演興行のままである。浄瑠璃本の作品名の読みを知る第一の資料はこの包紙である。しかし包紙は本を最初に開くときに「封切」するものであるので、所蔵者が本に貼り付けるなど特別な工夫をしない限り、いつしか失われて

【写真1】『日蓮聖人御法海』七行本の包紙(豊竹呂勢太夫氏)



しまう性格の、稀少な資料であることが利用上の難点である。

ほかには番付や、絵尽の包紙、絵尽の内題にも通常ふりがながあるので、これらも作品名を把握する手掛かりとなる。ただし番付・絵尽は、初演興行の初日以前に作成する予告出版物であるので、初日以後にいわば事後に完成稿として刊行する浄瑠璃本の包紙こそを優先するべきことを強調したい。

また前年までに初演された作品から、道行や節事などの勝れて音楽的な部分を複数作から取り集めた「道行揃」という本が、十八世紀には年々歳々刊行されてきた。そのいくつかは、巻頭の目録の標題に作品名の読みをふりがなで記したものがあつた。浄瑠璃本の大字七行本・通し本が紋下太夫や作者の校閲を経たと考えられるのに対して、道行揃はそうした校閲を経ないと考えられるが、豊竹座の正本板元を勤めた正本屋西沢九左衛門の刊行である場合や、あるいは豊竹肥前掾初代新太夫の記念出版である場合などは、通し本に準じた資

料と捉え得るであろう。これらの道行揃に拠って、作品名を判断する点があるのが「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」の新工夫である。

作者の署名を「浄瑠璃本の初板初摺本に基づいて記載すること」は、『義太夫年表 近世篇』では編集の方針から当初から目標としておらず、また最新の研究成果である図録『並木宗輔展』ではなぜか徹底しなかった。たとえば『日蓮聖人御法海』の作者署名に、未改訂本と改訂本の二種があることは、黒石陽子氏と筆者の共編「実践女子大学図書館蔵浄瑠璃本目録」⁶⁾の、『日蓮聖人御法海』の備考に、

※同作七行本には、未改修本(作者連名二人目「安田蛙桂」と)(A)、改修本(「並木正三」)(B)とがある。

と注記したのが最初である。以後、前掲拙稿「近松没後義太夫節初演作品一覧(未定稿)」や、拙稿「近石春秋氏旧蔵の浄瑠璃本 附リ・浄瑠璃本目録(稿)」⁷⁾にも同様の注を記した。しかるに図録『並木宗輔展』は、改訂本を図版として、「資料解題」に改訂本の作者署名を翻字するに留まった。下に示す【写真2】が未改訂本、【写真3】が改訂本の作者署名である。

『日蓮聖人御法海』における作者署名の改訂の経緯については次々節に考察することとして、ここでは従来の並木宗輔の著作年譜類には作者の署名に関する調査を徹底し切らない憾みのあることを指摘しておきたい。

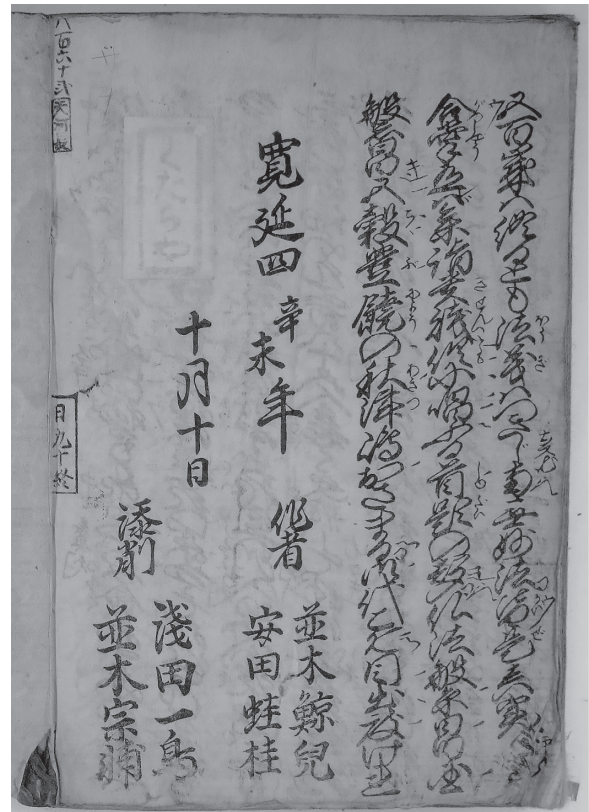
次に作品数について述べる。内山美樹子氏は『日本古典文学大辞典』「並木宗輔」項に「宗輔の全作品は浄瑠璃四十七」と数え、また前掲「並木宗輔(千柳)作品一覧」には四十六作品を並べている。後者がひとつ少ないのは、浄瑠璃本自体には署名のない『田村麿鈴鹿合戦』を除くためである。

「並木宗輔(千柳)作品一覧」の四十六作品に、本稿の「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」でいう、No.30『田村麿鈴鹿合戦』、No.34『義経新合状』、No.45『日蓮記児硯』を加えた、合計四十九作品が、没年までに成立した並木宗輔の作品の数である。

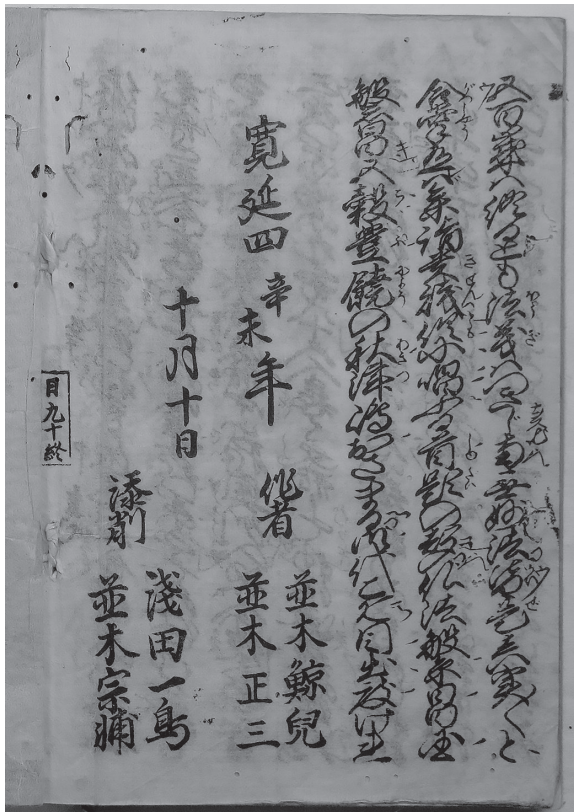
「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」では、並木宗輔の没後に成立したものではないが、宗輔の署名を有する作品、もしくは宗輔の署名作品の本文を部分的であつても再録した作品までを含めているので、この点を説明したい。

No.19『南蛮鉄後藤目貫』は上演禁止となつて、江戸の肥前座、大坂の豊竹座

【写真2】『日蓮聖人御法海』初板未改訂本(関東短期大学図書館松平文庫 072)



【写真3】『日蓮聖人御法海』初板改訂本(神津)



でそれぞれ改題・改作されて、段階的に復元されたことは、内山美樹子氏「南蛮鉄後藤目貫考」に詳しい。「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」の、

No. 50・No. 58・No. 61『義経腰越状』は大坂の豊竹座、

No. 55『泉三郎伊達目貫』は江戸の肥前座、

において、宗輔の没後に復元の進んだものである。

No. 59『後藤伊達目貫』・No. 60『増補腰越状』

は当該書名で上演されたかは不明であるが、No. 34『義経新含状』を改題したものである。これらはNo. 19『南蛮鉄後藤目貫』の改作として、宗輔の著作年譜に欠かすべきではない、と筆者は考える。

次に掲げる五作品は、宗輔著作を部分的に再録するところのあるもの。↑の下に流用元の商品名を示す。

No. 51『庭涼座鋪操』 ↑ No. 44『双蝶蝶曲輪日記』

No. 52『庭涼座鋪操』 ↑ No. 36『夏祭浪花鑑』・No. 41『義経千本桜』

No. 54『年忘座鋪操』 ↑ No. 35『軍法富士見西行』

No. 56『新舞台咲分牡丹』 ↑ No. 01『北条時頼記』・No. 38『菅原伝授手習鑑』

No. 57『嬢景清八島日記』 ↑ No. 14『待賢門夜軍』・No. 50『義経腰越状』

これらは再録にあたって宗輔の署名を省いているが、その著作をそのまま収録するものであるから、著作年譜の対象範囲だと考えた。⁹⁾

最後に、写本であって、「作者並木宗輔」の署名をもつ一本の残る、No. 53『苧萱左衛門墨染桜』について述べる。本作は『国書総目録』『古典籍総合目録』『義太夫年表 近世篇』にみえず、『早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録10』

「千葉胤夫(辻町)文庫 古浄瑠璃・義太夫節篇」¹⁰⁾において新出した稀書である。

写本が二点残る内、大倉集古館本は「近松門左衛門作」、辻町文庫本は「作者並木宗輔」と記し、また両本は本文にも異なるところがあるので、その成り立ちは未詳とせざるを得ない。しかしNo. 21『苧萱桑門築紫髻』の改作であり、のちの写本であっても宗輔の名を掲げる点からすれば(写本の本に署名のあるを以て著作と数えるNo. 19『南蛮鉄後藤目貫』の例に倣えば)、著作年譜に当然収めるべきだと考える。図録『並木宗輔展』は、これも落としていた。なお拙稿「近松没後義太夫節初演作品一覧(未定稿)」では、「苧萱桑門墨染桜」と誤記していた。本稿を以て、「苧萱左衛門墨染桜」と訂正したい。

今後も新たな資料の出現によって改稿の必要も生じると考えるので、筆者が「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」の作成に当たって確認し得た資料について、特に「資料残存」欄に略号を以て示しておいた。本稿を大幅に書き改めるような資料研究が進展することを願っている。

二、並木宗輔の肖像画

並木宗輔の肖像画は、享和三年(一八〇三)江戸丸屋文右衛門板『忠臣蔵岡目評判』に所載の図が知られるのみである。『忠臣蔵岡目評判』の著者は、滑稽本の作者・十返舎一九であるが、同人は大坂在住の折、近松東南の弟子として浄瑠璃本の作者「近松余七」と名乗ったのが作家業の始まりであった。『忠臣蔵岡目評判』は、十返舎一九が「予浪花にありし時」見聞した事柄を書き記したものと序文に謳う。『忠臣蔵岡目評判』は巻頭にNo. 42『仮名手本忠臣蔵』の三人の作者の肖像画を、大坂の浄瑠璃本作者(近松東南・並木千柳・若竹笛躬)の漢文の画賛とともに掲げる。

図録『並木宗輔展』「資料解題」は、

宗輔の唯一の肖像として貴重。ただし、出雲や松洛に比べ、およそ類型的な描線は、刊行が宗輔の歿後五十年以上を経ていたこととあわせ、肖像画としての信憑性にやや疑問を抱かせる。

と述べて、宗輔の「肖像画としての信憑性」に疑義を呈する。

内山美樹子氏「『仮名手本忠臣蔵』の作者——『忠臣蔵岡目評判』と並木宗輔」¹¹⁾は、

『忠臣蔵岡目評判』で、並木千柳については、実際には三好松洛より一歳上かとされるにもかかわらず、肖像画では三作者中の若手の如くに描かれている。

と述べる。図録『並木宗輔展』の説明「類型的な描線」は印象論なので理由になるまいと考えるが、内山氏の指摘する「三作者中の若手の如くに描かれている」点からは、たしかに宗輔の肖像画と理解することは出来ないと考えられる。

しかるに宗輔の肖像画の信憑性を疑うとなれば、『忠臣蔵岡目評判』の掲げる三好松洛と竹田出雲の肖像画は正しいのか、との疑問が同時に生じるのではないか。疑うならば、『忠臣蔵岡目評判』の資料性に関わる問題だと捉えるべ

きだと考えるが、結論から述べると、三人の肖像画はそれぞれの遺影を写した正しい図なのだと推定する。ただし竹田出雲と並木宗輔の肖像画を取り違えて掲出したもの、と筆者は理解するのである。以下に理由を述べる。

およそ肖像画は、命日・忌日に掲げて法要を営むための、仏具として作成されるものと理解するべきであろう。No.42『仮名手本忠臣蔵』の初演の年・寛延元年（一七四八）では、宗輔五十四歳、松洛五十三歳に相当するが、享年五十七歳の宗輔よりも、享年七十六歳の松洛がもっとも老人に描かれるのは最期の年齢に近い姿であるためと考えられる。一九はどのようにして三人の肖像画を入手したのか。大坂の浄瑠璃本作者らがそれぞれの遺族の元にある遺影から模写を作成し、画賛の原稿に添えて江戸へ送った、と考えるのが自然ではあるまいか。

並木宗輔の若さが疑問とされたが、筆者には、竹田出雲が年寄り過ぎる点の方が問題に思われる。

関根只誠氏編『名人忌辰録』⁽¹²⁾に、

竹田出雲千前軒 竹田近江の子、名清定。宝暦六年十月廿一日歿す。

年六十六

とあるが、この説が誤解であることは、はやく幸田成友氏「竹田近江と竹田出雲」⁽¹³⁾が指摘している。

幸田氏は所蔵する肖像画の、穂積以貫（近松半二の父）の讚に「竹田出雲掾定雄」の名のあることを紹介して、讚にある「天耶命耶、中天没身といふ言葉は六十六歳で死んだ出雲には相当せぬ文句である」との疑問から、

以貫が賛をした出雲定雄といふのは二代の出雲で、今まで出雲の没年と信ぜられてゐた宝暦六年が、此二代の歿年で而も彼は可成壮年で歿したのではないか。

と推定された。

三田村鳶魚氏「竹田八代」⁽¹⁴⁾は、幸田説を墓碑・過去帳と照合して、

清定は奚疑、定雄は立頭と考えられそうだと述べて、延享四年に没した元祖出雲を「清定」、宝暦六年に没した二代出雲を「定雄」と整理した。

No.42『仮名手本忠臣蔵』の作者「竹田出雲」は二代出雲である。二代出雲・

【写真4】『忠臣蔵岡目評判』「竹田出雲」肖像画

（立命館大学アート・リサーチセンター arcBK03-0033）



【写真5】『忠臣蔵岡目評判』「三好松洛」肖像画

（立命館大学アート・リサーチセンター arcBK03-0033）



定雄は「中天没身」、若くして死んだというのであるから、前頁【写真4】の姿では、お世辞にも若死にしたひとつとはいえない。

下の【写真6】は『忠臣蔵岡目評判』が「並木千柳」、宗輔だとして掲げる図、【写真7】は幸田成友氏の示す「竹田出雲掾定雄」の肖像画である。左右の向きや衣類の相異はあるものの、立て膝をして座る姿、年配格好は、似たとは思わくやっぱりそのまま、といえるのではないかな。

享年未詳ながら二代出雲は若くして没したのだ（遺影および穂積以貫の讃が根拠）という事実の上にみるならば、【写真4】が享年五十七歳の並木宗輔、【写真6】が二代出雲・定雄に該当するはずで、『忠臣蔵岡目評判』は、二代出雲と宗輔の図を取り違えて掲出したものだ、と理解できる。

宗輔・二代出雲の取り違えは、宗輔らの遺影の模写図と、大坂の浄瑠璃本現役作者（近松東南・並木千柳・若竹笛躬）の賛とが、別紙に記されて、江戸の一九へ送られたことに起因するのであろう。遺影および賛を一つの頁にまとめるデザイン・編集は、江戸の一九か板元の作業であつたと考えるが、三好松洛の享年は、浄瑠璃本『妹背山婦女庭訓』に記載されてひろく知られているために、松洛については間違えようがない。江戸の一九は、大坂の遺影の原図をみているために、取り違えに気付くことも出来なかった、と筆者は推考する。

この宗輔・二代出雲の取り違え説に異論があるとするならば、現在も竹田出雲に関する通説となっている、祐田善雄氏『浄瑠璃史論考』¹⁵の二論文、

①「竹田出雲の襲名と作品」

②「竹田近江・出雲の代々」

に基づいて考えた場合になろう。しかし祐田氏②「竹田近江・出雲の代々」の大前提となる理解、

『倒冠雑誌』や過去帳を研究して、元祖を奚疑、二代目を親方清定とする説が認められている

には甚だしい誤解がある。

拙著『浄瑠璃本史研究』の「付論 山本九右衛門の高麗橋二丁目への移転時期と、署名「竹田出雲掾清定」の初出資料」、および拙編『近松浄瑠璃善本集成』¹⁶第三卷「用明天王職人鑑」の「補説二 竹田出雲掾清定について」に指摘したように、清定の名は、浄瑠璃本の奥付にみえるもので、祐田氏の挙げる

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

【写真6】

『忠臣蔵岡目評判』「並木千柳」肖像画
(立命館大学アート・リサーチセンター arcBK03-0033)



【写真7】

竹田出雲掾定雄肖像画（幸田成友氏『読史余録』より転載）



『倒冠雑誌』や過去帳」や墓碑にはない。かつ「清定」の名前は元祖出雲の時代、享保十二年（一七二七）竹本座初演『三莊大夫五人嬢』初板未改訂本の奥付に初めて出たのであるから、清定を子・二代出雲の名だとする祐田説には根拠がないのである。

また祐田氏以前の先行研究が二代出雲の名前として紹介する「定雄」について、祐田氏②「竹田近江・出雲の代々」は、

穂積以貫が題書した「竹田出雲掾藤原定雄」についてはどうも分らない。

それを除いて出雲・小出雲の代々を考えてみる

と触れただけで、続けて自説を繰り返すのであるが、史料批判の方法・先行研究への向き合い方として、正しいあり方だとは筆者には思えない。

祐田氏の右二論文は句集や周辺資料を博搜するので、祐田氏が作成した系図・系譜に、宝暦に没した出雲の享年を六十六歳と注記したことにも『倒冠雑誌』や過去帳」や墓碑に根拠があるのであるとみえるのだが、前掲『名人忌辰録』以外に享年「六十六歳」を伝える資料は確認できないし、祐田氏もそれ以外の典拠を示していない。『名人忌辰録』の竹田出雲に関する情報は、幸田成友氏の竹田出雲掾定雄の肖像画の存在に拠って否定される。

筆者はこれまで「清定」の名前を、祐田説の二代出雲でなく、元祖出雲へ移項させるべきことを指摘してきたが、加えて「清定」の名前とともに、享年「六十六歳」も元祖出雲へ移項させて捉えることを本稿を以て提唱する。『名人忌辰録』の竹田出雲の情報を、名前「清定」・享年「六十六歳」をひとまとめにして、宝暦に没した二代出雲でなく、延享に没した元祖出雲へ移項させて捉えるのである。

顧みて『名人忌辰録』の所説および祐田氏の竹田出雲理解が真ならば、『忠臣蔵岡目評判』の三作者の肖像画は、七十八歳・六十六歳・五十七歳の老人三人で描かれていなければならなかったはずである。へふたりの老巧の作者とひとりの若者」という『仮名手本忠臣蔵』の作者の年齢構成を——宗輔と二代出雲を取り違えているとはいえ——、『忠臣蔵岡目評判』は正しく伝えていたことに気付くのである。

三、『日蓮聖人御法海』初演興行と並木宗輔追善

『日蓮聖人御法海』の初演興行について、角田一郎氏「並木宗輔伝の研究」⁽¹⁷⁾は没年を宝暦元年と考証した上で、

寛延四年即ち宝暦元年の九月七日の死であるとする、翌月の十月十日初日豊竹座上演の『増補日蓮聖人御法海』は追善興行に当る。

と解釈された。内山美樹子氏「菅原伝授手習鑑」などの合作者問題」は、No.40『いろは日蓮記』の執筆時期に考える中で、「宝暦元年十月豊竹座で、本作に一部手を加えた宗輔追善浄瑠璃『日蓮聖人御法海』」云々と述べて、角田氏の解釈を支持する。⁽¹⁸⁾

角田氏前掲論文の「還俗後の宗輔は、やがて日蓮宗の信者となり、本門派の本覚寺にその墓を残している」との説明に加えるべきは、『日蓮聖人御法海』の成立に関わった太夫たちも日蓮宗の信者であった点である。豊竹座の創業者であり、宗輔を浄瑠璃本の作者として迎えた豊竹越前少掾初代若太夫そのひとは、日蓮宗の信者で、法号を「一音院真覺隆信日重居士」という（墓は大阪市中央区中寺・本経寺）。三段目切「勘作住家」を初演した豊竹筑前少掾（初代竹本此太夫・陸奥此太夫）⁽¹⁹⁾も同じく日蓮宗の信者で、法号を「法音院宗普日聞信士」という（墓は大阪府北区我野町・本伝寺、大阪府中央区中寺・正法寺にある）。

また『日蓮聖人御法海』の原作である、No.40『いろは日蓮記』を初演した江戸の肥前座の紋下太夫・豊竹肥前掾初代新太夫は、戒名を「春応院丸蛙井居士」というので、日蓮宗ではないらしい。墓所が不明なので宗旨は定かでないのだが、肥前座は東京都豊島区南池袋・法明寺の「雑司ヶ谷鬼子母神堂」に肥前掾の供養塔を営み、座本は月参りを続けていたと伝わる。⁽²⁰⁾

死去直後に宗輔の旧作の中から、故人の宗旨である日蓮宗の開祖・日蓮の一代記を描いたNo.40『いろは日蓮記』の改作が行われたことは偶然ではないだろう。日蓮宗は葬送する側の豊竹座首脳陣（座本・豊竹越前少掾、紋下太夫・豊竹筑前少掾）の宗旨でもあり、宗輔追善の志を以て選んだものと理解する。

『日蓮聖人御法海』初演興行において、豊竹越前少掾に宗輔追善の意志があったことは、宗輔の絶筆『一谷嫩軍記』の初演興行に続けて、宗輔の初署名作品『北条時頼記』を再演した点からも、明らかだと考える。『一谷嫩軍記』初演興

行に続いて、『北条時頼記』が再演されたと考える根拠は、下に示す包紙である。豊竹座では、宝暦元年十月『日蓮聖人御法海』興行に続けて、十二月に『一谷嫩軍記』を初演した。【写真8】は『一谷嫩軍記』の初板七行本の包紙である。これに当該興行の出演太夫の連名が載るが、【写真9】『北条時頼記』再板七行本の包紙の太夫連名は、『一谷嫩軍記』に同じであり、かつ初代時太夫の改名「八重太夫事」の注記が無くなる。『一谷嫩軍記』が先で、『北条時頼記』が後に出たものと判断できる。

また宝暦二年十二月『倭仮名在原系図』初演興行では、友太夫が抜けて、盛太夫・志賀太夫が加わる。『義太夫年表 近世篇』はこの事情について、『倭仮名在原系図』初日以前の、『一谷嫩軍記』の初演興行が続く一時期に、『北条時頼記』の一部を添えた形の上演がなされた」と推定した。しかし『北条時頼記』の浄瑠璃本の諸本関係を考えた場合、一部では無く、五段続きの通し・立てだったと筆者は推定する。

No.01『北条時頼記』の通し本・七行本には、初板と再板の二板があり、初板には内題下の作者署名を埋木して改めた本が残る。豊竹越前少掾は、延享二年（一七四五）十一月『北条時頼記』再演興行で、三段目切と、五段目節事「女はちの木」を語って、引退した。内題を「花筐女鉢木」とする五行本を引退の配り本にすることも合わせて、豊竹越前少掾は『北条時頼記』という作品を、自身の代表曲と認識していたといえるであろう。

【写真10】は『北条時頼記』七行本の初板未改訂本である。内題下の作者署名を「作者 西沢一風・並木宗助」と記す。【写真11】は内題下を「作者西沢一風」と埋木した初板改訂本である。【写真11】の改訂本は、奥付の前後の時期の使用状況から推定して、延享二年十一月の引退興行時に刊行されたものと考えられる。

次頁の【写真12】は、『北条時頼記』七行本の再板本である。初板未改訂本と同じく、内題下の作者署名を「作者 西沢一風・並木宗助」とするが、部分的な修訂でなく、全丁の板木を新たに彫り直したものである。再板本の初摺は、奥付の使用状況から、宝暦元年から二年の頃と考えられる。『一谷嫩軍記』初演興行に続いて、『北条時頼記』が再演された際に再板本が出たと考える。

『北条時頼記』の初板・再板において作者署名が変遷する理由を、次のよう

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

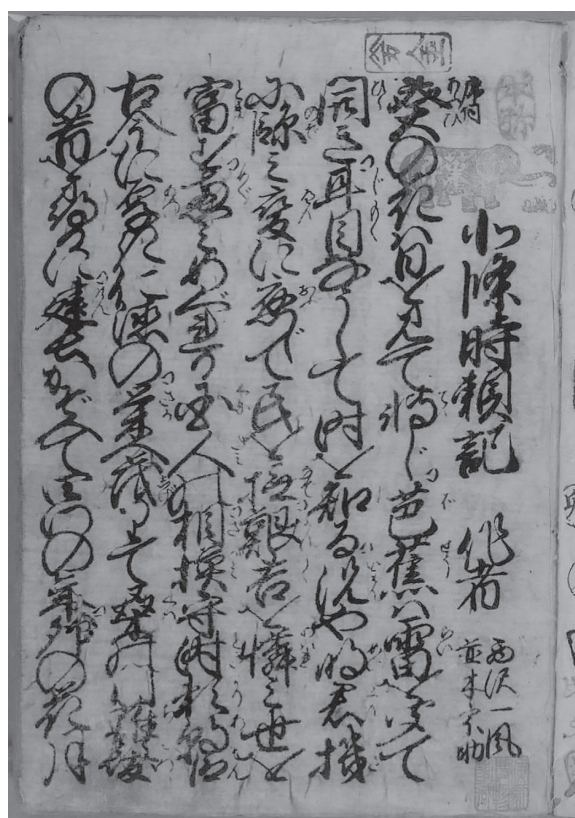
【写真8】 『一谷嫩軍記』初板七行本の包紙（原道生氏）



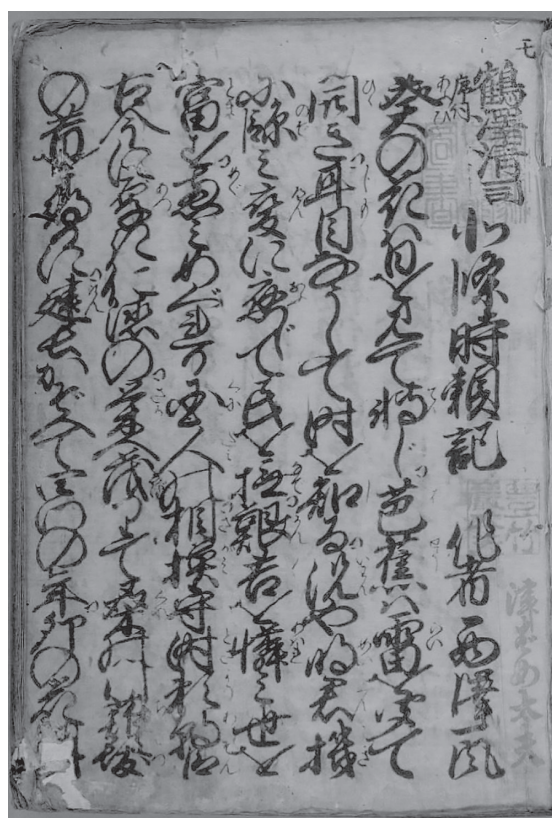
【写真9】 『北条時頼記』再板七行本の包紙（関西大学図書館 911.7*N2*03）



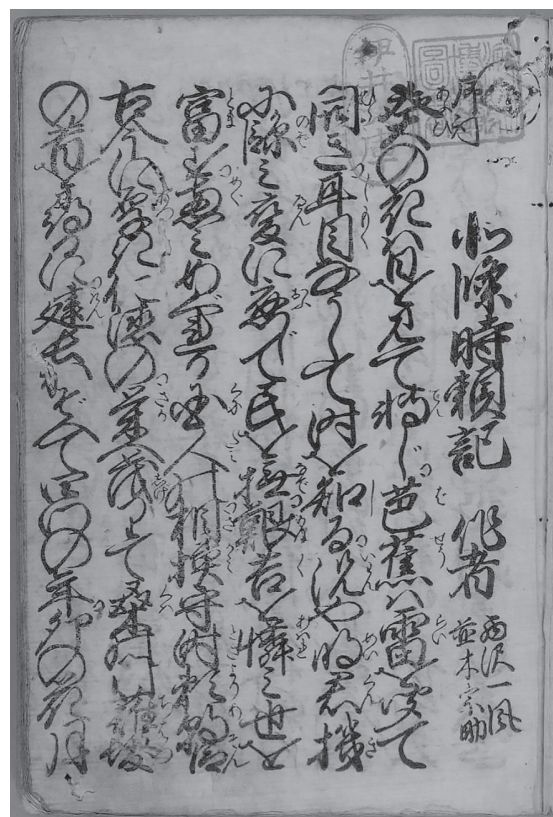
【写真10】『北条時頼記』初板未改訂本（早稲田大学演劇博物館Ⅱ10-00002-725）



【写真11】『北条時頼記』初板改訂本（早稲田大学演劇博物館Ⅱ10-01616）



【写真12】『北条時頼記』再板本（早稲田大学演劇博物館Ⅱ10-02206）



に解釈する。第一に初演から十九年を経て、延享二年十一月に「西沢一風・並木宗助」の連署から、「西沢一風」単独署名へと改めた理由は、宗輔が直前の頃、延享二年初めから竹本座へ移籍したことに原因がある。宗輔が豊竹座を離れて、ライバルである竹本座へ移ったことを、越前少掾が不快としたためだったと筆者は解釈する。

第二に越前引退から六年を経て、宝暦二年に「西沢一風」単独署名から「西沢一風・並木宗助」の連署へと改めた理由は、宗輔が竹本座を離れて、ふたたび豊竹座へ帰ったことを、越前少掾が多としたためだったと解釈する。

『日蓮聖人御法海』の場合でも、作者署名の二人目を「安田蛙桂」とする未改訂本と、「並木正三」とする改訂本があることは前々節にも触れた。『日蓮聖人御法海』の「安田蛙桂」が削られた原因は、『一谷嫩軍記』初演の時点で同人が「中邑閨助」と改名して竹本座へ移籍したことにあるのだらう。²⁴⁾

浄瑠璃本の作者署名は、初演の書き下ろしの作者を掲げて「誰が書いたのか」を標示する目的で記載したのであるから、年次も下って再演した時点で、当該劇団に所属するか否かによって加除することは不合理ではある。しかし『北条

時頼記』『日蓮聖人御法海』の作者変遷の事例は、豊竹越前少掾において作者の署名を載せさせるか否かを、賞罰意識を基に判断するために生じたもの、と捉えられよう。

『二谷嫩軍記』初演興行に続く、宝暦二年の『北条時頼記』再演興行では、『写真9』の包紙を新たに作成して、再演興行に出演する太夫の連名を示していた。部分再演の場合であって、包紙を既刊の板木で増摺するのでなく、新たに板木を起こした例を筆者は知らない。また本文についても、延享二年十一月の越前少掾引退興行時には、初板の板木を再利用して増摺したのであるが、宝暦二年の再演興行では全九十三丁、両面板で四十七枚をすべて新刻している。再板本は、包紙から題簽、本文に至るまで、すっかり造り替えしたもので、板元の投資する費用は、初演興行に対するのと異なるところはない。これほどの態勢で臨む再演興行が、部分的な上演に留まったとは考えにくいではないか。

義太夫節の人形浄瑠璃史上、最初のヒット作は正徳五年（二七一五）竹本座初演『国性爺合戦』で、「三年越し」足掛け三年のロングランを記録した。次なる「三年越し」が、豊竹座の享保十一年（二七二六）『北条時頼記』である。宝暦七年（一七五七）豊竹座『祇園祭礼信仰記』が初演されるまでは、三年越しのロングランは、『国性爺合戦』と『北条時頼記』に限られたもので、この点において宗輔は近松門左衛門に唯一匹敵する作者であった。

一度は削った宗輔の名を、ふたたび刻み入れたのが『北条時頼記』再板本を新板した意義である。すなわち宗輔の名誉回復の意味を込めて、『北条時頼記』は再演されたものと理解するのである。

宝暦元年九月七日の宗輔死去後、豊竹座では、

宝暦元年十月 『日蓮聖人御法海』初演

宝暦元年十二月 『二谷嫩軍記』初演

宝暦二年 『北条時頼記』再演

の三作品を上演した。角田一郎氏・内山美樹子氏が述べられたように『日蓮聖人御法海』は、並木宗助の追善興行として位置付けられた、と考える。ただし宗輔追善興行は、『日蓮聖人御法海』一作に留まるのではなく、宗輔の絶筆『二谷嫩軍記』と、宗輔の初署名作品『北条時頼記』とを続けて再演した、一年余りの間の、一連の興行の全体が該当したものだ、と筆者は考える。

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

盟友を送るためばかりではなく、一度はその名を奪ったことの越前少掾の悔悟がともにあるからこそ、人形浄瑠璃史上に前後に例の無い、一年余りの連続興行を以て、手厚く追善されたのだ、と筆者は解釈する。

四、『日蓮聖人御法海』再演興行と初代豊竹麓太夫の関わり

『日蓮聖人御法海』は宝暦元年（二七五二）十月の初演のあと、上演は絶えた。初演から五十一年後、初代豊竹麓太夫が享和二年（二八〇二）十月十五日初日、大坂北堀江市之側西側芝居で五段続の通し・立てとして再演したことによって再生され、こんにちに伝承されるに至った。下の【写真13】が享和二年十月『日蓮聖人御法海』再演興行の番付である。

『日本古典文学大辞典』第四卷「日蓮聖人御法海」項（井口洋氏執筆）は、本作について「この作自体の増補も後年（享和三年（二八〇三）かと推定）になされている」とする。これは『近世邦楽年表 義太夫節之部』の「日蓮聖人御法海」初演の脚注に、

今日行はるゝ二段目切弥三郎内の場合は後に（享和三年十月か）増補せしものなり。

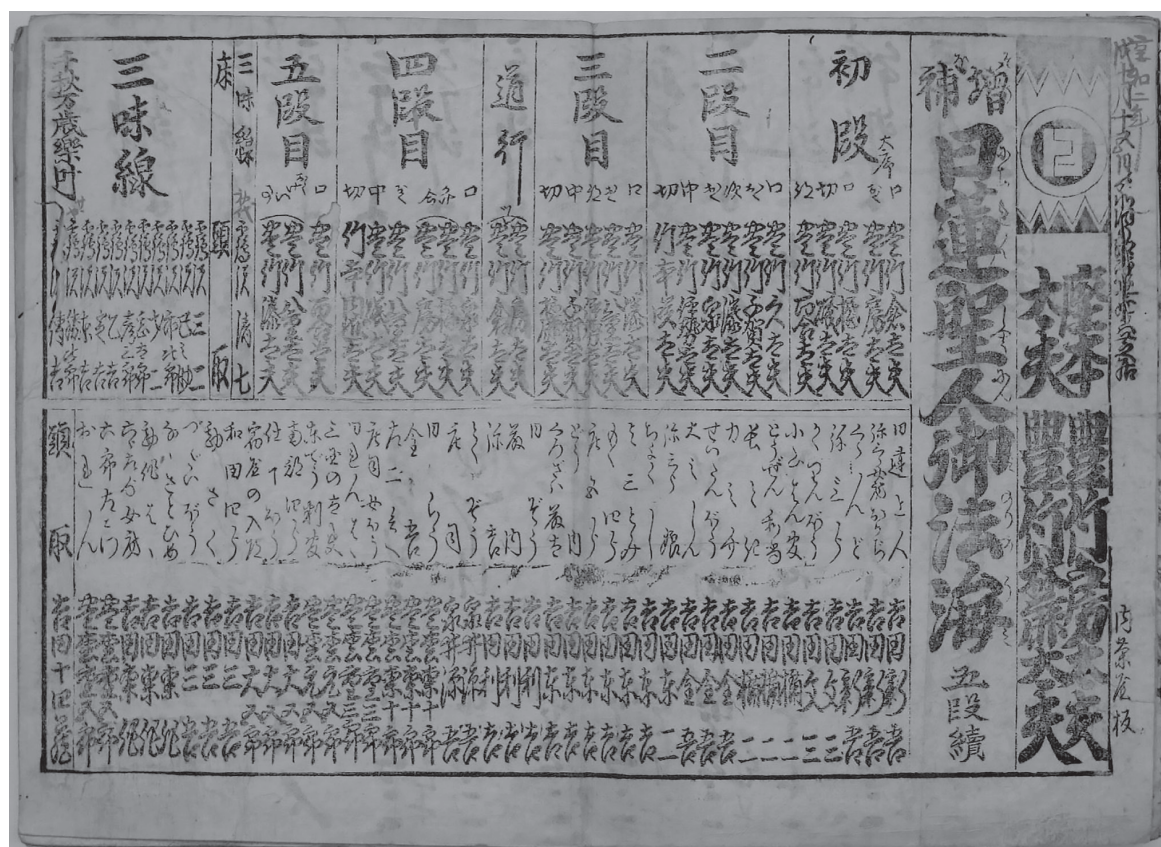
とあることに基づく記述と考えられるが、『近世邦楽年表 義太夫節之部』に「享和三年十月」の本作の再演記録はなく、これは前年・享和二年十月の年数を誤植したものである。

次頁下の【写真14】の大坂板五行本は、内題に「増・補／日蓮聖人御法海式段目の切」と記す。前表紙に掲げる段名「弥三郎住家」が『近世邦楽年表 義太夫節之部』のいう「二段目切弥三郎内の場合」に相当する。前表紙に掲げる配役「竹本咲太夫・鶴沢伝吉」のふたりは、享和二年十月『日蓮聖人御法海』再演興行にともに出演しており、かつ三代竹本咲太夫は「二段目切」を勤めている。

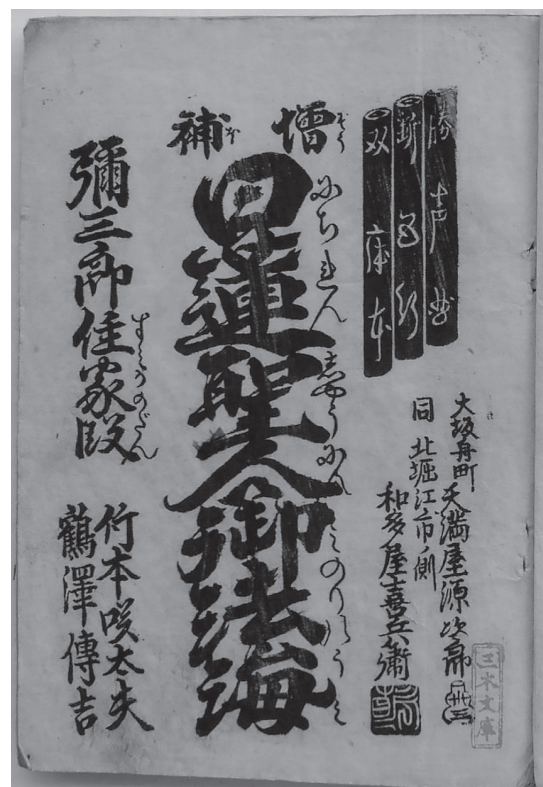
人形浄瑠璃の番付では、段数（初段・二段目・三段目…）と段区分（口・中・切など）を組み合わせて、太夫の持ち場を示すのが古風である。段名を常用することは、浄瑠璃本の抜き本において先行したもので、番付は遅れて段名を記載するようになった、というのが人形浄瑠璃の歴史である。

『日蓮聖人御法海』の上演史では、文化五年（二八〇八）閏六月・名古屋稲荷

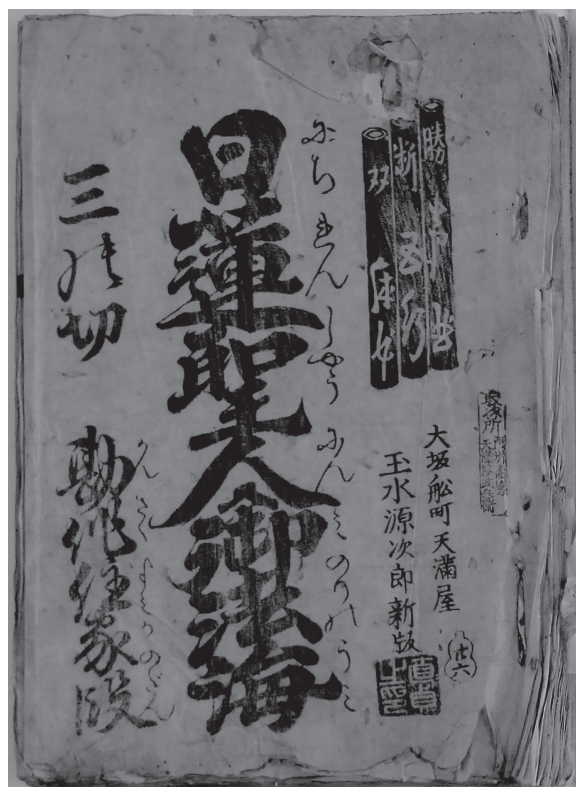
【写真13】『日蓮聖人御法海』享和二年十月興行の番付（大阪音楽大学楽器資料館蔵）



【写真14】『増・補／日蓮聖人御法海 式段目の切』五行本（三木文庫 W912.4/N2/1）



【写真15】『日蓮聖人御法海 三の切』五行本（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館蔵）



芝居興行の番付が、段数・段区分でなく、段名で標示した最初になる。これを見ると『日蓮聖人御法海』本来の二段目切「土牢の段」のあとに続く、「八幡の段」「弥三郎住家曼荼羅奇瑞の段」が原作『日蓮聖人御法海』に無い場面である。享和二年十月興行番付でいえば、二段目の中が「八幡」、同切が「弥三郎住家曼荼羅奇瑞」に相当したものと推定する。享和二年十月、文化五年閏六月はともに初代豊竹麓太夫が紋下を勤める、彼の劇団である。

増補二段目切「弥三郎住家」は、大坂板五行本が前表紙・内題に「増補」の二字を記し、太夫・三味線の配役を掲げるので、原作に異なる改作であることが明らかなので、はやく『近世邦楽年表 義太夫節之部』の段階でも触れられたが、増補とも標示せず、また配役情報も掲げていない、三段目切「勘作住家」について、初演本文とは異なる、改訂本文で伝承されていることを指摘した例を筆者は寡聞にして知らない。

【写真15】は、内題「日蓮聖人御法海 三の切」、大坂・天満屋玉水源次郎板の五行本の前表紙である。大坂板五行本は多くの場合、通し本から本文を抜き出したもので、上演本文の変遷を辿るための参考にはならないのであるが、本作「勘作住家」の場合は通し本と異なる、添削が施されている。「勘作住家」大坂板五行本は誰の添削を伝えたものなのか。結論をいえば、初代豊竹麓太夫以外には考えられない。初代豊竹麓太夫の添削だと判断する理由は、大坂板五行本が刊行された時期に「勘作住家」を語った太夫が彼以外にいなかったためである。

大坂の浄瑠璃本板元らは「大坂草紙屋仲間組合」を組織して、自身らが蔵板する抜き本の出版目録『五行・六行／浄瑠璃外題目録』を寛政七年（一七九五）三月に刊行した（以下、『浄瑠璃外題目録』と略す）。『浄瑠璃外題目録』寛政七年板に『日蓮聖人御法海』のタイトルはみえない。『浄瑠璃外題目録』文化三年板⁽²⁸⁾になって初めて「○日蓮聖人三の切勘作内 廿六丁」とみえる。【写真15】の瓢箪の中の数字が、『浄瑠璃外題目録』の掲げる丁数と一致するので、「日蓮聖人御法海 三の切」の五行本は、寛政七年から文化三年までの間に開板されたと特定できる。

『日蓮聖人御法海』の再演は初演から五十一年後の、享和二年（一八〇二）十月まで下がることは前述した通りである。文化三年三月までの上演記録を確か

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

めると、

- ・享和二年（一八〇二）十月 大坂北堀江市之側西側芝居
- ・享和三年（一八〇三）二月 大坂北の新地芝居
- ・文化二年（一八〇五）十月 大坂道頓堀大西芝居

の三興行があるが、いずれも初代麓太夫が紋下を勤める興行で、かつ三段目切はすべて初代麓太夫が語った。大坂板五行本が写し取ることの出来た興行は初代麓太夫の演奏だけだったのであるから、大坂板五行本の独自本文は、初代麓太夫の添削によるものと考定できる。

初代豊竹麓太夫は、熱心な日蓮宗の信者である。法号は「覚種院從縁日起居士」といい、大坂千日前の自安寺に墓碑があったが、現在は失われている。前述の文化五年（一八〇八）閏六月・名古屋稲荷芝居『日蓮聖人御法海』興行について、『猿猴庵日記』に次の記述がある。

麓太夫志願にて、先年、法花寺町本成寺焼失して、未だ再建半なる寺へ寄進として、芝居の札を出し、其札を信俗或は旦那講中へ配り、見物の男女かの会式の段には御題目をとへ、賽銭十二銅を投る夥し、是を集めて本成寺へ奉納するとぞ。此時舞台正面にかゝる題目の名号は、麓太夫の蔵物にて、世に稀成大切の一軸と言へり。

焼失した寺への寄進は当局から興行の許可を得るための方便ともなるが、「世に稀成大切の一軸」である「題目の名号」を所蔵していたということからはたしかに初代麓太夫の日蓮宗への信心の深さが知られるであろう。

また初代麓太夫が初演した寛政十一年（一七九九）七月『絵本大功記』発端では、尾田春長の滅んだ理由を、日蓮宗の僧の恨みが、日蓮宗の寺・本能寺の「御法の庭の露となす。仏の報ひ宗門の威力」として実現したものと設定する。同じく初代麓太夫の初演による、文化四年（一八〇七）九月『八陳守護城』は、直前のころ日蓮宗において新たに聖人とされた「清正公 せいしようこう」加藤清正を主人公として脚色した。

加えて初代麓太夫の活動のひとつには、豊竹筑前少掾（初代竹本此太夫・陸奥此太夫）の初演曲を継承しようとの意志があったと考えられる（次々節に後述）。日蓮宗の信仰から来る関心と、本曲が筑前少掾の初演曲であったことの二点を理由として、初代麓太夫は『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」を手掛け

るに至ったと推定する。

初代麓太夫は前述した四興行のあとにも、

・文化六年（一八〇九）十月 大坂北はり江市の側芝居

・文化十二年（二八一五）十月 大坂座摩社内芝居

に勤めて、生涯に「勘作住家」を六回語っている。

上演回数からも、また本文の施した添削の具体相からも、初代麓太夫が本曲「勘作住家」に寄せた関心の深さを理解出来るように考える。

五、初代豊竹麓太夫による「勘作住家」の改訂本文

本節では、初代豊竹麓太夫が『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」に施した添削の具体的内容をみる。参考のため、一六〇(47)頁以下に、『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」本文対照表」(以下「勘作住家」本文対照表」と略す)をまとめ、原作『いろは日蓮記』、『日蓮聖人御法海』初演本文、同改訂本文の異同を示した。

『日蓮聖人御法海』の物語の全体は、初段に日蓮の出家、二段目は「伊豆の法難」、三段目は「龍の口の法難」と「石和川鵜飼石の奇跡」、四段目は「甲斐国身延山」入山、五段目は「武蔵国本門寺での入滅」と、日蓮の受難の一生を描く。以下に、三段目口のあらすじをまとめる。

三段目口「鎌倉御所」。文永八年（一二七二）九月十二日の出来事を描く。鎌倉幕府の五代執権・北条時頼は、浄瑠璃本の世界では善政を布いたひとと設定する（宗輔『北条時頼記』や、『撰州合邦辻』など）。史実の時頼は、日蓮の『立正安国論』を拒絶した執権であるが、本作の時頼は往生浄土を願い「近国の川々」へ禁断の場所を設けて殺生（狩猟漁獵一般）を禁制し、座禅の間に籠もってしまう。北条長時が代行する間に、硬直した官僚主義が鎌倉幕府を覆った、と設定することで、史実の時頼と、浄瑠璃本の世界・人物設定との調和を図ったのが本作および原作『いろは日蓮記』での宗輔の工夫である。

長時の父重時は難病に苦しみ、唐土の医者伯夷軒の「申の年申の月申の日。申の刻に生れた男子の胆を取て用ひ」と平癒するとの診断によって、「其日刻限違ひなき生れの者。金銀をあたへ命を買取」る、と決する。

碁にかかつて政務を疎かにする長時を利用して、平ノ大膳（いろは日蓮記）

では平ノ左衛門」は、日蓮を死罪と定める。やがて御殿に変異があり、法花の行者を殺すにおいては現罰あたへ子孫を断べし。怨をなしたる太刀取がなれる果を見よ

と雲中からの声とともに、龍の口へ向かった大膳の首が投げ込まれる。

同「行合川」。日蓮の赦免を告げる急使・四条金吾と、龍の口での怪異を急報する本間六郎左衛門が途中で行き会う。

同「龍の口」。日蓮は行方も告げず、鎌倉を去る。

三段目切「勘作住家」は、甲斐国「波木井の里。生沢川の浜先」の貧家が舞台となる。「勘作住家」端場。勘作は「元は下総平賀の何某。」といった武士だったが、零落して鵜飼となった。勘作は禁断地で漁をした罪で囚われた。庄屋の徳蔵の機転で五十貫の科料で許されることとなるが一家は金策に苦しむ。折しも来合わせた本間六郎左衛門は、勘作の子・経市が「申の刻限揃ふた」誕生と知って、百両で買い取る。勘作の老母は理由を質さず、勘作を救うために孫経市を売ってしまう。庄屋は百両を預かって勘作の釈放に向かう。

『日蓮聖人御法海』の初演では、本間六郎左衛門が経市を連れて去るまでが端場で、老母が庄屋に百両を預ける件は切に含まれた。大坂板五行本では、勘作の妻・お伝の帰宅以降を描くので、初代豊竹麓太夫は、再演に当たって、端場から切に交替する箇所を変更したことが判る。なお原作『いろは日蓮記』の端場はもつと長く、「勘作住家」本文対照表の段落No.05までが端場、段落No.06の「お伝は跡を。」からが切となる。

三段目切「勘作住家」切のあらすじは次の通り。

妻お伝は金策出来ずに帰宅し、出先で聞いた「鎌倉幕府が生胆を取るため、申の年月日刻の揃った男子を探す」という噂を話すと、老母は動揺する。勘作が帰宅すると、老母は経市を売ったことを悔いて、自害する。そこへ庄屋が勘作の死骸を運んで来、さきほどの勘作は幽霊であったと知られる。夫勘作・子経市・義母を一日で失ったお伝は、生沢川へ身投げしようとするが、日蓮聖人の奇跡が救う。

原作『いろは日蓮記』と『日蓮聖人御法海』をみると、「勘作住家」本文対照表」でいう段落No.30・段落No.31が大きく異なる。段落No.28・No.29で勘作の遺骸を生沢川へ浮かべ、「冥途の苦しみを。此世ではらす現世の責。」と、鵜や魚

に責めさせて、日蓮は「あまたの石に一字づゝ。七字の題目かきあらはし。なげ入」れ、かつ「ながれにむかつて題目を日朗もろ共」に書き、「水ながれの題目」の奇跡をみせる。この奇跡を受け止める主体が、原作『いろは日蓮記』では段落No.30の勘作、『日蓮聖人御法海』では段落No.31のお伝、と改まる。

原作『いろは日蓮記』段落No.30では、勘作の遺骸が起き上がり、救済を悦び詞を発して水へ飛び入ると、「忽七字の題目の光りを。放つて飛さ」る。次頁上【写真16】『いろは日蓮記』絵尽をみると、水面の勘作から「南無妙法蓮華経」の文字が飛び上がるように描く。実際の舞台では二ノ手摺を水面として、勘作の人形を手摺に沈めると同時に、金か銀で彩色した「南無妙法蓮華経」と描いた板を舞台上方へ引き上げてみせたものと考ええる。

『日蓮聖人御法海』では、勘作の成仏は段落No.29で起こり、「勘作が死骸は浪に入よと見へしが。書せ給ひし七字の題目。浪に有く頭はれ」る。次頁下【写真17】『日蓮聖人御法海』絵尽をみると、戸板の勘作と並んで、「南無妙法蓮華経」の文字は水面に描かれている。実際の舞台では勘作を乗せた戸板を半回転させて、戸板の裏面に描いた、水面に浮かぶ「南無妙法蓮華経」の文字を見せたものと考ええる。「水流レの題目」の形象化としては後者が相応しいように筆者には思われる。

『日蓮聖人御法海』段落No.31で、「水流レの題目」の奇跡を目撃したお伝が「目の前夫が仏果の縁。」と、勘作の成仏を確信して、日蓮の弟子となる経市に対して「先立給ふ姑御や。我を浮めてたもいの」と願う。このお伝の詞に、段落No.32で「一子出家のくどくにて九族天に生ぜん事。何疑も」ないではないか、と日蓮がほほ笑みながら応える。原作『いろは日蓮記』では、勘作が詞を発したあとは、誰も発話せずに終わっていた。『日蓮聖人御法海』はここに、お伝・経市母子の最後の別れと、日蓮が微笑しつつ見守るという場面を加えた。日蓮という大宗教者に、人間的な姿を添えてみせたところに、改作の成功があった、と筆者は考える。

『日蓮聖人御法海』初演本文と初代豊竹麓太夫の改訂本文をみると大きなところでは、『日蓮聖人御法海』の段落No.17・No.18にあったお伝の愁歎を、大坂板五行本が削除した点が異なる。また段落No.26の*04・*05の、日蓮が到着した様子を、原作『いろは日蓮記』は「日蓮しづ／＼御入有。」「日蓮聖人御法海」

初演本文は「日蓮しづ／＼御出有。」とするのに対して、大坂板五行本では「末法有縁の大導師。高祖日蓮大聖人しづ／＼と。立寄給ひ。」と改める。これは『いろは日蓮記』『日蓮聖人御法海』の大序の冒頭にある「末法有縁の大導師。高祖日蓮大菩薩は。」を、ここにも繰り返したものである。このほかの微細な改訂を含めれば、全体で百九十二箇所に添削を施している。

多くの箇所で見られる接尾語が増え口語化がより進む（段落No.02の*01「ホ、待兼た」が「ヲ、待かねましたはいの」、同*04「調ふた」が「調いましたはいの」など）ほか、七五調に改める箇所がある（段落No.07の*01「打しほれて門口より」六・六を「打しほれたる門の口」七・五、段落No.09の*14「奥へ行を」六を「立上る裾」七など）。全体の方針として、口調の良いように改めたといえる。

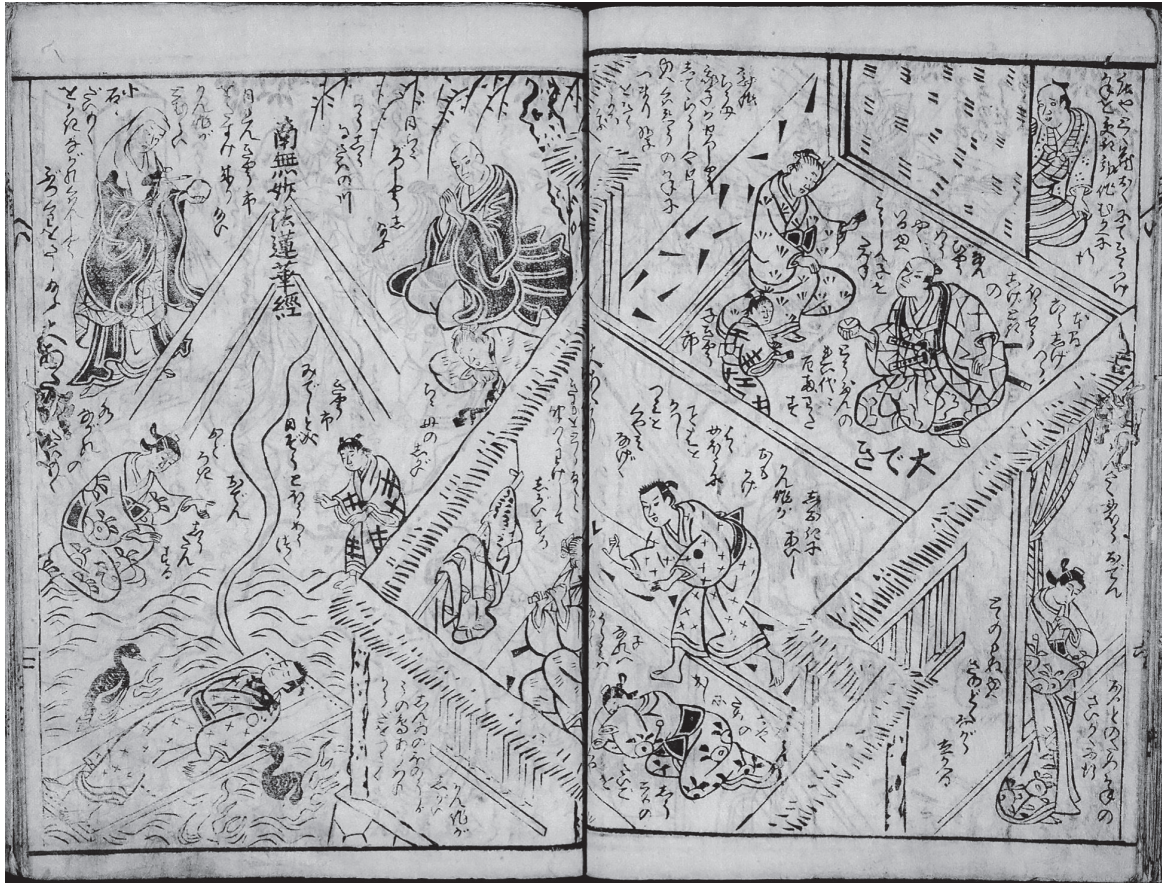
口調を整える中で、文意を失う箇所も生じる。段落No.09で、勘作の母が帰宅した勘作に「まめで戻つてたもつたか」と泣くのを、お伝が「なんぼ嬉し涙でも不吉」であると窘める件。初演本文では老母のいう「健（まめ）」から、お伝は*10「連合は猶しめり豆」と、豆（まめ）へと言い換えて転じ、祝い直すのであるが、改訂本文は言い換え部分を削るので「転じかへ」が成り立たず、また「打潤ふて悦んだがよござんす」では意味が通じない。稿を改めて詳述したいが『鎌倉三代記』『三浦別』でも改訂のために、縁語による行文が成り立たなくなる箇所がある。縁語・掛詞に弱いというのが、初代麓太夫の添削のマイナス面だと考える。

何より劇の主題に関わる点で問題だと考えるのは、段落No.31のお伝の詞である。経市に願う内容が、初演本文では「先立給ふ姑御や。我も浮めてたもいの」とあつて、勘作の母とお伝の二人の成仏なのだが、大坂板五行本では「先立給ふ祖母様やと、様我も浮めてたもいの」と、勘作と勘作の母にお伝の三人を挙げてゐる。

原作『いろは日蓮記』では勘作の遺骸が起きて成仏を喜んだ。原作ほどには明示的ではないにもせよ、『日蓮聖人御法海』初演本文でもお伝は「目の前夫が仏果の縁」と伏し拝んで感謝している。大坂板五行本でも同様なのだが「と、様我も浮めてたもいの」では勘作も成仏していないことになり、「水流レの題目」の奇跡が無かったことになってしまう。成仏を願う対象に「と、様」を加えたこの一点は、初代麓太夫の改訂本文の疵である、と筆者は評価する。

【写真16】『いろは日蓮記』絵尽

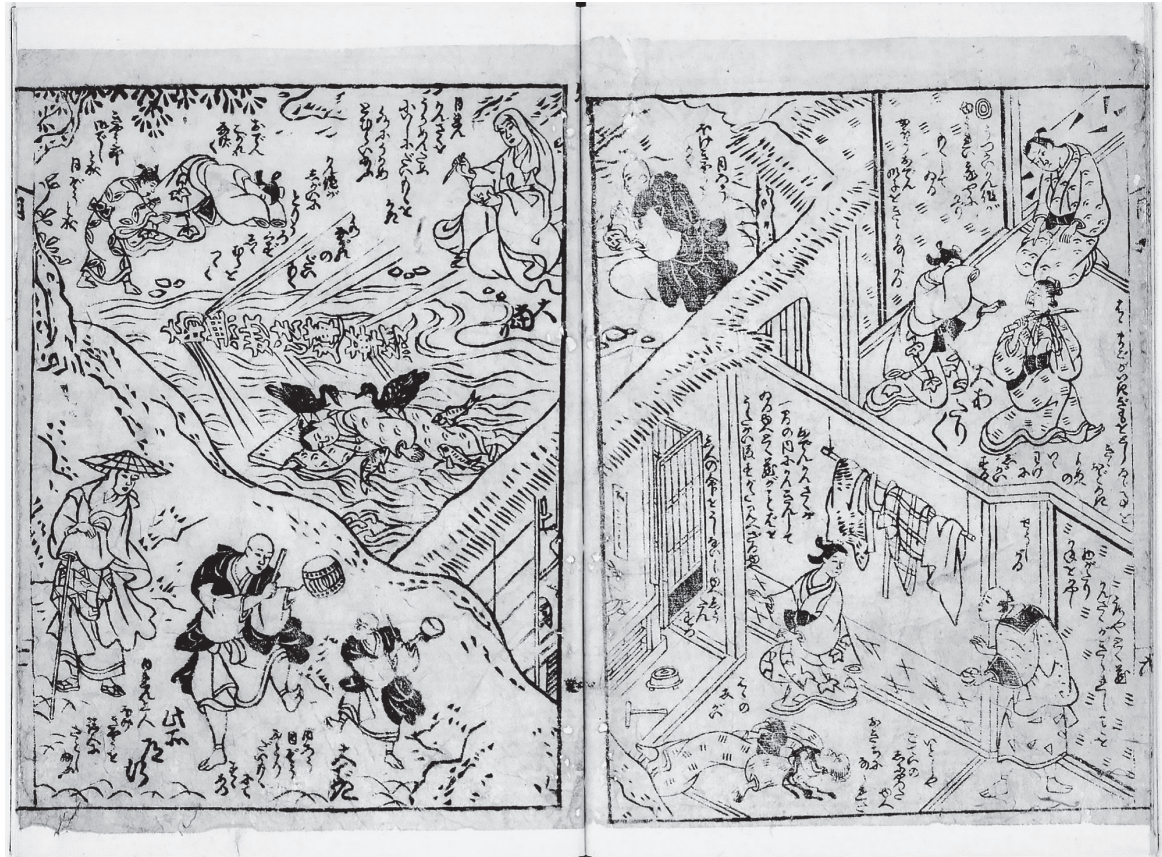
(慶應義塾三田メディアセンター 209-277-11 棟1-09)



【写真17】

『日蓮聖人御法海』初演絵尽

(天理大学附属天理図書館 911.7-4-0303-41)



日蓮は勘作の罪障を滅ぼしたばかりでなく、段落No.28で「老母が後世も弔はん」「三本とも一致した表記」と述べるので、『日蓮聖人御法海』初演本文の「先立給ふ姑御や。我も浮めてたもいの」自体が不要なようにもみえる。しかし勘作の母とお伝は女性であるが故に成仏出来ない、という旧来の仏教の認識を踏まえるならば、ここには日蓮宗の主要な思想〈女人成仏〉——女性が「变成男子」化する段階を踏まず、女性が女性のまま成仏できるのだという主張——が描かれているのだと理解することが出来る。

『日蓮聖人御法海』「勘作住家」は、日蓮が教義を伝えるべき弟子を得るといふ喜びのドラマである。龍の口法難を逃れた日蓮は、「勘作住家」のこの日、鎌倉幕府の要人のために命を奪われようとする少年・経市と出逢う。しかも少年の「人相を見るに世の常ならず。日蓮に成かはり法花経弘通の。大導師とならん異相」を持つ。日蓮は本間六郎左衛門から事情を聴き、「勘作住家」へ向かう途中で、少年に無言でいることを課題としたものと考えて（日蓮の法衣の中にいて、母お伝と再会してもひと言も発さずいたことから解釈する）。経市は、父勘作が鵜や魚に責められる様子をみて思わず「悲しや」と詞を発してしまいが、日蓮はすかさず「冥途の苦しみを。此世ではらす現世の責。」と現象の意味を教え、同時に「題目おこたる事なかれ」と命じる。父勘作の成仏を目の当たりにして、経市は「水の面と聖人を伏拝」む。師弟が出逢ったばかりでなく、最初の伝授が水面に現れた「南無妙法蓮華経」の文字であり、「今の世迄も隠なき。甲州生沢の鵜飼石」の奇跡だった、という晴れやかな物語である。

貧家を舞台として、老母は孫を売ったことを後悔して自害し、勘作は結局斬首されて刑死して、ひとり残されたお伝は入水しようと思ひ詰める。勘作一家に起こった出来事は陰惨を極める。原作『いろは日蓮記』でも、右のドラマの骨格は変わらないのであるが、鵜や魚に責められたあとの勘作の死骸が動き、言葉が発する様子にはいささか恐怖を覚える。特に段切では登場人物の具体的な行動が描かれないので、「南無妙法蓮華経」の文字が飛び去るのを、登場人物も観客もただ見送るほかになく、陰惨な印象を残したまま終演する。

『日蓮聖人御法海』初演本文は前述したように、段切にお伝と経市の別れに日蓮の微笑を添えたことで、それまでの陰惨さを振り幅として、かえって明るい将来——受難の続く日蓮が教義を「都はおろか西国迄。弘め給」ふ道筋を得

た——を、観客・読者に印象させる。原作『いろは日蓮記』でなく、改作『日蓮聖人御法海』を選び、上演の絶えていた本作に半世紀ぶりの再生の機会を与えた初代麓太夫の選曲眼は確かだったと筆者は考える。

六、初代豊竹麓太夫による添削活動

一六九(38)頁以下の「初代豊竹麓太夫出演年譜(稿)」(以下、「麓太夫年譜」と略す)は、初代麓太夫が紋下太夫となった寛政六年(一七九四)以降、最後に出演の確認出来る文化十四年(一八一七)までの二十三年間の出演記録を網羅したものである。百五十四興行の内、出演した作品は五十七、出演した段は七十一を数える。一興行を一回と数えて、出演回数を段ごとにまとめて多いものの順に並べると、次のようになる。

回数	宗輔年譜No.	作品名	段数段区分	段名	分類
十四回		『壇浦兜軍記』	三段目口	「琴責」	駒再演
十回		『太平記忠臣講釈』	七ツ目切	「書置」	鐘初演
十回		『絵本大功記』	十日の段切	「尼ヶ崎」	
九回	No. 42	『仮名手本忠臣蔵』	七段目	「掛合」	筑前初演
八回		『近江源氏先陣館』	八ツ目切	「小四郎愁」	鐘初演
六回	No. 01	『北条時頼記』	五段目節事	「最明寺雪」	越前初演
六回	No. 38	『菅原伝授手習鑑』	四段目切	「手習児家」	島初演
六回	No. 41	『義経千本桜』	三段目切	「甕鮎屋」	筑前初演
六回	No. 42	『仮名手本忠臣蔵』	九段目切	「山科」	筑前初演
六回	No. 48	『日蓮聖人御法海』	三段目切	「勘作住家」	筑前初演
六回	No. 49	『一谷嫩軍記』	三段目切	「熊谷陣屋」	筑前初演
六回		『八重霞浪花浜荻』	「新屋敷」		島初演
五回	No. 21	『荳葉桑門築紫轢』	五段目	「山」	筑前再演
五回		『鎌倉三代記』	八ツ目切	「三浦別」	

自身の初演作品で再演を繰り返したものは、『絵本大功記』「尼ヶ崎」のみで、多くは旧作の再演に活動の中心があることが一目瞭然であるかと考える。再演する旧作について、誰の初演もしくは再演したものを取り上げたのか、との観点から、次のように分類してみる。

豊竹筑前少掾初代竹本此太夫（陸奥此太夫）の初演もしくは再演した曲としては、右に挙げた六曲のほかに、No.21『苺萱桑門築紫髯』三段目切「守宮酒」四回、No.22『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若初陣」三回、No.24『釜淵双級巴』中の巻「五右衛門内」一回、No.38『菅原伝授手習鑑』三段目切「佐太村」四回、No.50『義経腰越状』三段目切「泉三郎館」三回、『義仲勲功記』三段目切「地藏経」四回がある。『仮名手本忠臣蔵』七段目掛合を除くと、十作品十一段を四十三回取り上げている。

初代豊竹鐘太夫（初代竹本鐘太夫）の初演もしくは再演した曲としては、右に挙げた二曲のほかに、『祇園祭礼信仰記』二段目切「けし島」一回、No.57『嬢景清八島日記』三段目切「日向島」四回、『本朝廿四孝』四段目切「十種香」四回、『三日太平記』九ツ目切「嘉平治住家」三回がある。六作品六段を三十回取り上げている。

二代豊竹島太夫（二代竹本島太夫・二代豊竹若太夫）の初演もしくは再演した曲としては、右に挙げた二曲のほかに、No.24『釜淵双級巴』「釜入」一回、『祇園祭礼信仰記』三段目切「天下茶屋」三回、『岸姫松響鑑』三段目切「順礼歌」一回、『曾根崎模様』「帯屋」一回、『迎駕籠死期茜染』「聚楽町」一回がある。七作品七段を十九回取り上げている。

師匠である初代豊竹駒太夫の初演もしくは再演した曲としては、右に挙げた「琴責」のほかに、『祇園祭礼信仰記』四段目切「爪先鼠」三回がある。二作品二段を十七回取り上げている。

これらの再演傾向をみるならば、初代麓太夫には（豊竹筑前少掾の初演曲を継承する）という方針があったと考え得るであろう。あるいは各人は各時代の代表的な存在・紋下であるために、当期に紋下となった初代麓太夫の立場が、これらの曲目を選ばせるのである、との反論もあるであろう。

筑前少掾は、延享・寛延期の竹本座、宝暦期の豊竹座の太夫の筆頭であった。初代豊竹鐘太夫は明和期の竹本座や豊竹座の太夫の実力者であり、二代豊竹島太夫は明和期の竹本座と豊竹座で紋下となった太夫であった。初代駒太夫は、明和期の豊竹座の紋下でもある。

しかし本曲「勘作住家」にみたように、初代麓太夫が再演するまで半世紀の間は上演が絶えていたのであって、初代麓太夫の前に（時の紋下が当然勤める

べき課題曲）として存在していたのではなかった。初演興行が連続していた十八世紀から、人形浄瑠璃文楽・義太夫節という演劇・音楽が、再演へと軸足を移していく、その最初期が初代麓太夫の活躍した時代である。

No.41『義経千本桜』「甕鮮屋」も初演以後上演の絶えていたのを、大坂では五十八年後の、文化五年（一八〇五）九月に初代麓太夫が本文を改訂した上で再演して、竹本座初演曲に東風・豊竹座の曲風を遺したことは、拙稿『義経千本桜』三段目切「甕鮮屋」（三本対照³¹）に指摘したところである。「甕鮮屋」の現行曲になぜ東風が残るのかを、初演者・豊竹筑前少掾が竹本座と豊竹座を行き来したから——すなわち初演時から混交していた——とする珍説も行われるが、この点は祐田善雄氏「浄瑠璃の芸と風」がはやく、

鍋屋宗右衛門の豊竹麓太夫が手がけてからであって、その後は弟子の巴太夫や二世麓太夫が継いで長く伝えたから、改曲は初世が施したものである³²。

と指摘しておられたのは慧眼であった。³²
内山美樹子氏「国性爺合戦」の半世紀³³は、『国性爺合戦』三段目切「甘輝獅子城」について、

西風で統一さるべき一段に、現行曲では「甘輝館」は西風、「獅子ヶ城」は東風（ないし東風の）という現象が見られるのも、三ノ切の後の部分に甚だしい変化が生じたもの（強いて求めれば文化期の麓太夫の二回の上演が影響するか）と考えざるを得ない。

と述べ、初代麓太夫が「甘輝獅子城」を改曲した可能性を指摘されていた。

祐田氏・内山氏はそれぞれ上演史の状況証拠から、初代麓太夫の改曲への関与を指摘されたのであったが、この方法に倣うならば、初代豊竹駒太夫の出演歴が無いのに現在「駒太夫風」の演奏様式も伝えられるところの、『恋女房染分手綱』十段目切「三吉愁歎」は、初代麓太夫の三回の演奏において改曲されたものと推定することができるであろう。

本節に上演回数を書き出した二十六作品の内、作品名をゴシック体で示した十作品は竹本座の初演曲である。前頁上に上演回数が多いものと並べた十四曲中の七曲が竹本座初演曲であることをみると、初代麓太夫には豊竹座の旧作を取り上げる以上に、竹本座の初演曲を手がけることについて、つよい意欲が

あった、と捉えられるであろう。

「勘作住家」の音楽面をみると、初代麓太夫独自の工夫として段落No.24の*15、お伝の愁歎の様子を描く「伏転び。くゝては正体も泣こが。るゝぞ道理なり。」を、「伏転び声を限りに泣尽す涙は軒の。川水に浪立。さはぐ如くなり。」と改めることによって、当該箇所を大落シという旋律に改めている（初演本文の文字数では大ヲトシの旋律に当てはまらない）。

「大落シ おおおとし」とは、義太夫節の曲節・旋律の名称のひとつである。「文楽用語」⁽³⁵⁾では、

愁嘆の極限などのように、一段中で最も緊迫し、また興奮を与える所に用いる。フシの中では一番長い曲節で、主音を幾度となく繰り返し返して強調する。大落シは尼ヶ崎の段の「浪立騒ぐ如也」⁽³⁶⁾（三六七頁⁽¹²⁾）のように、東風の曲に限ってつける名称で、西風のものには使わないのが原則であると解説する。

東京都立中央図書館・加賀文庫『浄瑠璃発端』は、文政八年（一八二五）に没した初代竹本宮戸太夫が著し、のちに「安政六年に浪太夫の宮戸太夫によって完成されたと推測される」伝書である⁽³⁶⁾。

右の「大落シ」の旋律型は、伝書『浄瑠璃発端』の中では、「巴太夫」の「上」として示される、『奥州安達原』三段目切「袖萩祭文」の「恩愛の涙はらくゝ。思ひ隔る八重垣に落る涙は雪解て水かさ。まさるごとく也。」が該当する。巴太夫とは、初代豊竹麓太夫の門弟にして、女婿の初代豊竹巴太夫を指す。『浄瑠璃発端』は「巴太夫」「上」型の大落シについて、

- ①御所桜三（御所桜堀川夜討・筐片袖） ②近江八（近江源氏先陣館・小四郎愁） ③彦山五（彦山権現誓助剣・端午式日） ④岸姫松三（岸姫松轡鑑・順礼歌） ⑤三代記八（鎌倉三代記・三浦別） ⑥木下七（木下蔭狭間合戦・竹中砦） ⑦日吉丸三（日吉丸稚桜・花壇） ⑧蝶八（蝶花形名歌島台・小坂部館） ⑨三日九（三日太平記・嘉平治住家） ⑩玉藻前三（玉藻前曠袂・道春館） ⑪賢女八（日本賢女鑑・木津守館） ⑫太十（絵本大功記・尼ヶ崎） ⑬荀萱三（荀萱桑門築紫轡・守宮酒） ⑭八陳八（八陳守護城・朝清本城） 其外数多

にみえると列挙する（丸数字・くゝ内の作品名・段名は筆者がわたくしに補った。例

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

示する十四段の内、⑩は、初代豊竹巴太夫が初演した作品である。①⑩の二曲を除いた、十二曲はすべて「麓太夫年譜」で初代麓太夫の上演記録を確認することが出来る。『浄瑠璃発端』は、忠実な継承者であるところの門弟・初代巴太夫を通して、師・初代豊竹麓太夫の大得意な曲節「大落シ」を記録したものと捉えられよう⁽³⁷⁾。

そもそも『浄瑠璃発端』が典型として示す、『奥州安達原』三段目切「袖萩祭文」について、筆者は初代豊竹巴太夫の改訂本文が伝承されていることを明らかにしたが、その改訂の契機を、「麓太夫年譜」寛政十二年（一八〇〇）閏四月興行で、前半を初代麓太夫が語り、後半を初代巴太夫ほかの掛合で上演した折かと推定していた⁽³⁸⁾。『国性爺合戦』「甘輝獅子城」の後半を東風に改曲した例や、「勘作住家」に「大落シ」を書き加えた例を勘案するならば、「袖萩祭文」の添削本文および音楽的な改曲者は、初代麓太夫だと判断するのが適切なように考え直した。

「袖萩祭文」冒頭の本文「只さへ曇。雪空に。心の闇の暮近く。一間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風。身にこたゆるは血筋の縁。」は、桂中納言から切腹を勧められた老父・平廉杖の行為と心中の描写なのだが、現行曲では少なくとも「身にこたゆるは血筋の縁。」の文は女性登場人物・娘袖萩の心中として演奏している。のちの伝承過程で誤解が生じたものかと考えていたが、「勘作住家」の瑕疵などを含めて考えるならば、初代麓太夫らしい誤読・誤解釈があったて、改曲したものと捉えるべきだろうと考える。何よりも、こうした単純な誤解を後代に至るまで旧套墨守させる影響を残し得るのは、紋下太夫という権威者でもなければならぬ起こりえないだろう、と考えるからである⁽³⁹⁾。

初代麓太夫と同時期に、豊竹座の旧作を、西風・竹本座の音楽へと改曲しつつ再演した、二代竹本綱太夫の活動があった。

二代竹本綱太夫の添削活動については、拙稿『摂州合邦辻』下の巻の切「合邦内」現行本文の成立時期について——「二代竹本綱太夫の添削活動について」——にまとめているので参照されたい。『摂州合邦辻』は原題のまま「合邦内」、原題「花上野誓の石碑」四ツ目を改題「花上野誓の旧跡」として「志渡寺」、原題・No.29「鶴山姫舎松」三段目切を改題「中将姫古跡之松」として「雪勢免」、原題・No.30「田村磨鈴鹿合戦」四段目切を改題「勢州阿漕浦」として「平治住

家」をやはり本文を改訂した上で再演している。

豊竹姓の太夫が竹本座の初演曲を豊竹座の音楽様式によって再演し、また竹本座の太夫が豊竹座の初演曲を竹本座の音楽様式によって再演した点に、初代豊竹麓太夫や二代竹本綱太夫の浄瑠璃史・義太夫節の伝承における重要さがある、と指摘したい。ただし二代竹本綱太夫は紋下にはなれなかったひとなので、通し・立ての三段目切を担うことはなく、これらの演目を付け物化、一幕物化して再演したものである。初代豊竹麓太夫は、紋下として劇団を統率した人物であったので、五段続の通し・立ての再演興行の大編成の中で、自身の出演する段の本文を添削し、あるいは改曲を施して再演することを試みた。

二代竹本綱太夫にも、上演の絶えていた並木宗輔の作品（No.29『鶴山姫舎松』、No.30『田村磨鈴鹿合戦』）を再演して、こんにちに伝承させた功績があるが、初代豊竹麓太夫の場合は、本稿に取り上げたNo.48『日蓮聖人御法海』や、前述のNo.41『義経千本桜』にみるような、初演以来半世紀ぶりの五段続きの通し・立てでの再演であった点が重要だと考える。作者並木宗輔の作品がこんにちにまで伝承される道筋を開いた、大功労者は初代豊竹麓太夫であった、と考えるべきことを強調したい。

まとめにかえて

本稿では、浄瑠璃本作者並木宗輔について、一節「並木宗輔浄瑠璃本著作年譜」について」に新たに署名作品のリストを編むことの意義を説き、二節「並木宗輔の肖像画」では同人の肖像画に関して検討した。三節「日蓮聖人御法海」初演興行と並木宗輔追善」では、並木宗輔の追善興行は、『日蓮聖人御法海』だけでなく、絶筆『一谷嫩軍記』、初署名作『北条時頼記』と連続する三興行が一年余り続いた大規模なものだったと考証した。

四節「日蓮聖人御法海」再演興行と初代豊竹麓太夫の関わり」は、初演以後、上演の絶えていた『日蓮聖人御法海』を、初代豊竹麓太夫が再演したこと、五節「初代豊竹麓太夫による「勘作住家」の改訂本文」では、初代麓太夫が再演に当たって本文を改訂していたことを明らかにした。六節「初代豊竹麓太夫による添削活動」では、初代麓太夫が竹本座の初演曲をアレンジして再演することと活動の方針があったことを概観した。

最後に、初代豊竹麓太夫の遺影を紹介したい。一七〇(37)頁の写真は、初代豊竹麓太夫八十二歳、初代豊竹巴太夫四十八歳の時、舞台で出語りする姿を描いたものである。豊竹呂勢太夫氏所蔵。呂勢太夫氏は入手後に改装されたので、原装は失われているが、大きな掛け軸である。

「とり子」とし頃は弥生としは文化十三」とある通り、文化十三年（一八一六）三月座摩境内興行でふたりは同座して、『北条時頼記』『雪のどん』を出語りで勤めている。当該興行番付に、初代麓太夫は口上で「当春より大病にて」「未しかと全快も不仕其上最早老衰之私義」と述べる。江戸時代の当時として高齢なばかりでなく、前例のない現役高齢出演記録を更新し続けていた初代麓太夫において深刻な病を感じ、絵姿を遺したのだろうと考える。

麓太夫ひとりだけでなく、初代巴太夫をまで描かせて、ふたりともに弔うひとは、初代麓太夫の娘で、初代巴太夫の妻であった「とな」、妙声尼⁽⁴¹⁾以外にあるまい。来歴は未詳ながら、当初の持ち主は初代巴太夫の遺族であったと考えられる、素性の良い資料である。

初代豊竹麓太夫の絵姿には、文化元年（一八〇四）正月刊『楽屋図会拾遺⁽⁴²⁾』所載の「浄瑠璃三味線名誉人物」が知られているが、同書の執筆時期は前年享和三年（一八〇三）なので、初代麓太夫七十四歳の姿である。『楽屋図会拾遺』の作者にして画家の松好斎半兵衛の描いた絵姿と、その弟子・春好斎北洲の描いた右の遺影と、初代麓太夫の年齢こそ違い、面差しは同じといって良い。それぞれ対看写真に基づく作画であると考ええる。

明け暮れに祀る遺族において違和感があつてはならぬのが絵姿であろう。本稿二節では、二代竹田出雲掾定雄（親方出雲）の絵姿に似ることを根拠に『忠臣蔵岡目評判』には取り違いがあると考証したが、人形浄瑠璃の太夫や座本・作者には絵姿を遺し、遺族には遺影を祀る習慣があつたことを再確認して本稿を終えたい。

本稿を成すにあたり、鳥越文蔵先生、内山美樹子先生、菅野将史松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居芸員に御教示を得ました。記して感謝申し上げます。また図版の掲載および翻刻の許可を戴きました、大阪音楽大学楽器資料館、香川県立ミュージアム、関西大学図書館、関東短期大学図書館、慶應義塾

三田メディアセンター、成就寺、天理大学附属天理図書館、三本文庫、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館、立命館大学アトリリサーチセンター、早稲田大学演劇博物館、豊竹呂勢太夫氏、原道生氏へ御礼申し上げます。

本稿の「『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」本文対照表」「初代豊竹麓太夫出演年譜(稿)」は、竹本駒之助公演第六弾「『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家段」」(K A A T 神奈川県芸術劇場・二〇一六年二月二十七日―二十八日)公演で筆者が作成した解説資料を再編集したものです。

本稿は、令和二年度科学研究費補助金・JSPS 研究費(20K00343)の助成を受けたものです。

註

(1) 並木宗輔の伝記研究は、角田一郎氏「並木宗輔伝の研究——新資料写本『三原集』を中心とする考察——」。初出は『国文学研究』第十三号、早稲田大学国文学会、一九五六年)を参照のこと。図録『並木宗輔展——浄瑠璃の黄金時代——』早稲田大学演劇博物館、二〇〇九年に再録された。宗輔はもと備後国三原の成就寺の禅僧で断溪慧水(詩号を「断継」)であったと考証した。また宗輔の没年を、矛盾する諸記録を整理して、宝暦元年と考証した。

右の写真は、広島県三原市・成就寺に、小早川「隆景公御建立ノ本堂」と伝わる写真である。昭和三年(一九二八)に倒木のため本堂の裏が損傷して失われたという。角田氏論文は、同時の住職であった師の達空慧明の死去に伴い、寺内での住職相統の「系統が転じたので、僧断継は寺の道統を受け得るか否かわからない立場になった」ことが宗輔還俗の契機となったであろうと推定した。

筆者は同写真に、宗輔が失った前半生の大きさを知った。何より「ここに並木宗輔そのひとが立っていたのだ」ということに感慨を覚えた。

(2) 『早稲田大学高等研究所紀要』第十二号、早稲田大学高等研究所、二〇二〇年所収。PDF形式で、インターネット上で公開するもの。

(3) 註(1)参照。

(4) 森修氏「近松と浄瑠璃」『塙書房、一九九〇年所収。初出は、「浄瑠璃合作者考(二)——並木宗輔の浄瑠璃——」(『人文研究』第一卷、大阪市立大学、一九五〇年所収)、および「浄瑠璃合作者考(二)——並木宗輔の浄瑠璃——」(『人文研究』第二卷、大阪市立大学、一九五一年所収)。

(5) 内山美樹子氏『浄瑠璃史の十八世紀』(勉誠社、一九八九年)の、「Ⅱ並木宗輔」の『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について



諸論、および内山美樹子氏「並木宗輔」(『岩波講座 歌舞伎・文楽』第九卷「黄金時代の浄瑠璃とその後」岩波書店、一九九八年所収)を参照のこと。

- (6) 『実践女子大学文芸資料研究所年報』第二十一号、実践女子大学文芸資料研究所、二〇二二年所収。

- (7) 『早稲田大学高等研究所紀要』第五号、早稲田大学高等研究所、二〇一三年所収。

- (8) 『演劇研究』第二号、早稲田大学演劇博物館、一九六七年所収。

- (9) ただし『榎景清八島日記』には、登場人物名を埋木して改める箇所がある。

- (10) 早稲田大学演劇博物館、二〇〇四年。

- (11) 『近松研究所紀要』第二十九号、園田学園女子大学近松研究所、二〇一九年所収。

- (12) 『芸苑叢書』版(風俗絵巻図画刊行会、一九三三—一九四四年)を影印本とした、ゆまに書房版(一九七七年)に拠った。

- (13) 幸田成友氏『読史余録』、大岡山書店、一九二八年所収。

- (14) 『演芸月刊』二十一号・二十四号、演芸月刊社、一九三二年所収。

- (15) 中央公論社、一九七五年。①「竹田出雲の襲名と作品」の初出は、『近世文芸』第一号、日本近世文学会、一九五四年所収。②「竹田近江・出雲の代々」の初出は、『山辺道』第一号、天理大学国語国文学会、一九五五年所収。

- (16) クレス出版、二〇一一年。

- (17) 註(1)参照。

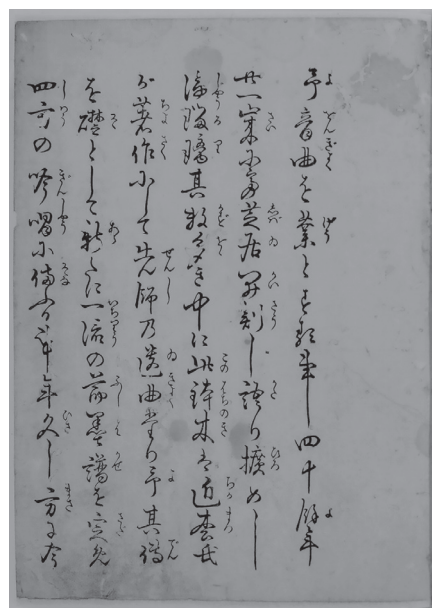
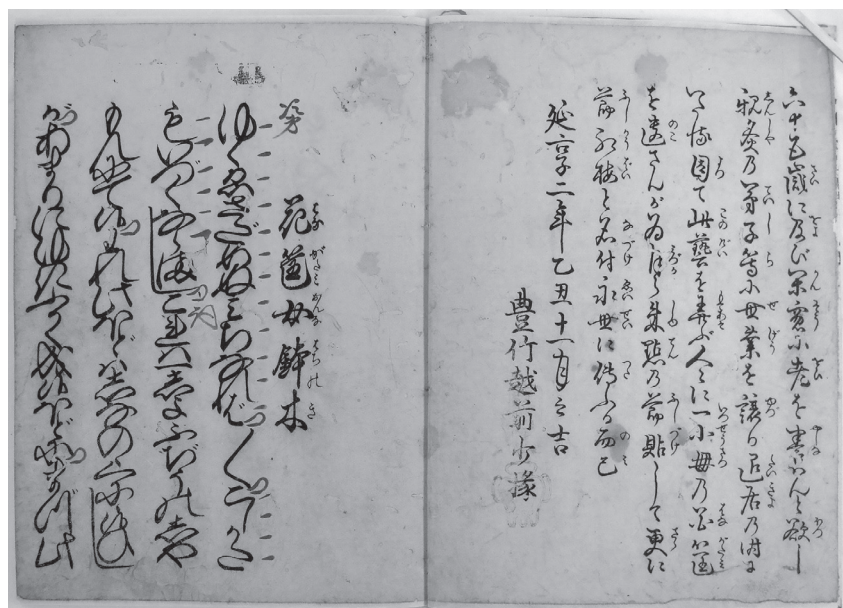
- (18) 註(5)内山美樹子氏「浄瑠璃史の十八世紀」三六二頁参照。

- (19) 豊竹筑前少掾の改名歴について注記する。同人には、陸奥茂太夫の門弟としての前身があり、のちに義太夫節へと流儀が改まったもの。義太夫節の太夫としての初名は「豊竹伊太夫」で、のちに「竹本美濃太夫」と改まる。元文三年(一七三八)正月「行平磯馴松」四段目節事「形見忍夫摺」の登場人物「此兵衛」の評判よく、「竹本此太夫」と改名するに至る。竹本播磨少掾(初代政太夫・三代義太夫)没後に、竹本座の太夫の筆頭を担って三段目切を語ったが、番付や浄瑠璃本の上で正式の紋下とはならなかった。いわゆる「忠臣蔵騒動」で、座本・竹田出雲(二代出雲)と対立して、豊竹座へ移籍した。ただし移籍した当初には豊竹姓を名乗らず、「陸奥此太夫」と改名したが、掾号「筑前少掾」を受領して、番付・浄瑠璃本の上でも正式な紋下に就いた段階で、「豊竹筑前少掾」と改姓したものである。

- (20) 二〇一三年に人形浄瑠璃文楽座因講が大阪・四天王寺に設置した銘板「浄瑠璃(義太夫節)界先師石塔群」に、「豊竹此太夫(筑前少掾)夫妻宝塔」と刻んでいるが、甚だしい誤解である。初代此太夫としては竹本姓もしくは陸奥姓しか名乗っておらず、同名跡が豊竹姓と改まるのは、二代此太夫(通称銭屋)の代以降のことである。

- (21) 拙著『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九年)の第五部資料紹介「和泉式部軒端梅」と江戸人形浄瑠璃関係新出資料」参照のこと。雑司ヶ谷一帯の地誌『若葉の梢』に拠る。

- (21) 近石泰秋氏旧蔵。現在は香川県立ミュージアムに「近石泰秋資料」として収蔵されている。資料番号「くちZ-1109」。前掲註(7)の拙稿「近石泰秋氏旧蔵の浄瑠璃本」



に所在と書誌を紹介した。近石泰秋氏『浄瑠璃の研究』（風間書房、一九六一年）に図版として紹介のある本なので、『義太夫年表 近世篇』は、延享二年十一月「北条時頼記」越前少掾引退興行の記事に、挙げておくべき資料であった。

「花筐女鉢木」五行本の巻頭にある、越前少掾の序文および内題部分を前頁下階に写真として紹介する。

- (22) 豊竹座初期の浄瑠璃本の奥付については、長友千代治氏の調査に詳しい。長友千代治氏『近世上方浄瑠璃本出版の研究』（東京堂出版、一九九九年）の、「西沢版浄瑠璃本奥書集成」（以下「西沢集成」と略す）では各奥付について図版を添えて諸本を紹介しておられる。『北条時頼記』初板改訂本の内、初摺とみる本には「西沢集成」18が付されている。当該奥付は寛保三年（一七四三）三月「風俗太平記」から延享二年（一七四五）八月「浦島太郎倭物語」までの初板初摺本に用いられた。同板の奥付を用いた『北条時頼記』初板改訂本を、延享二年十一月の再演興行時に出したものと推定する。なお諸本の所在は、『西沢一風全集』第六卷（汲古書院、二〇〇五年）の「北条時頼記」解題を参照されたい。

- (23) 『北条時頼記』再板本の内、初摺とみる本には「西沢集成」25が付されていて、当該奥付は宝暦元年（一七五二）十月「日蓮聖人御法海」から宝暦二年（一七五二）十二月「倭仮名在原系図」までの初板初摺本に用いられた、同板の奥付を用いた『北条時頼記』再板本（徳島バス株式会社・徳島県立博物館寄託）を、宝暦二年の再演興行時に出したものと推定する。

- (24) 同時代の近接する演劇である歌舞伎では、例年十一月の顔見世興行を以て、新年度の座組を発表する、年度単位での契約更新が行われた。人形浄瑠璃では座員の交替や再編成ということを年度単位では行わないのであるが、移籍するなどの機会がある場合には、十一月の歌舞伎の顔見世興行のシーズンに動いたものと考えられている。

安田蛙桂は寛延四年（宝暦元年度）まで豊竹座にあって、十月初演「日蓮聖人御法海」までは勤めたが、新年度・宝暦二年度（宝暦元年十一月以降）には竹本座へ移籍したので、十二月豊竹座初演「一谷嫩軍記」に名前がない、という事情なのであろう。竹本座での新作は、宝暦二年（一七五二）三月初演「名筆傾城鑑」で、ここに「中村閨助」と改名して出る。

『日蓮聖人御法海』作者改訂の契機は、蛙桂の竹本座移籍だと考えられるが、ただし改訂直後とみるべき本、すなわち註(23)の「西沢集成」25をもつ本を筆者はみいていない。はるかに後年の後摺本（「西沢集成」54）をみるばかりなので、作者改訂の時期については裏付けを得られない。

- (25) 岩波書店、一九八四年。当該原稿の執筆時期が定かでないが、『義太夫年表 近世篇』第二卷（寛政・文政）は、一九八〇年に出ているので、修訂の機会はあり得たのではないかと考える。

- (26) 東京音楽学校編、六合館、一九二七年。黒木勘蔵氏による簡潔な梗概が載る点でいまなお利用価値のある基本資料であると考ええる。しかし興行年表としての精度は、『義太夫年表 近世篇』が勝る。文楽や歌舞伎の種々の解説や辞典類には、『義太夫年表

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

近世篇』に当たらずに、『近世邦楽年表 義太夫節之部』に拠るものが多い。

- (27) 註(22)長友千代治氏『近世上方浄瑠璃本出版の研究』『浄瑠璃本の需要と供給』の、「6 五行六行浄瑠璃外題目録」の刊行」を参照のこと。

- (28) 同書の寛政七年板の所在を記す。大阪府立中之島図書館（015-206）、香川県立ミュージアム、（近石泰秋資料・くらゐ2-1258）、関西大学図書館、（R0912-4031-G1-1）、甲南女子大学図書館（細川景正文庫蔵）、国立歴史民俗博物館、（水木家：刊本24）、東京大学文学部国文学研究室（近世23・201）。

- (29) 同書の文化三年板の第一次改訂本の所在を記す。京都大学附属図書館（4222008）、天理大学附属天理図書館（01170791-2）、文楽協会（506）。

- 文化三年板にはほかに第二次、第三次、第四次の改訂本が残る。註(22)長友千代治氏『近世上方浄瑠璃本出版の研究』は、第三次改訂本を図版として紹介する。

- (30) 四代竹本長門太夫『増補浄瑠璃大系図』（国立劇場調査養成部芸能調査室編〈演芸資料選書・6〉、『増補浄瑠璃大系図』上中下および別巻、日本芸術文化振興会、一九九三―九六年）に図が残る。

- (31) 久堀裕朗氏編『上方文化講座 義経千本桜』（和泉書院、二〇一三年）所収。筆者が文責を勤めた、内山美樹子氏・染谷智恵子氏・井川蘭子氏との共同研究「義経千本桜」――上演方法の変遷と現行本文の成立時期に関する研究――（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四十四号第三分冊、早稲田大学大学院文学研究科、一九九八年所収）の時点では、近世期・江戸時代の「甕鮎屋」の上演本文に辿りつかなかった。

- 註(15)『浄瑠璃史論考』五二二頁参照。
- (32) 近松研究所十周年記念論文編集委員会編『近松の三百年』和泉書院、一九九九年所収。

- (34) 井野辺潔氏監修・義太夫研究会編著『文楽談義 語る・弾く・遣う』（創元社、一九九三年）所載「地色」の機微で、五代鶴沢燕三氏は、「琴責」「重の井」の曲風に関する内山美樹子氏の質問に、次のように駒太夫風と断言する。

燕三 どちらも駒太夫風のもんでございます。「重の井」は純粹の駒太夫風でございますね。

内山 そうしますと、「阿古屋」も「重の井」も駒太夫風。「櫻門」なんかも？
燕三 そうでございます。

- (35) 『日本古典文学全集』第九十九卷『文楽浄瑠璃集』岩波書店、一九六五年所収。

- (36) 『日本庶民文化史料集成』第七卷「人形浄瑠璃」に翻刻がある。「」内は二八五頁解題より引用。

- (37) 拙稿「江戸板六行本「大字遊下本」の効用——義太夫節・人形浄瑠璃文楽の現行本文の成立時期を辿る手掛かりとして——」（『早稲田大学高等研究所紀要』第十号、早稲田大学高等研究所、二〇一八年所収）では、初代豊竹巴太夫が文政四（五年）（一八二一―一八二三）に江戸へ下って、結城座へ出演して、「大字遊下本」シリーズにその上演本文・十作品十三段を遺したことを指摘して、直前期（寛政・享和・文化・文政年間）の上方での上演状況を鑑みて、「1」『鎌倉三代記』七段目切、「2」『仮名手

本忠臣蔵」大序〈切〉、「3」『仮名手本忠臣蔵』七段目「かけ合」、「4」『仮名手本忠臣蔵』九段目〈切〉、「5」『太平記忠臣講釈』七ツ目「重太郎内」、「6」『絵本大功記』十段目切「尼崎」、「7」『義経千本桜』三段目切、「8」『壇浦兜軍記』カケ合、「9」『花柳会稽褐布染』四ツ目切「官次郎切腹」、「10」『和田合戦女舞鶴』三段目切「市若切腹」を、〈初代麓太夫が初演もしくは再演した曲〉と分類した。

『浄瑠璃発端』の⑤は「1」、⑫は「6」に該当する。初代巴太夫の江戸滞在時には、初代竹本宮戸太夫が同座しているので、初代麓太夫の音楽を、弟子の初代巴太夫を通して受け止めて筆記したのは初代宮戸太夫であろう。

(38) 註(20)拙著『浄瑠璃本史研究』四〇一頁に、次のように指摘していた。

切は、初代豊竹麓太夫、跡は、巴太夫をはじめ、磯太夫・八重太夫・吾太夫の四人による「かけ合」であった。同興行が、巴太夫の最初の「袖萩祭文」上演である。巴太夫の添削が後半に集中することの理由は、「かけ合」の際の特殊演出を反映したため、と考え得るであろうか。

(39) 『絵本大功記』「尼ヶ崎」の、光秀の老母の詞「系図正しき我家を。逆賊非道の名を穢す。」の、「の」は誤りで「に」とあるべきところとされるが、こんにちなお初演本文の「の」のままで伝承されている。

(40) 『歴史の里』第二十号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、二〇一七年所収。

(41) 註(30)『増補浄瑠璃大系図』初代豊竹麓太夫条は、自安寺の初代麓太夫の墓碑の図の、石垣の左の柱に「鍋屋宗左衛門娘」とな建之」と文字のあることを描き、「石垣に彫入有となとは麓太夫娘にして初代巴太夫助三郎の妻なり文政十一歳巴太夫死去後は尼となり妙声尼と云也(中略)「妙声尼事は後に東成郡舍利寺村以呂波庵にて是も明治十四年十二月二十三日行年八十八才にして庵にて死す親子共に長命なる事也」と伝える(『演芸資料選書』6)『増補浄瑠璃大系図』上巻二六二頁・二六三頁参照。

大阪市天王寺区下寺町・円成院(遊行寺)に現存する初代豊竹巴太夫の墓碑の前の花立の、右には「太好庵とな」とある。太好庵は初代巴太夫の庵号。妙声尼は、初代巴太夫の戒名の院号「妙声院」から呼んだものであろう。

(42) 刊年は註(2)拙稿『壇浦兜軍記』三段目口「琴責の段」の現行本文と曲風の成立時期について——竹本大和掾と初代豊竹駒太夫、初代豊竹麓太夫の影響——」に新たに考証したもの。従来解説類は、『大坂本屋仲間記録』を確認せず、また本文を読むことなく、序文や跋文の年記から刊年を想定したため、享和二年と誤解してきた。

上の写真は、『楽屋図会拾遺』初摺本(神津)の「浄瑠璃三味線名誉人物」より、初代豊竹麓太夫の部分の切り抜いたもの。



【写真18】 初代豊竹麓太夫・初代豊竹巴太夫遺影（豊竹呂勢太夫氏）



覺種院從緣日起居士
妙声院円譽一道居士

豊竹麓太夫藤原光暁八十二像

半隱

呉竹の色

かはらぬ

ふしも

かみの

なかしをの

しら雪のふること

とか

豊竹巴太夫藤原亮長四十八像

子のとし頃は弥生

としは文化十三□

もか□豊竹巴

竹ふもとと

うけつくは

ものは其なかれ

それをものせし

□ふかき習となれり

たえなる豊竹繁泰に

なかつ頃の人其跡に

はちの木てふものは

浄瑠理てふみちに女

春好斎

初代豊竹麓太夫出演年譜（稿）

- 一、本表は初代豊竹麓太夫の活動を概観するために作成したもので、麓太夫が大坂で紋下太夫となった寛政六年以降、同人の名を紋下に掲げる興行を網羅した。
- 二、記載事項は、「齢」「西暦」「初日月日」「興行地」「劇場」「上演作品」「出演作品」「段数もしくは段名」「段区分」「分類」「近世篇」とした。
- 三、「齢」項には、初代麓太夫の年齢を記した（数え。満年齢では一つ減る）。
- 四、「西暦」項は参考のため、元号の前に記した。
- 五、「初日月日」項は、当該興行の初日を以て示した。「元号年数・月・日」の要領で記した。
- 六、「興行地」項は、公演の行われた劇場の所在地を、示した。
- 七、「劇場」項は、劇場の名称を、番付に記載の通りに記した。
- 八、「上演作品」項は、番付に記載の作品を、番付に記載の通りに記した。通し・立ての興行の場合、最初に作品名から記すが、通し・立ての作品の無い場合は、「見取り興行」と示した。
- 九、「出演作品」項は、段数もしくは段名「段区分」項は、麓太夫の役場を、『』内に作品名、「」内に段数（何段目・何冊目など）あるいは段名（動作住家など）、段区分（口・中・切）の要領で、番付に記載の通りに記した。
- 十、「分類」項は、「筑前初演」「筑前再演」豊竹筑前少掾（初代竹本此太夫）が初演もしくは再演したもの、「島初演」二代豊竹島太夫（二代竹本島太夫・二代豊竹若太夫）が初演したもの、「駒初演」「駒再演」初代豊竹駒太夫が初演もしくは再演したもの、「鐘初演」初代竹本鐘太夫（初代豊竹鐘太夫）が初演したもの、に該当する場合に、「」内の略称を示した。
- 十一、「近世篇」項は、『義太夫年表 近世篇』の番付写真番号を示した。同書に記載があるが番付が新出したものは【番付新出】、同書に記載の無かった興行である場合は「記載なし」と示した。

齢	西暦	初日月日	興行地	劇場	上演作品	出演作品	段数もしくは段名	段区分	分類	近世篇
65	1794	寛政06・02・17	大坂	道頓堀若太夫芝居	唐錦艶書功	『唐錦艶書功』「八冊目」切				0570
		寛政06・03・18	大坂	道頓堀若太夫芝居	義経腰越状・けいせい恋飛脚	『義経腰越状』「三段目」切、 『けいせい恋飛脚』「飛脚屋の段」切			筑前再演	0571
		寛政06・05・06	大坂	道頓堀若太夫芝居	鎌倉三代記・花上野営の石碑	『鎌倉三代記』「第八」切、「第六」中				0575
67	1796	寛政08・09・15	大坂	北はり江市の側東がわ芝居	双蝶蝶曲輪日記・勢州阿漕浦	『双蝶蝶曲輪日記』「第八」切				【記載なし】
		寛政08・10・11	大坂	市のかわ東芝居	祇園祭礼信仰記	『祇園祭礼信仰記』「三段目」切、「四段目」切			島初演 駒初演	0591
69	1798	寛政10・01・28	大坂	北堀江市の側新芝居	比良御陣雪舁形	『比良御陣雪舁形』「七冊目」、「三冊目」				0609
		寛政10・04・10	京	因幡薬師芝居	比良御陣雪舁形	『比良御陣雪舁形』「七冊目」、「三冊目」				【記載なし】
		寛政10・08・02	大坂	ほり江市ば西がわ芝居	千里竹雪曙	『千里竹雪曙』「八 朝鮮都の段」、「式住よしの段」				0611A
		寛政10・09・03	大坂	北はり江市のかわ西かわ芝居	古戦場鐘掛の松・新板歌ざいもん・ひらかな盛衰記・東鑑御狩巻・壇浦兜軍記	『東鑑御狩巻』「三段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責のだん」かけ合			駒初演 駒再演	0614
		寛政10・10・06	大坂	市のかわ西がわ芝居	大湊金水揚	『大湊金水揚』「江州家のだん」かけ合				【記載なし】

[illegible]

72		73		74		
1801		1802		1803		
享和01・02・11	大坂	道頓堀大西芝居	木下蔭狭間合戦・万年草	『木下蔭狭間合戦』『竹中砦のたん』切		0656A
享和01・03以前・ 18辰之介しばい	大坂	ほりへ市ノかはよし沢	廿四孝・八重霞	『八重霞』『新やしきのたん』	島初演	0659A
享和01・03・20	大坂	北ほり江市の側西がは芝居	鎌倉三代記	『鎌倉三代記』『第七』切		0658
享和01・10・13	大坂	北ほり江市場西側芝居	日吉丸稚桜	『日吉丸稚桜』『三段目花壇の段』切、 「初段はしの段」		0663a
享和01・12・28	大坂	北ほり江市場西側芝居	天目山兜譜	『天目山兜譜』『栗の頭砦の段』切		0666
享和02・01・24	大坂	北ほり江市場西側芝居	立春姫小松・男作五雁金	『立春姫小松』『三段目』切、 『男作五雁金』『紺屋のたん』切		0667
享和02・02・14	大坂	北ほり江市のかわ西側芝居	菅原伝授手習鑑	『菅原伝授手習鑑』『三段目』切、 同「四段目」切	筑前初演 島初演	0669A
享和02・06・16	京	四条南側大芝居	菅原伝授手習鑑・八重霞浪花浜萩	『菅原伝授手習鑑』『第四』切、 『八重霞浪花浜萩』『新やしき』	島初演 島初演	0670
享和02・07・晦	大坂	ほり「江市」の側西が は芝居	「見取り興行」・寿門松・関取二代鑑・宵 庚申いろ事ばなし・恋女房染分手綱・け い事	『恋女房染分手綱』『十たん目』切		0672
享和02・08・27	大坂	ほり江市のかは西側芝 居	日吉丸二度清書	『日吉丸二度清書』『老女隠れ家の段』切		0675A
享和02・10・15	大坂	北ほり江市庭西かは芝 居	日蓮聖人御法海	『日蓮聖人御法海』『三段目』切	筑前初演	0679A
享和02・11・27	京	寺町円福寺境内	日吉丸二度清書	『日吉丸二度清書』『老女隠家の段』切		【記載なし】
享和03・01・02	大坂	ほり江市のかは西側芝 居	絵本太功記・仮名手本忠臣蔵	『絵本太功記』『十』、 『仮名手本忠臣蔵』『七だん目』かけ合		0682
享和03・02・08	大坂	北の新地芝居	日蓮聖人御法海・仮名手本忠臣蔵	『日蓮聖人御法海』『第三』、 『仮名手本忠臣蔵』『七段目』惣掛合	筑前初演	0683
享和03・03・02	大坂	ほり江市のかは西側芝 居	荳萱桑門築紫幟・博多織恋鍬	『荳萱桑門築紫幟』『三段目』切、 同「五段目」切	筑前再演	0684
享和03・04・08	大坂	北ほり江市庭西側芝居	花禪会稽掲布染・御所桜堀川夜討	『花禪会稽掲布染』『第六』切		0685
享和03・08・19	大坂	道頓堀東芝居	義士の書添	『義士の書添』『十冊目』切		【番外新出】

	75	76
	1804	1805
享和03・09・21	文化01・03・中旬	文化02・01・02
大坂	伊勢	大坂
道頓堀東の芝居	中ノ地藏芝居	道とんぼり大にし芝居
義士の書添・傾城反魂香・一谷嫩軍記・檀浦兜軍記	絵本太功記・博多織	祇園祭礼信仰記
『一谷嫩軍記』「三の切」切、 『檀浦兜軍記』「琴責のたん」かけ合	『絵本太功記』「十冊目」切	『仮名手本忠臣蔵』「第九」切、 同「第七」かけ合
筑前初演 駒再演	0686	0700a
文化01・04・21	伊勢	文化02・02・10
文化01・05・19	伊勢	文化02・03・中旬
中地藏芝居	中地藏芝居	勢州中地藏大芝居
菅原伝授手習鑑・檀浦兜軍記	菅原伝授手習鑑・檀浦兜軍記	彦山権現誓助剣
『菅原伝授手習鑑』「三段目」切、 同「四段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責段」	『菅原伝授手習鑑』「三段目」切、 同「四段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責段」	『彦山権現誓助剣』「五冊目」切
筑前初演 島初演 駒再演	0689	0701
文化01・06	伊勢	文化02・03・中旬
（無記）	一谷嫩軍記・重井筒・檀浦兜軍記	仮名手本忠臣蔵
『一谷嫩軍記』「三段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責段」	『一谷嫩軍記』「三段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責段」	『仮名手本忠臣蔵』「九」切、 同「七」かけ合
駒再演	0691	0706
文化01・08・15	大坂	文化02・08・16
北はり江市の側西かは芝居	国性爺合戦・大塔宮曦鏡・新板歌祭文	太平記忠臣講釈・宿無団七時雨傘
0692A		0702A
文化01・09・23	京	文化02・08・20
文化01・11・15	大坂	文化02・09・09
道頓堀角の芝居	鎌倉三代記・彦山権現誓助剣・檀浦兜軍記	道頓堀大西芝居
鎌倉三代記・彦山権現誓助剣・檀浦兜軍記	鎌倉三代記・彦山権現誓助剣・檀浦兜軍記	道頓堀大西芝居
駒再演	0694	0707
文化02・01・02	大坂	文化02・10・01
道とんぼり大にし芝居	鎌倉三代記・彦山権現誓助剣・撰州合邦辻・檀浦兜軍記	道とんぼり大西芝居
『鎌倉三代記』「第七」切、 『檀浦兜軍記』「琴責の段」	『鎌倉三代記』「第七」切、 『檀浦兜軍記』「琴責の段」	義経千本桜・契情恋飛脚
0695		0709
文化02・02・10	大坂	文化02・11・02
道とんぼり大にし芝居	祇園祭礼信仰記	北の新地芝居
島初演 駒初演	同「四段目」切	
0697		
文化02・03・中旬	伊勢	大坂
勢州中地藏大芝居	彦山権現誓助剣	道頓堀大西芝居
彦山権現誓助剣	彦山権現誓助剣	道頓堀大西芝居
0700a		
文化02・03・中旬	伊勢	大坂
（中地藏芝居）	仮名手本忠臣蔵	道頓堀大西芝居
『仮名手本忠臣蔵』「九」切、 同「七」かけ合	『仮名手本忠臣蔵』「九」切、 同「七」かけ合	道頓堀大西芝居
0701		
文化02・08・16	大坂	文化02・09・09
道頓堀大西芝居	太平記忠臣講釈・宿無団七時雨傘	道頓堀大西芝居
鐘初演	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	道頓堀大西芝居
0702A		
文化02・08・20	大坂	文化02・10・01
道頓堀大西芝居	菅原伝授手習鑑・蕙樹累物語・津国女夫池	道とんぼり大西芝居
筑前再演	『菅原伝授手習鑑』「三段目」切、 同「五段目」切	道とんぼり大西芝居
0705		
文化02・09・09	大坂	文化02・11・02
道頓堀大西芝居	義経千本桜・契情恋飛脚	北の新地芝居
筑前初演	『義経千本桜』「三段目」切	
0706		
文化02・10・01	大坂	文化02・11・02
道とんぼり大西芝居	日蓮聖人御法海	北の新地芝居
筑前初演	『日蓮聖人御法海』「三段目」切	
0707		
文化02・11・02	大坂	文化02・11・02
北の新地芝居	仮名手本忠臣蔵・ひらかな盛衰記	北の新地芝居
筑前初演	『仮名手本忠臣蔵』「九つ目」切、 同「七つ目」かけ合	
0709		

77	1806	文化02・11・13	大坂	北の新地芝居	近江源氏先陣館・ひらかな盛衰記	『近江源氏先陣館』「八つ目」切	鐘初演	補訂32 (0710)
		文化03・01・25	京	四条南側大芝居	釜淵双級巴・けいせい反魂香・大和国茜染	『釜淵双級巴』「五右衛門内」、同「釜入」	筑前再演 島再演	0712
		文化03・03・03	京	四条南側大芝居	大功艶書合・新吉原瀬川復讐	『大功艶書合』「第七」切		0714
		文化03・04・11	大坂	道頓堀大西芝居	日吉丸稚桜	『日吉丸稚桜』「花壇のだん」切ほか		0717A
		文化03・05・02	大坂	道とんぼり大西芝居	和田合戦女舞鶴・迎駕籠死期茜染・ひらかな盛衰記	『和田合戦女舞鶴』「三段目」切、 『迎駕籠死期茜染』「聚楽町の段」切	筑前再演 島初演	0718
		文化03・07・21	大坂	道頓堀大西芝居	嬢景清八島日記・国性爺合戦	『嬢景清八島日記』「三段目」切	鐘初演	0720A
		文化03・09・09	大坂	道頓堀大西芝居	義仲勲功記・伽羅先代萩	『義仲勲功記』「三段目」切	筑前初演	0722A
		文化03・10・05	大坂	道とんぼり大西芝居	仮名手本忠臣蔵	『仮名手本忠臣蔵』「第十」切、同「第七」かけ合、同「第八」道行		0724A
		文化03・11・01	大坂	大西芝居	近江源氏先陣館・重井筒	『近江源氏先陣館』「八つ目」切	鐘初演	0726A
78	1807	文化04・01・14	大坂	道頓堀大西芝居	本朝廿四孝	『本朝廿四孝』「四段目」切	鐘初演	0730A
		文化04・03・25	京	四条南側大芝居	本朝廿四孝	『本朝廿四孝』「四段目」切	鐘初演	0734
		文化04・05・06	大坂	道頓堀大西芝居	ひらかな盛衰記・粧水絹川堤	『粧水絹川堤』「垣生村の段」切		0737A
		文化04・05・16	大坂	大西芝居	芦屋道満大内鑑・三日太平記・恋女房染分手綱・心中紙屋治兵衛・傾城阿波の鳴戸	『恋女房染分手綱』「子別れの段」切		0739
		文化04・07・18	大坂	道頓堀大西芝居	玉藻前囃袂・北条時頼記	『北条時頼記』「雪のだん」	筑前再演	0741
		文化04・07・29	大坂	道とんぼり大西芝居	義経腰越状・敵討つゝれの錦・平家女護島・北条時頼記	『義経腰越状』「三段目」詰ノ切、 『北条時頼記』「雪のだん」	筑前再演	0742
79	1808	文化04・09・10	大坂	道とんぼり大西芝居	八陳守護城	『八陳守護城』「第八」切		0747A
		文化05・01・12	大坂	道とんぼり大西芝居	祇園祭礼信仰記	『祇園祭礼信仰記』「二段目」切、 同「四段目」切	駒初演	[0753 原板]
		文化05・02・12	大坂	道頓堀大西芝居	岸姫松轡鑑・新板歌ざいもん	『岸姫松轡鑑』「第三」切	島初演	0756
		文化05・02・21	大坂	大西芝居	けいせいあこやの松・新うす雪もの語・あしや道満大内鑑・太平記忠臣かうしやく・新板歌祭文・ひらかな盛衰記	『太平記忠臣かうしやく』「七つ目」切	鐘初演	0757

81		80			
1810		1809			
文化07・03・03	大坂	北の新地芝居	国性爺合戦・曾根崎模様	『曾根崎模様』「帯屋のだん」切	鐘初演
文化07・03・25	大坂	北ノ新地芝居	太平記忠臣講釈・日蓮聖人御法海・妹背山婦女庭訓	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	鐘初演
文化07・05・05	大坂	北の新地芝居	敵討優曇華亀山	『敵討優曇華亀山』「遠しう屋の段」切	鐘初演
文化07・08・16	大坂	道頓堀大西芝居	三日太平記・花の上野誉石碑・大塔宮囃 鎧・京鹿子娘道成寺	『三日太平記』「嘉平治住家の段」切	鐘初演
文化05・03・中旬	伊勢	勢州中の地藏大芝居	本朝廿四孝	『本朝廿四孝』「四段目」切	鐘初演
文化05・04・吉	伊勢	勢州中の地藏大芝居	国性爺合戦・一谷嫩軍記	『一谷嫩軍記』「三段目」切	筑前初演
文化05・05・02	伊勢	勢州中之地藏大芝居	太平記忠臣講釈・花上野誉石碑	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	鐘初演
文化05・05・07	伊勢	(勢州中の地藏大芝居)	(太平記忠臣講釈)・(花上野誉石碑)・恋 鹿子娘道成寺	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	鐘初演
文化05・06・12	名古屋	稲荷芝居	絵本太功記	『絵本太功記』「十ヲ目」切	筑前初演
文化05・06・閏・08	名古屋	稲荷芝居より	日蓮聖人御法海	『日蓮聖人御法海』「生沢川鵜飼石の段」	筑前初演
文化05・07・15	大坂	道とんぼり角丸芝居	あしや道満大内鑑・いろは蔵三組盃・恋 飛脚・大塔宮囃鎧・一谷嫩軍記・仮名手 本忠臣蔵	『一谷嫩軍記』「三段目」切、 『仮名手本忠臣蔵』「七つ目」かけ合	筑前初演
文化05・09・15	大坂	北ぼり江市のかわ芝居	信田妻粧鏡	『信田妻粧鏡』「保名住家の段」切	筑前初演
文化06・03・29	大坂	御霊社内芝居	菅原伝授手習鑑・増補花上野	『菅原伝授手習鑑』「三段目」切、 同「四段目」切	筑前初演
文化06・05・05	大坂	御霊境内芝居	太平記忠臣講釈・男立五雁金・ひらかな 盛衰記	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	鐘初演
文化06・08・22	大坂	〔裁断〕	自来也物語・(菅原)	『自来也物語』「自来也住家の段」切	筑前初演
文化06・09・09	大坂	北の新地芝居	自来也物語・菅原	『自来也物語』「自来也住家の段」切	筑前初演
文化06・10・12	大坂	北ぼり江市の側芝居	日蓮聖人御法海・碁太平記白石噺	『日蓮聖人御法海』「三段目」切	筑前初演
文化06・10・28	奈良	瓦町芝居	義経千本桜	『義経千本桜』「三段」切	筑前初演
文化06・12・25	大坂	北の新地芝居	木下蔭狭間合戦・義経千本桜	『木下蔭狭間合戦』「竹中砦の段」切	筑前初演
文化07・02・09	大坂	北の新地芝居	木下蔭狭間合戦・八重霞浪花浜萩・伽羅 先代萩・ひらかな盛衰記・花衣いろは縁 起	『八重霞浪花浜萩』「新やしきの段」	島初演
文化07・03・03	大坂	北の新地芝居	国性爺合戦・曾根崎模様	『曾根崎模様』「帯屋のだん」切	鐘初演
文化07・03・25	大坂	北ノ新地芝居	太平記忠臣講釈・日蓮聖人御法海・妹背 山婦女庭訓	『太平記忠臣講釈』「七つ目」切	鐘初演
文化07・05・05	大坂	北の新地芝居	敵討優曇華亀山	『敵討優曇華亀山』「遠しう屋の段」切	鐘初演
文化07・08・16	大坂	道頓堀大西芝居	三日太平記・花の上野誉石碑・大塔宮囃 鎧・京鹿子娘道成寺	『三日太平記』「嘉平治住家の段」切	鐘初演

[illegible]

84	1813	文化10・06・12	大坂	御霊社内	義経腰越状・恋娘昔八丈・北条時頼記	『北条時頼記』『女鉢木雪のだん』	筑前再演	0882a
		文化10・07・17	大坂	御霊社内	「見取り興行」・那須与市西海硯・競伊勢物語・娘景清八島日記・義臣伝読切講釈	『娘景清八島日記』『三段目』切	鐘初演	0885
		文化10・08・01	大坂	御霊社内	廓景色雪の茶会・娘景清八島日記	『娘景清八島日記』『三段目』切	鐘初演	[0887 原板]
		文化10・08・15	京	和泉式部境内芝居	和田合戦女舞鶴・重井筒・恋娘昔八丈・北条時頼記	『北条時頼記』『女鉢の木雪の段』	筑前再演	0888A
		文化10・09・20	京	和泉式部境内芝居	太平記忠臣講釈・先代萩	『太平記忠臣講釈』『七段目』切	鐘初演	0892
		文化10・10・15	大坂	御霊境内	太平記忠臣講釈	『太平記忠臣講釈』『七つ目』切	鐘初演	0894
		文化11・01・13	京	和泉式部境内芝居	敵討世万歳亀山・義経腰越状	『敵討世万歳亀山』『遠州屋の段』切		0900
		文化11・02・04	京	和泉式部境内芝居	絵本太功記・いろは縁起	『絵本太功記』『尼が崎の段』切		0901
		文化11・04・11	大坂	道頓堀若太夫芝居	近江源氏先陣館・檀浦兜軍記	『近江源氏先陣館』『第八』切、 『檀浦兜軍記』『琴責のだん』かけ合重忠	鐘初演 駒再演	0907A
		文化11・05・04	大坂	道頓堀若太夫芝居	鎌倉三代記・心中天網島	『鎌倉三代記』『三うらの介内のだん』切		0910A
		文化11・07・25	大坂	道頓堀若太夫芝居	仮名手本忠臣蔵	『仮名手本忠臣蔵』『九つ目』切ほか	筑前初演	0917A
		文化11・08・15	大坂	道頓堀若太夫芝居	絵合太功記・加賀見山廓写画	『絵合太功記』『尼ヶ崎の段』切		0920A
		文化11・10・07	大坂	道頓堀若太夫芝居	鄙島原由緒菊水	『鄙島原由緒菊水』『七冊目』切		0923A
		文化12・01・24	京	四条道場芝居	鄙島原由緒菊水	『鄙島原由緒菊水』『七冊目』切		[記載なし]
		文化12・03・03	京	四条道場芝居	苅萱桑門筑紫轢・関取千両幟	『苅萱桑門筑紫轢』『監物屋敷の段』切、 同「高野山の段」中	筑前再演	補訂45
85	1814	文化12・04・17	大坂	座摩境内	義仲勲功記・いろは蔵三組盃・伽羅先代萩	『義仲勲功記』『三段目』切	筑前初演	0933
		文化12・05・22	大坂	ざま境内	太平記忠臣講釈	『太平記忠臣講釈』『第七』切	鐘初演	0936
		文化12・07・29	大坂	さま宮境内	和田合戦女舞鶴・薫樹果物語・桜鏑妬鮫 鞘・曲輪文章・大切都風流おどり	『和田合戦女舞鶴』『三段目』切	筑前再演	0938A
		文化12・08・23	大坂	座磨社内	碁太平記白石嘶・絵合太功記・加賀見山 旧錦絵	『絵合太功記』『尼がさきのだん』切		0944
		文化12・09・09	大坂	道頓堀大西芝居	一谷嫩軍記・染模様妹背門松・傾城返魂 香	『一谷嫩軍記』『三段目』切	筑前初演	0948
86	1815							

87	1816	文化12・10・20	大坂	座摩社内	日蓮聖人御法海・染模様妹背門松	『日蓮聖人御法海』「勘作内の段」切	筑前初演	0952
		文化12・11・25	京	因幡薬師芝居	近江源氏先陣館・雁金	『近江源氏先陣館』「第八」切	鐘初演	0956
		文化13・01・03	大坂	ざま社内	日吉丸稚桜・恋女房染分手綱	『恋女房染分手綱』「子わかれのだん」		0960
		文化13・01・晦	大坂	ざま境内	大内裏大友真鳥・比翼塚・奥州安達原	(病気休演・当初から役割なし)		0961a
		文化13・03・01	大坂	さま社内	竜宮連理鐘・北条時頼記	『北条時頼記』「雪のだん」	筑前再演	0963a
		文化13・03・04	大坂	座摩境内	薩摩歌妓鑑・北条時頼記	『北条時頼記』「雪のだん」	筑前再演	0964
		文化13・04・19	大坂	ざま境内	義経千本桜・檀浦兜軍記	『義経千本桜』「三段目」切、 『檀浦兜軍記』「琴責のたん」かけ合	筑前初演 駒再演	0966
		文化13・08・23	京	六角堂境内芝居	国性爺合戦・女護島・摂州渡辺橋供養・ 朧桂川	『国性爺合戦』「三」切		0973
		文化13・09・10	大坂	荒木芝居	絵本優曇華物語・義仲勲功記・傾城反魂 香	『義仲勲功記』「三段目」切	筑前初演	0978a
		文化13・12・26	大坂	いなり社内	蝶花形名歌島台・関取二代鑑・義臣伝説 切講釈	『蝶花形名歌島台』「八冊目」切		0983 (A)
88	1817	文化14・03・02	大坂	いなり社内	祇園祭礼信仰記・京鹿子娘道成寺	『祇園祭礼信仰記』「てんが茶やぜさい内 の段」切	島初演	0986
		文化14・04・15	大坂	いなり社内	太平記忠臣講釈・裙重浪花八文字	『太平記忠臣講釈』「喜内住家の段」切	鐘初演	0989
		文化14・05・04	大坂	いなり社内	近江源氏先陣館	『近江源氏先陣館』「第八」切	鐘初演	0991
		文化14・07・14	大坂	いなり境内	三国無双奴請状・大塔宮囃鑑・薫樹累物 語・苅萱桑門築紫轢	『苅萱桑門築紫轢』「山のだん」切	筑前再演	0993

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」諸本対校表

- 一、本表は『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家」の諸本間の異同をみるために作製したものである。
- 一、各本ともに本文のみを記して、節章・振り仮名・捨て仮名は省略した。
- 一、「No」項には、本文を校合するための手立てとして、フシ落チを基準として32の段落を数えた。Aのフシ落チで区切る場合は実線、B Cのフシ落チの場合は破線で区切った。
- 一、「A・大坂板五行本（内題「日蓮聖人御法海 三の切）」項には、大坂板抜き本の本文を記した。底本は、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館（山崎孝氏（36））。
- 一、「B・通し本（『日蓮聖人御法海』）」項には、通し本の本文を記した。底本は、関東短期大学松平記念図書館本。
- 一、「C・通し本（『いろは日蓮記』）」項には、通し本の本文を記した。底本は、関西大学図書館（911）*C1*20）本。
- 一、「A・大坂板五行本（内題「日蓮聖人御法海 三の切）」と「B・通し本（『日蓮聖人御法海』）」との間で異同のある箇所については、該当する本文をゴチック体で示し、対照しやすいように*を付して二桁の洋数字を与えて、「No」項ごとに数えた。

No.	A・大坂板五行本（内題「日蓮聖人御法海 三の切」）	B・通し本（『日蓮聖人御法海』）	C・通し本（『いろは日蓮記』）
01	行水の測瀬と替る世の中に。つきぬ思ひの晴やらず。くもる日も立八ツの鐘身も金事にとつ置つ。*01胸をくだいて立帰る。勘作が妻のお伝内入悪く打ちしほれ。	行跡へ。 日も立八ツのかね事に*01胸を砕て立帰る。勘作が妻のお伝内入わるく。打ちしほれ。	出て行。 日も立八ツのかねことに胸をくだいて立帰る。勘作が妻の伝。内入悪く打ちしほれ。
02	「お袋様今帰り（日蓮三老オ）ました。」「ヲ、待かねましたはいの*01。よふ戻つて下さつた」と。機嫌よい程*02猶氣の毒。「さればいな。方々の近付を歩行廻つて頼んでも。思ふに任せぬ金銀つく。*03」「ア、コレく。其事なら苦にして下さんな。*04 其金は調いましたはいの。*05」「ヒエ、。」「サア。深い（日蓮三老ウ）様子は跡での事。何角差置*06 庄屋殿が。今勘作を迎ひに行れたはいの。*07」「エ、。そりやまあほんまの事*08 かいな」と。悦びあふこそ道理なれ。*09	「お袋様今帰りました。」「ホ、待兼た*01。よう戻つて下さつた」と。祖母の機嫌も*02 猶氣の毒。「方々と近（日四十九ウ）付の方を廻り杓ふつて見ても。*03」「ア、これ苦にせまい。*04 其金は調ふた。*05」「ヒエ、。」「様子はゆるりといひませう。*06 庄屋殿が今勘作を迎ひに（ナシ）*07。」「アノまあそれはほん*08 かいな」と。取付悦ぶ嬉しさの。拝み廻せば。*09	「お袋様今帰りました。」「ホ、待兼たよふ戻つて下された」と。祖母は（日五十二オ）機嫌も猶氣ノ毒。「方々と近付の方を廻り。杓ふつて見ても。」「ア、是。苦にせまい其金とはとふた。」「ヒエ、。」「様子は緩と言ませふ庄屋殿が今勘作を迎ひに。」「あのマアそれはほんかいな」と取付悦ぶ嬉しさの。拝廻すも道理也。
03	「ヲ、嬉しい筈く*01。まだく跡に目出たい事があるぞいの。勘作が戻られたら。*02 女夫ならべて咄し（日蓮三三オ）ましょ。」「アイくく*03 マア何角は差置連合の命がはり。出来にくい*04 金調ふたは。仏様のお蔭故是程有がたい事はござりませぬ*05。今も今とて戻る道で去人の咄しには。『鎌倉の執権北条重時殿。世に希な病*06 に付。申の年の年（日蓮三三ウ）月揃ふて*07 生れた男の子の生胆を買んとて。方々を*08 尋れ共。金ほしがる人は有ても。子を売ふといふ邪見な者も*09 ないも。仏法の世の中』と後生を願ふ衆の自慢。夫が命のせつばに成て。金の工面の出来たもの。（日蓮三三オ）天道様のおあてがい。目出たい*10 事でござんす」といさむ詞の先折て*11。」「イヤコレお伝。何といやるぞ。鎌倉の執権重時殿の難病にて*12 申の日申の刻に生れた男の子の生胆とやらが入のか	「ヲ、嬉しい筈*01。まだく跡にめでたい事があるぞいの。勘作が戻りやつたら*02 女夫ならべて咄しましょ。」「アイくく*03 マア何かは指置連合の命かはりの*04 金調たは。有がたい事*05。今も今迎な戻る道で去人の咄しには。『鎌倉の執権北条重時殿。世に希なる異病*06 に付。申の年の申の月。申の日に*07 生れた男の子の。生胆を買んと方々*08 尋れ共。金ほしがる人は有ても。子を売ふといふ邪見な（日五十五オ）者*09 ないも。仏法の世の中』と後生を願ふ衆の自慢。調ひにくい金の調ふたも仏のおかげ。有がたい*10 事でござんす」と語る間に*11。」「イヤこれお伝何といやるぞ。『鎌倉の執権。重時殿の難病の妙薬に。*12 申の日申の刻に生れた。男の子の生胆が入』と言か。*13」「サアそふいふ噂でござんす*14。」「	「ヲ、嬉しい筈。是も孫の経市が影。能子があつたで思はぬ仕合。」「マア何かは存ませぬが。連合の命替りの金と、なふたは運のよい事。今も今とて戻る道で。去人の咄しには。『鎌倉の執権。北条重時殿。世に希な異病に付。申の年の申の月。申の日に生れた男の子の。生胆を（日五十二ウ）買んと方々尋ねれ共。金ほしがる人は有ても。子をうろふといふ邪見な者*09 ないも。法花経がひろまつた印」と。題目唱へる衆の自慢。いか様仏法の世の中。調ひにくひ金の調ふたも仏のお影。有難ひ事で御ざんす」と。語る間に「イヤコレお伝。何といやるぞ。『鎌倉の執権重時殿の。難病の妙薬に申の日申の刻に生れた。男の子の生胆が入』といふか。」「サアそふいふ噂。」「ホィ。ハア。」はつと老母は胸も張さく思ひ。取か

<p>や。*13「サアそふいふ噂でござんしたはいの*14。」「ホイハア」はつと。老母は(日蓮三三ウ)胸も*15張さく思ひ取返さふにも金はなし。立たり居たり身をもんで「わつ」と計に伏転べば*16。お伝は悔り気も付ず老母の傍へ差寄て。「コレ申*17お袋様。コリヤ又例の御持病か。何ぞ心にさはりしか」といたはり起せば。胸撫おろし。</p>	<p>「ホイ。はあ」はつと老母は(ナシ)*15はりさく思ひ。取かへさふにも金はなし。立たり居たり身をもんで。「わつ」と一声泣出せば*16。お伝は悔り気も付ず。「コレ*17お袋様。コリヤ又例の御持病か。何ぞ心にさはりしか」といたはり起せば。胸撫おろし。</p>	<p>へそふにも金はなし。立たり居たり身をもんで。どう計にたをれふす。お伝は悔り気も(日五十三オ)付ず。「コレヤお袋様こりや又例の御持病か。何ぞ心にさはりしか」と。いたはり起せば胸撫おろし。</p>
<p>「イヤ是はつかへ(日蓮三四オ)持のならひ。今のそなたの咄しを聞て。若*01其尋る子が有としらば。天下の権柄取もがれ。命取るゝ物ならば其親々の身に取て。歎の程は*02いか計と余所の事迄悲しさを。身に引受るは年寄の癖と思ふて下され」と。入訳隠す袖袂絞(日蓮三四ウ)かぬれば。</p>	<p>「イヤ是はつかへ持のならひ。ひよつとマア*01其尋る子が有としらば。天下の権柄取もがれ。(日五十五ウ)命取るゝ物ならば。其親々は*02いか計と。余所の事迄悲しさを身に引受るは年寄の癖と思ふて下され」と。入わけ隠す袖袂。しぼりかぬれば。</p>	<p>「イヤ是はつかへ持のならひ。ひよつとまあ其尋る子が有と知は。天下の権柄取もがれ。命とらるゝ物ならば。其親々はいか計と。よその事迄悲しさを。身に引うけるは年寄の癖と思ふて下され」と。わけを隠する袖の海。ほしかねてこそ見へにけれ。</p>
<p>「ハテわつけない。誰がまあ*01打明て生れ年を人にいふ人がござりましよ*02。近いたとへは*03こちの経市。生れ年はあふたれ共。*04人もしらねばいはぬが秘密。我生れ年を人にいはいはぬといふ事も。*05こんな事でござりませう*06」と。嫁の詞はいとど(日蓮三五オ)猶。胸をいためる母親が居るにも*07居られずかい立て。「何角は後に*08勘作が。戻つて来たらしらしてたも*09」と。袖に涙を*10押隠し。泣に入こそ道理なれ*11。</p>	<p>「ハテわつけない。誰*01打明て月日揃ていふ者がござんしよ*02。近い事*03こちの経市が書付に合たれど。*04人もしらねばいはぬが秘密。むさと人が年いはいはぬも*05こんな事でござんしよ*06」と。いふ程痛む胸の内。居るも*07居られずかい立て。「後に逢ましよ。*08勘作が戻りやつたらしらして*09」と。老母は涙*10押隠し。奥へ泣にぞ入にけり*11。</p>	<p>「ハテわつけない。誰打明て月日揃へていふ者がござんしよ。近ひ事こちの経市が。書付にあふたれど。人も知ねばいはぬが秘密。むさと人が年言ぬも。こんな事で御ざんしよ」と。(日五十三ウ)いふ程いたむ胸の内居るにあられずかい立て。「後に逢ましよ勘作が戻りやつたら知して」と。余りつらさに座を立て。老母は包に包兼奥へへしほれて入にけり。</p>
<p>お伝は跡を打見やり*01。「常から気ぼせいお袋様。手詰に成た金の事。*02どふして急に*03(日蓮三五ウ)調ふた。それ聞ふ物気がゝり」と胸にひゞくや暮の鐘。夫を待ば子の事も忘れてそれと気も付ず*04。「マア灯を灯して置ましよ」と。取出す火打行灯の。*05土がはらけの土色も牢者の罪は殺生の。報ひと今ぞ思ひ知。</p>	<p>お伝は跡を詠やり*01。「あのマア細いお心で*02どふして金が*03調ふた。それ聞ふ物気がゝり」と胸に。響や暮の鐘。夫を待ば子の事も忘れて(日五十一オ)内を尋もせず*04。「マア灯を灯て置ましよ」と。(ナシ)*05土かはらけの土色も牢者の罪は殺生の。報ひと今ぞ思ひしる。</p>	<p>お伝は跡を。眺やり。「あのまあ細いお心で。どふして金が調ふた。夫聞ふ物気懸り」と胸にひゞくや暮のかね夫を待ば子の事も忘れて内を尋ねもせず「まあ火をともして置ましよ」と土がはらけの土色も。牢者の罪は殺生の。報ひと今ぞ。思ひしる。</p>
<p>主の勘作くら紛れ(日蓮三六オ)打しほれたる門の口*01。「お伝く」と音なふ声。すかし詠て*02。「ヤアこちの人勘作殿。コレ明ても暮ても三人が。*03泣て計居たはいの。よふまあ*04戻つて下さんした。お袋様の働で命乞の金調ひ。嬉しい顔を見まする*05」と手を引内へ伴ひて。</p>	<p>主の勘作くら紛れ。打しほれて門口より*01。「お伝く」と呼声に。「どなたぞや」と走り出*02。「ヤアこちの人勘作殿。コレ明ても暮ても(ナシ)*03泣てばつかり居たはいの。よう*04戻つて下さんした(ナシ)*05」と手を引内へ伴ふて。</p>	<p>主の勘作くらまぎれ打しほれて門口より。「お伝く」と呼声に走出て。「ヤこちの人戻つてか。待兼た(日五十四オ)おそかつた」と。手を引内に伴ふて。</p>
<p>夫の膝に取(日蓮三六ウ)付て悦び涙にむせびける。*01</p>	<p>「仮初の罪幾瀬の案し。お袋様の働で命乞の金調ひ。嬉しい顔を見る事や」と悦び涙にむせぶにぞ。*01</p>	<p>「仮初の罪幾世の案じ。お袋様の働で命乞の金調ひ。嬉しい顔を見る事や」と。悦び涙にむせぶにぞ。</p>
<p>勘作も打しほれ。「有がたい母のお慈悲と。明暮こがれしそなたの歎。心が通じて帰りが思へばく勿体なや。いつ孝行な事もなくお世話の上に歎をかけ。未来の罪も恐ろ</p>	<p>勘作も打しほれ。「有がたい母のお慈悲と。明暮こがれしそなたの歎。心が通じて帰りが思へばく勿体なや。いつ孝行な事もなく。御世話の上に歎をかけ。未</p>	<p>勘作も打しほれ。「明暮こがるゝそなたが心。通じて通れ帰りが。有がたい母のお慈悲。いつ孝行な事もなく。お世話の上にお世話をかけ。其罰忽身に</p>

し。いふ迄も（日蓮三七才）なければ共此上ながら母人を。
 *01 孝行にしてたも*02」と悔歎けば女房が*03。「ア、コレ、其悔言もふ入ぬ。お袋様のお待兼*04 今迄こそなれ。是からは*05 何ぼ孝行にせうと儘。イヤ孝行の次手に経市がしほらしい。それは、お前をこがれ泣て計おりました*06。（日蓮三七才）コレ早ふ来てと、様に逢ぬか。ほんにさつきにから顔も見ず*07。どこに居るぞ経市」と。立寄一間母親は。涙ながらに転び出*08。「ヤレ、勘作健で戻てたもつたか」と。取付歎けばお伝は押分。「モウ、泣事はござりませぬ。（ナシ）*10 わつさりと打潤ふて*11 悦んだがよ（日蓮三八才）ござんす。又いは、是程めでたい事はないに。*12 何ぼ嬉し涙でも不吉」と。と転じかへ。「此*13 経市は寝て居るか」と。立上る裾*14 老母は引留。「イヤ経市は内には居ぬ。」ム、そんなりやどこへ行きましたへ。*15「ヤ、行先いふて聞そふ」と。隠し持たる懐剣を咽にがはと（日蓮三八才）突立れば。「是は」と驚く勘作夫婦。「コハ何故の御最期」と取付歎くを*16 老母は突退*17 息をつぎ。「経市が往た先は。相州鎌倉松葉が谷。」エ、ヤ、悔りは尤。最前庄屋に思はずも。孫の生れた年月の。咄した門の口。様子を聞たか*18 侍が。経（日蓮三九才）市を見てほめそやし。「養子に*19 くれい」と（ナシ）*20 礼物の。金を見るより飛立計。勘作を*21 助る過料の金。天から降たと心得て。孫の命が妙薬のかはりに立とは露しらず*22。其侍にやりました*23」と。語るを聞て女房は「わつ」と計に泣倒れ前後。（日蓮三九才）不覚に見へければ。

来の（日五十一才）罪も恐ろし。いふ迄もなく今よりは*01 孝行にしてたもや*02」と。悔歎けば女房*03。「ア、これ、お袋様の御待兼。其悔言もふ入ぬ。*04 今迄こそなれ是から*05 なんぼ孝行にせうと儘。イヤ孝行の次手に。経市がしほらしいそれは、おまへをこがれ。悲しがつて居ました*06。コレはやう来て爺様に逢ぬか。ほんにさつきにから顔見ぬが*07。どこに居るぞ経市」と。立よる一間母はかけ出*08。「ヤレ、勘作。まめで戻つてたもつたか」と。取付歎けばお伝は押分。「モウ*09 泣事はござりませぬ。あんまり嬉しうて。わしも泣たりや。連合は猶しめり豆。*10 わつさりとめでたいと*11 悦んだがよござんす。又いは、是（日五十二才）程めでたい事ないに*12 なんぼ嬉し涙でも不吉」と。と転じかへ。（ナシ）*13 経市は寝てあるか」と。奥へ行を*14 老母は引とめ。「イヤ経市は内には居ぬ。」そりやどこへへ。*15「ヤ、行先いふて聞そふ」と。隠し持たる懐剣で我咽ぐつと突立る。「フウ悲しや」と取付お伝。*16 老母は押退*17 息をつぎ。「経市がいた先は。相州鎌倉松葉が谷。」エ、ヤ、悔り有ふ。よふ思へば最前に。庄屋が思はず誕生日。わしも思はず生れた月日。祝ひせいのせまいのといふたを聞た*18 侍が。経市を見て誉そやし。「ナシ」*19 くれい」といふて*20 礼物の。金を見るより何かなし。勘作*21 助る料の金。天から降たと心得て。胆とらるゝとはしらいでの*22。其（日五十二才）侍にやつたはいの*23」と。語るを聞て女房は「わつ」と計に泣倒れ前後。ふかくに見へければ。

受る未来の罪も恐ろし。いふ迄もなく随分と孝行にしてくれよ。思へばおれは不孝者」と悔ば女房。「ハわつけない悔事。是迄こそ各別。是から何ぼ孝行にせふと儘。いかふお袋様も待兼て御さる。息子の経市も。ヤほんに（日五十四才）あれが事を最前から忘れていた。定て寝てかな居るで有。どりや起して逢そふ」と。立て入間を押開母はかけ出。「ヤレ珍らしの勘作や」と。取付歎けばお伝は押分。「モウ泣事は御ざりませぬ。あんまり嬉しうてわしも泣たりや。つれ合は猶しめり豆。わつさりと目出たいと悦んだがよござんす。又いは、是程めでたい事ないになんぼ嬉し涙でも。不吉」と。とてんじかへ。「経市は寝てあるかとつ様に逢ぬか」と。尋に奥へ行所を。老母は引とめ。「イヤ経市は内には居ぬ。」ソリヤどこへへ。「ヤ、行先いふて聞そか」と。隠し（日五十五才）持たる懐剣で我咽ぐつとつき立る。「フウ悲しや」とお伝は取付。夫も共にすがるにぞ。老母は押退息をつぎ。「経市がいた先は。相州鎌倉松葉が谷。」エ、ヤ、悔り有ふ。よう思へば最前に。庄屋が思はず誕生日。私も思はずうまれた月日。祝ひせいのせまいのといふたを聞たか侍が。経市を見てほめそやし。「くれい」といふて礼物の。金を見るより何かなし。我子助る過料の金。天からふつたと心得て。胆とらるゝとは知るでの。其侍にやつたはいの」と。語るを聞て女房は「わつ」と計に泣たをれ前後。ふかくに見へければ。（日五十五才）

「ヲ、悲しい筈赦して下され。生れ付たる発明を見込で望む無理所望。御大身のお侍其お世継と成ならば*01。嬉しや孫が出世ぞと。思ひ込だは因果か罰か。こなたが戻つた上の事。何角の相（日蓮三十才）談せふ物*02と。思へど金に心はせく*03。其上に又経市も。『暇乞にか、様が泣しやつたりやわしも悲しい。跡から便する程に*04。早ふやつて下され*05」と。命とられに*06 行共しらず。気をせく孫と手詰の金。変改に合ぬ其内にと。（日蓮三十才）貰ひにきた*07 あつちより子をやる方から心がせき。渡したはば、が誤り。*08 こなたが戻つて『重時の難病に。申の年申の月。申の刻限揃ふたる。生れ年の*09 男の子

「ヲ、悲しい筈赦して下され。生れ付たる発明を見込で子にか譜代にも。仕てくれるのと心得て兼て望の侍奉公*01。嬉しや孫が出世ぞと。思ひ込だは因果か罰か。こなたが戻つた上の事（ナシ）*02と。思へど金に心はせき*03。其上に又経市も。『暇乞にか、様が泣しやつたりやわしも悲しい。跡から便する程に（ナシ）*04。早うやつて*05」と殺されに*06 行共しらず気をせく経市。折からこちらの金は急ぐ返改に合ぬ内と。*07 あつちよりこつちがせいて。つあやつてのけました。*08 こなたが戻つて『重時の難病に。申の年申の月。申（日五十三才）の刻限揃ふて生れた*09 男の子の。生胆が

「ヲ、悲しひ筈赦して下され。生れ付たる発明を見込で子にか譜代にも。してくれるのと心得て兼て望の侍奉公。嬉しや孫が出世ぞと。思ひ込だは何事ぞ。こなたが戻つた上の事と。思へど急ぐ侍が心を知らず経市も。『暇乞にか、様が。なかしやつたりやわしも悲御さる。早ふやつて」と殺されに。行共知ず気をせいた。折からこちらの金は急ぐ返がへに合ぬ内と。あつちよりこつちがせいて。こなたが戻つて『重時の難病に。申の年の申の日の。申の刻に生れた生胆が入』といふと。ぐつとさし込五体の肉。

18	17	16	15	14	13	12	11
		跡見送りて女房は老母の死骸泣くも。取片付る*01	「いづれはかなき世の中に。愛別離苦は有ならひ歎く女房後世こそ大事。仏壇へ御明し上。(日蓮三十三才) 称名唱へて野辺送り。こなたへ来れ」と打しほれ。一間へこそは入にけれ。	「誠に親子は一世にて。詞かはする間もなく(日蓮三十二才) 過行給ふか浅ましや。其元いへば我を助んと有慈悲故。御身に満る地獄の縁。情なやいとおしや」と。泣こがれしが。涙を押へ。	夫は始終泣しほれ物をも。いはず居たりしが。	「ノウこれ申お袋様。親のかはりに先立て。死だあの子は孝行もの。*01(日蓮三十二才) 何の悔まふ泣やしませぬ*02。早まつたこと遊ばして悲しい上の悲しみは。聞へぬはいの」と取付て。泣ど悔めど詮方も涙の種と成にけり。	跡をしたふて走つたとして*01戻しもせまいし金もなし*02。直に其場で自害して言訳せふとは思へ共*03。せめて此世で勘作が命冥加な顔見てからと。*04今迄命ながらへしは*05。老に惚たる心の迷ひ。間違ひ事*06(日蓮三十一才)と諦めて。嫁女堪忍して下され*07。赦してたも勘作。二人が*08中のほんそ子を殺した祖母は此通り」と。剣をぬけはがつくりと*09。七十一期を名残の命*10此世の縁*11は切れにけり*12
		跡見送りて。女房は老母の死骸取片付。*01	「いづれはかなき世の中に愛別離苦は有ならひ歎く女房後世こそ大事。仏壇へ御明上。称名唱へて野辺の送り。こなたへ来れ」と打しほれ一間へこそは入にけれ。	「誠に親子は一世にて。詞かはする間もなく過行給ふか浅ましや。其元いへば我を。助んと有慈悲ゆへ。御身に満る地獄の縁。情なやいとおしや」と。泣こがれしが涙を押へ。	夫(日五十三才)は始終泣しほれ物をも。いはず居たりしが。	「ノウこれ申お袋様。死すと其わけおつしやつても。親の為に成た子を。*01何の悔ふ泣もせぬ*02。早まつた事遊ばして悲しい上の悲しみは。聞へぬはいの」と取付て。泣ど悔めど詮方も涙の種と成にけり。	かけ走つていた辻*01戻しもせまい(ナシ)*02。言訳に自害とは思ふたれど*03。せめて此世で勘作が命冥加な顔見て死ふと*04今迄待て居ました*05。老に惚た*06と諦めて。堪忍して下され嫁ごぜ*07。赦してたも勘作。二人の*08中のほんそ子を。殺したばは此通」と。指込剣をぬくと早*09。七十一を名残にて*10此世の綱*11は切果たり。*12
		女房は老母の死骸取付。	「いづれ。はかなき世の中に愛別離苦は有ならひ。歎く女房。後世こそ大事。仏壇へ御明し上。称名唱へて野辺の送り。こなたへ来れ」と打しほれ。一間へこそは入にけれ。	「誠に親子は(日五十六才) 一世にて。詞かはする間もなく。過行給ふか浅間しや。其もとといへは某を助んと有慈悲故。御身にみつる地獄の縁情なやいとをしや」と。泣こがれしが涙を押へ。	夫は始終泣しほれ物をも。いはずるたりしが。	「ノウ是申お袋様。死すと其訳おつしやつても。親の為に成た子を。何の悔ふ泣もせぬ。はやまつた事遊ばして悲しひ上の悲しみは。聞へぬはいの」と取付て泣ど悔めど詮方も。涙の種と成にけり。	懸走っていた辻(日五十六才)もどしもせまい。言訳に自害とは思ふたれ共。せめて替りに勘作が。命冥加な顔を見て。死ふと今迄待て居ました。老に惚れたと明らめて。堪忍してたべ嫁ごぜ。赦してたも勘作。二人の中のほんそ子を。殺した祖母は此通り」と。さし込剣をぬくと早。あへなき最期を見る悲しさ。
		あたいにおこした金はなし。何を持って取かへそふ。とはいへ現在子の命見捨て置ふか。とかく生れた月日の刻限。知れたかあの子が因果。かはいの者や」とどうどふし前後。ふかくに取乱す。					

19 表の方。*01 庄屋の徳蔵いつきせき*02 涙片手に走付*03。「ア、*04 コレ」お内義ハ、アこなたは*05 もふ泣て居るか。扱（目蓮三十三ウ）拍子の悪い時はする事なす事皆ぐりはま*06 地頭の方へ鎌倉から東條判官とやらが*07 来て。『過料で済すは怪我過の科人。現在殺生禁断の所と知て鶴を遣ひ。大分の魚を取たは盗賊同前*08。助る事は罷ならぬ*09』と。いとしや（目蓮三十四ウ）勘作殿は仕置にあふて死れたはいの。ア、金程大切な宝はないと思ふても*10。まさかの時には金銀も何の役に立物じやないわいの*11。コレかへしますお内義。ア、よい人で有たのに。むごたらしいめにあはれた」と。涙を咽につまらせてしやくり上れば*12（目蓮三十四ウ）

かゝる歎の折からに*01 庄屋の徳蔵。（ナシ）*02 涙片手に。かけ来り*03。「ナシ *04 コレ」お内義。ハアこなたも*05 もふ泣て居るか。扱悪い時は悪い物。*06 地頭の方へ鎌倉から東條判官が*07 来て。『科料で済すは怪我過の科人。現在殺生禁断の所と知て鶴をつかひ。大分の魚を取たは盗賊も同前*08。助る事はならぬ*09』と。いとしや勘（目五十四ウ）作殿は。仕置にあふて死れたはいの。ア、金程大切な宝はないと思ふて欲という。耳にかへてもほしかつたが*10。まさかの時には金銀も。何の役に立物じやない（ナシ）*11。コレかへしますお内義。ア、よい人で有たのにむごらしいめにあはれた」と大声。上て歎くにぞ。*12

かゝる歎の折からに。庄屋の徳蔵涙片手に欠来り。「是々お内義。ハこなたももふ泣て居るか。扱わるひ時は悪い物。地頭の方へ鎌倉から東條左衛門が来て。『過料で済すは怪我過の科人。現在殺生禁断の所と知て鶴を遣ひ。大分の魚を取たは盗賊も同前。助る事はならぬ』とつたり。いとしや勘作殿は。仕置に合て死しやつた。役にも立ぬ此金」と。（目五十七ウ）投付かへせば

20 お伝は興さめ*01。「ヲ、何を爰な庄屋様はわつけもない事おつしやります*02。勘作殿はさつきに戻つて。看経をして*03 居られます。アレ*04 アノ鉦の音が聞へぬか」といへど庄屋は。顔打詠め。「ア、*05 いとしやこなたは気が上つたの。（ナシ）*06 ヲ、*07 道理じや」息子は出世でいたと思へば。（目蓮三十五ウ）胆を*08 取れにいたとのお上での噂*09。其上に又*10 夫が殺されたと聞れたら*11。気も違はひで何とせうぞいの*12。「ヲ、此お方はいま」し。（ナシ）*13 アノ奥に聞へる鉦が*14 勘作殿。（ナシ）*15 お袋様が自害なされ。野送りの御回向を申てゐてごんずはいな。*16「これは又*17 とつけない。（目蓮三十五ウ）お袋が死だといはしやる程。やつぱりお氣ちに違ひはないは*18。コレこなたの男の勘作はの。*19 俺が見てゐる傍で首はころり*20。『死骸は*21 くれる』と有た故。杓の柄で首ついで戸板に乗て置ました。追付爰へ持てくる。見て悔りせまいぞや。（ナシ）*22 アレ」死骸はもふ（目蓮三十六ウ）爰へ」と。いふ中持くる戸板の死骸。なじみの村中しほ」と*23 涙片手に昇入て。庄屋諸共に*24 立帰る。

女房は興さめ顔*01。「ヲ、何を爰な庄屋様は。きよろ」とした事おつしやる*02。勘作殿はさつきに戻つて。看経して*03 居られます。（ナシ）*04 あの鉦の音が聞へぬか」と。いへば庄屋は顔打詠め。「（ナシ）*05 いとしやこなたは気が上つたの。」「何がいな。*06「イヤ*07 道理じや」。息子は出世でいたと思へば。胆*08 とられにいたとのお上での咄し*09。其上に（ナシ）*10 夫が殺されたと聞れたら*11。気も違はひでなんと（目五十五ウ）せう。コレ心を鎮て聞しやれ」と。押有むれば。*12「ヲ、此お方はいま」し。しい事計いふてじやはいの*13。あの鉦が*14 勘作殿。其孫売たが誤りと。*15 お袋様が自害なされ。野送りのお念仏今唱へてごんず*16」といふ程庄屋は。「サア其*17 とつけない。お袋の事いはしやる程おきくさい*18。コレ勘作は*19 おれが見る前で首落され*20。『死骸*21 くれる』と有た故。杓の柄で首ついで戸板に乗て置ました。追付爰へ持てくる見て悔りせまいぞや。おきく相手にいふが氣違ひ。後に来てお袋に逢ていはふ。*22 アレ」死骸はもふ爰へ」といふ中持くる戸板の死骸。内へかき入庄屋諸共。*23 涙かた手に（ナシ）*24 立帰る。

女房はぎよつと。「ナニヲ爰な庄屋様は。きよろ」とした事計言んす。勘作殿はさつきに戻つて。看経してじやはいな。あの鉦の音が聞へぬか」と。いへば庄屋は顔ながめ。「いとしやこなたは気がのぼつたの。」「ナニガイナ。」「いや道理じや」。息子は出世でいたと思へば。胆とられにいたとお上での咄し。其上に夫が殺されたと聞れたら。気も違はひで何としよ。いとしやなふ」と取付を払ひ退て。「ヲこなおさんはいま」し。しい事計いふてじやはいの。アノ鉦の音が勘作殿。其孫売たが誤りと。お袋様が自害なされ。野送りのお念仏。今唱へてごんず」と。いふ程庄屋は。「サア其とつけないお袋の事（目五十八ウ）いはしやる程おきくさい。勘作はおれが見る前で首おとされ。『死がいくれる』とあつたゆへ。杓の柄で首ついで戸板に乗て置ました。追付爰へ持てくる見て悔りせまいぞや。お吉相手にいふが氣違ひ。後に来てお袋に逢ていはふ。あれ」死がいはもふ爰へ」と。いふ内持くる戸板の死がい。内に捨置庄屋諸共。涙片手に立帰る。

21 女房猶も合点せず。「定て是は*01 人違へとはいふ物の*02 形格好。勘作殿に似た死骸」と。こは」ながら。差寄て*03 見れば連添我夫。（ナシ）*04「ヤアコリヤ（目蓮三十六ウ）疑ひない*05 勘作殿。どうした訳*06」と半狂乱。

女房猶も合（目五十五ウ）点せず。「コリヤ大きな*01 人違へ。いか様衣類*02 形格好。勘作殿に似た死骸」と。こは」ながら顔上て*03 見れば連添我夫。捻廻し引廻し。*04「ヤアこりやまさしく*05 勘作殿。

女房猶も合点せず。「こりや大な人違へ。いか様衣類形格好勘作殿に似た死がい」と。こは」ながら顔上て。見れば連添我夫。捻廻し引廻し。「ヤアこりや正敷勘作殿。コリヤどふじや」と。半氣半

<p>心も空に魂も*07 飛で正体泣計*08。 足も心も地に付ず。</p> <p>「とはいへ奥の鉦の音は。我夫ならで心得ず*01」と走寄て*02 一間の障子。明る内には*03 鉦の音も。姿も見へず仏檀の。灯火眠る透間より。</p>	<p>コリヤどうじや／＼*06」と。 半氣半乱心も空。魂*07 飛で正体なく(ナシ)*08。 足も心も地につかず。</p> <p>「とはいへ奥の鉦の音は我つまならで誰やらん*01」と。 走り行て*02 一間の障子。さつと明れば*03 鉦の音も。姿も見へず仏檀の。灯火眠り透間より。</p>	<p>乱心も空。魂飛で正体なく足も心も地に付ず。</p> <p>「とはいへ(日五十八ウ)奥の鉦の音は。我夫ならで誰やらん」と。 走り行て一間の障子。さつと明れば鉦の音も姿も。消て仏檀のともしびねふる計也。</p> <p>女房わつと泣たをれ。 性根正体なかりしが。</p>
<p>吹(日蓮三十七ウ) 来る。風の身にしてみて*01。「わつ」と計に泣倒れ性根。 正体なかりしが。</p> <p>漸涙の顔を上。*01「扱は非業の刃にかゝり。*02はかなふ命を取れても。親と妻子に引されて。迷ふて来たのかちの人。魂魄此家に有ならば*03 今一度無事な姿を見せ。(日蓮三十七ウ) 詞かはして下され*04」と。返らぬ事をくどき立。*05 そこよ爰よとかけ廻り。跡に残りし鉦撞木*06。「見るも悲しやはかなや」と。打付投付身をもたへ。「ナシ」*07 扱も／＼世の中の人の因果も是程に廻れば廻る物かいの*08。親子夫婦*09 四人の内(日蓮三十八ウ) けふ一日に三人が。*10 皆浅ましい(ナシ)*11 此思ひ。因果人共業人共たとへ方なき我体。一所に死たい切りたい*12。鵜の咽しめたる*13 報ひなら俱に命を取よ」と。狂気の如く欠廻り老母の死骸を見ては泣。夫のむくろを押うこかし。遙の空(日蓮三十八ウ)を。詠めやり「恋しの我子なつかし*14や。可愛の者や」と伏転ひ声を限り泣尽す涙は軒の。川水に浪立。さはぐ如くなり*15。</p>	<p>(ナシ)*01「ハツア思へば庄屋のいはれしに違はず。情なや科に落。*02はかなう命をとられても。親とつま子に心がひかされ(日五十六ウ) 魂計我内へ。詞かはしに戻られしやつたかいとしやのふ。せめて*03 今一度。姿をば見せて下され勅作殿*04」と。(ナシ)*05 そこよ爰よとかけ廻り。跡に残りし鉦と撞木*06。「見るも悲しやはかなや」と。打付投付身をもたへ。「テモ」*07 扱も／＼人の因果も是程に廻ればめぐり来る物か*08。夫婦親子*09 四人の内。一日の日に親子三人*10 皆浅ましい死をさし。一人残りて*11 此思ひ。因果人共業人共。譬がたなき我体。切てくれぬか突てくれぬか*12。鵜の咽しめたる*13 報ひなら。しめ殺せ喰殺せ」と。狂気のごとくかけ廻り。老母の死骸を見ては泣。夫の死骸を押うこかし。はるか空を詠めやり「恋しの我子(日五十六ウ)(ナシ)*14や。可愛の者や」と伏転び。／＼ては正体も泣こが。るゝぞ道理なり。*15</p>	<p>「人の因果も是程に廻り／＼て来ものか。夫婦親子四人の内。一日の日に親子三人。一人残つて此思ひ。因果人共業人共たとへがたなき我骸。切てくれぬか。突てくれぬか。鵜の咽しめたるが報ひなら。しめ殺せ喰殺せ」と。狂気のごとく懸廻り。老母の死がいを見ては泣。夫の死がいを押うこかし。遙の空を詠やり「恋しの我子やかはいの者や」とふしまろび／＼正体も泣こが。るゝぞ道理成。</p>
<p>や、有て涙を押へ。「ア、悔むまい歎くまい。皆何事も定まりし。浮世の中と■めて。*01 我のみ残り何かせん。(日蓮三十九ウ) 俱に冥途の道連は*02。此門口の流れこそ夫が禁制破りたる。生沢川の流れのすそ。鱗の餌と成ならば。少しは*03 罪も遁れん」と。小石を袂に拾ひ入。心を定めて表の方。川辺に。へよりて観念し。*04 身を投んとする其*05 折から。</p>	<p>や、有て涙をおさへ。「よし／＼是も皆仇事。*01 我のみ残り何かせん俱に冥途の道連*02。此門口の流れこそ夫が禁制やぶりたる。生沢川の流のすそ。鱗の餌とならば少の*03 罪ものかれん」と。小石を袂に拾ひ入(ナシ)*04 身を投んとせし*05 折から。</p>	<p>「よし／＼(日五十九ウ) 是も皆あだこと。我のみ残り何かせん共に冥途の道づれ。此門口のながれこそ夫が禁制破りたる。生沢川の流れのすそ。鱗の餌とならば少しの罪も遁ん」と。小石を袂に拾ひ入身を投んとせし所へ。</p>
<p>日(日蓮三十九ウ) 朗法師欠来り飛込所を引とゞめ*01「ヤレ女はやまるな。*02「イヤ／＼。生て居られぬ我罪業。見遁してたべ御出家*03」と。又立向ふ其所へ。末法有縁の大導師。高祖日蓮大聖人*04 しづ／＼と。立寄給ひ。*05「最前より物陰にて始終の様(日蓮三十ウ) 子は残らず聞*06。女が歎去事ながら*07。かゝる因果も宿世の業</p>	<p>日朗法師かけ来り飛込所を引かゝへ。*01「ヤレ早まるな。我師上人の仰有。暫し／＼」ととゞむるをふりはなし。*02「イヤ／＼。生て居られぬ我罪業。見遁して殺してたべ*03」と。身をあせるをとゞむる中日蓮*04 しづ／＼と御出有。*05「最前より物かげにて始終の様子は見聞たり*06。女が歎さる事なれ</p>	<p>日朗法師欠来り。飛込所をひつかゝへ。「ヤレ早まるな。我師上人の仰有。暫し／＼」と留る所へ。日蓮しづ／＼と御入有。「女がなげき去事なれ共。かゝる因果も宿業とは言ながら。殺生の罪誹謗の罪科。此国。いまだ正法を知らず。汝法花経に帰依し。一人の恥を出家させ。正法を以弔はゞ。夫は愚老母諸共</p>

＊08。殺生の罪誹謗の罪科。此国未正法をしらず。汝我法花経に帰依し一人の悻を出家させ。法花経を以て弔はゞ。夫は愚老母諸共。即身成仏疑ひ（日蓮三三ウ）有まじいか。く＊09」と宣へは。「愚の御僧様＊10 出家さする子か有は何しに惜み申すへき一人有し男の子は＊11 夫の為に命を売。生残つたはわたし＊12 一人。構はず死して給はれ」と歎沈は。＊13 「ホラ、其歎は尤々。＊14 汝か悻を買取て連歸りしは＊15（日蓮三三ウ）六郎左衛門といふ北条家の武士＊16 道にて計らす出合し故＊17『重時の病氣は誹謗の罪者婆扇鵲の良薬を用ゆる共。いつかな平癒思ひも寄す＊18。鎌倉に一字を建万部の御経を＊19 供養せば。早速全快＊20 有べし』と。病（日蓮三三ウ）即消滅の曼荼羅を遣はしそちか悻は助けたり。逢て歎をとゞめよ」と衣の裾より経市を取出し逢せ給ふにぞ母は夢かと歎も忘れ。「ヤレなつかしや有かたや」と聖人拝し我子をいだき悦び勇むぞ道理なり。

共＊07。かゝる因果も宿（日五十七ウ）業とはいひながら＊08。殺生の罪誹謗の罪科。此国いまだ正法をしらず。汝法花経に帰依し。一人の躬を出家させ。法花経を以て弔はゞ。夫は愚老母諸共。即身成仏疑ひ有まじ。出家さすや＊09」との給へば。「ア、おろかの仰や＊10 出家さする子があらば。何しにおしみ申すべき。一人有し男の子を＊11 夫の為に命を売。生残つたは我＊12 一人。かまはず死して給はれ」と。又かけ出るを「ソレ日朗」と引とめさせ。＊13 「ホ、＊14 汝が子を連行し。＊15 六郎左衛門といふ侍に＊16 道にて出合。＊17『重時の病氣は誹謗の罪。耆婆が良薬にても叶はず＊18。鎌倉に一字を建。万部の御経＊19 供養せば早速（日五十七ウ）平癒＊20 有べし』と。病即消滅の曼荼羅を遣はし。そちが躬は助けたり逢て歎をとゞめよ」と。衣の裾より経市を取出し逢せ給ふにぞ。母は夢かと歎も忘れ。「ヤレなつかしや有かたや」と。上人拝し子を抱き悦びいさむぞ道理なり。

即身成仏疑ひ有まじ。出家さすや」との給へば。「愚の仰や。出家さする（日五十九ウ）子が有ば。何しにおしみ申すべき。一人有し男の子を。夫の為に命を売。生残つたは我一人。見遁し殺して給はれ」と。又かけ出るを引留給ひ。「重時が難病は誹謗のつみ。耆婆が良薬にても叶ふべきや。幸かな本間六郎。経市をつれ立歸るを道にて出合。自業自得の一妙説聞せしに。もとより信者の本間六郎。密に一ツ子を戻したり。逢て歎きをとゞめよ」と。衣の裾より経市を。取出し合給ふにぞ。母は夢かと歎きも忘れ。「ヤレなつかしや有かたや」と。上人拝し子を抱。悦びいさむぞ道理成。

27 聖人＊01（日蓮三三ウ）重て女に向ひ＊02。『経市』と名を付しは正法に縁有しる。法花経は最以第一の経文。殊に人相を見れば＊03 よの常ならず日蓮に成かはり。法花経弘通の大導師とならん異相有。是より『日像』と名を改め我弟子たるべし」と。（日蓮三三ウ）仰せは実も理りや都は愚西国迄。弘め給ひし名僧は。此稚子の御事なり＊04。

日蓮＊01 重て（ナシ）＊02。『経市』と名を付しは正法に縁有印。法花経は最以第一の経文。殊に人相を見るに＊03 世の常ならず。日蓮に成かはり法花経弘通の。大導師とならん異相有。是より『日像』と名を改め我弟子たるべし」と。仰はげにも理りや都はおろか西国迄。弘め給ひし名僧は此稚子の事なりし＊04。

日蓮重て宣はく。『経市』と名を付しは。正法に縁有印。（日六十ウ）法花経は。さい第一の経文。ことに人相を見るに世の常ならず。日蓮に成替り。法花経弘通の大導師と成ん異相有。是より『日像』と名を改我弟子たるべし」と。仰は実も断や都は愚西国迄。弘め給ひし名僧は。此稚子の事成し。

28 「イテ此川にて夫が罪障。老母が後世も弔はん」と。勘作が死骸をは戸板ながらに水に浮め。自我偈百巻題目を俱に。唱ふる妻や子の声も。とゞくや妙法花経。皆是真（日蓮三三ウ）実しんゐの炎ぼつともへ立内よりも。鱗鵜の鳥うづ巻立て鉄の。背ならし羽をふるひ眼をいからし勘作が。死骸にたかつてし、むらをつゝき廻せば。

「イデ此川にて夫が罪障（日五十八ウ）老母が後世も弔はん」と。勘作が死骸をば戸板ながらに水に浮め。自我偈百巻題目を。俱に唱ふる妻や子の声もとゞくや妙法花経。皆是真実しんゐの炎ぼつともへ立。内よりも。鱗鵜の鳥渦巻立て鉄の。背ならし羽を震ひ眼をいからし勘作が。死骸にたかつてし、むらをつゝき廻せば。

「イテ此川にて夫を弔ひ。老母が後世も弔はん」と。勘作が死がいをは戸板ながらに水に浮め。自我偈百巻題目を。ともに唱ふる妻や子の声も。とゞくや妙法花経。皆是真実しんゐの焰。ぼつともへ立内よりも。鱗鵜の鳥うづ巻立て。鉄の背ならし羽をふるひ。眼をい（日六十ウ）からし勘作が。死骸にたかつてし、むらをつゝき廻せば。

29 女房子は「のふ情なや」「悲しや」と。川に欠おりかけ上り狂ひ歎くを聖人せいし。「是ぞ冥途の苦しみを此世で晴（日蓮三三ウ）す現世の責題目怠る事なかれ」と。あたりの小石拾ひ寄数多の石に七字の首題。日朗諸共一字づゝ書付水へ投入く。流れに向つて題目を。書せ給へば。多くの鵜の鳥一度に去て勘作が。死骸は浪に入よと見へしが。書せ給ひし（日蓮三三ウ）七字の題目浪にありく頭はれ

女房子は。「のふ情なや」「悲しや」と。川にかけおりかけ上り狂ひ歎くを上人制し。「是ぞめいどの苦しみを。此世ではらす現世の責。題目怠る事なかれ」と。辺の小石拾ひ寄数多の石に七字の首題。日朗諸共一字宛書付水へ投入く。流に向つて題目を。書せ（日五十八ウ）給へば多くの鵜の鳥一度にさつて。勘作が死骸は浪に入よと見へしが。書せ給ひし七字の題目。浪

女房子は「ソフなさけなや」「悲しや」と。川にかけおりかけ上り狂ひなげくを聖人せいし。「是ぞ冥途の苦しみを。此世ではらす現世の責。題目おこたる事なかれ」と。あたりの小石ひろいよせ。あまたの石に一字づゝ。七字の題目かきあらはし。なげ入くし給ふにぞ。うろくずさつて鳥はなを浪に隠るゝ水の面。ながれにむかつて題目を日朗もろ共か

<p>しは。成仏得脱疑ひなし是水流しの題目と。末世に伝ふ流れ灌頂。経木流しもこれとかや。</p>	<p>30</p>	<p>31</p>	<p>32</p>
<p>に有く顯はれしは成仏得脱疑ひなし。是水流の題目と末世に伝ふ流灌頂。経木流しも是とかや。</p>	<p>妻子は「あつ」と有がた涙。水の面と聖人を伏拝みく。『目の前夫が仏果の縁。経市堅固（日蓮三廿四ウ）に出家をとげ。先立給ふ祖母様やと、様*01我も浮めてたもいの』といふも尽せぬ涙なり。</p>	<p>妻子は「あつ」と有がた涙。水の面と上人を伏拝みく。『目の前夫が仏果の縁。経市堅固に出家を遂。先立給ふ姑御や。*01我も浮めてたもいの』といふも尽せぬ涙也。</p>	<p>上人莞尔と打笑給ひ。「一子出家の功德にて九族天に生ぜん事。何疑ひも嵐の雲。心の雲も。吹払ふ妙法蓮花の（日蓮三廿五納オ）経力功力。有情非情の草木国土江河の鱗残りなく。成仏解脱の其しるし今の。」世までも隠れなき。甲州生沢の鵜飼石。文字も朽ず御法も朽ず石はくちせぬ信心の人の。宝と成にける（日五十九オ）</p>
<p>き給ふ。水ながれの題目と末世につたふながれくはんじやう。経木ながしも是とかや。</p>	<p>しやうぼうの徳忽顯（日六十一オ）はれ。勘作がなきからむつくとおき。「あら有がたや大経妙典の功德によつて。三あくだうをまぬがれじやつくはう浄土にいたるを見よ」と。水へぎつふと入かと思へしが。忽七字の題目の光りを。放つて飛さり給ふ。</p>		<p>妙法蓮花の経力功力。有情非情草木国土。江河のうろくず残りなく成仏げだつの其しるし。今の世までもありく」と甲州生沢の鵜かい石。文字もくちず法もくちず。石はくちせぬしんくんの人の。たからとなり（日六十一ウ）</p>

並木宗輔浄瑠璃本著作年譜

- 一、並木宗輔（宗助・千柳を含む）の浄瑠璃本の著作を、成立年次順に並べたものである。署名をもつ作品を中心として、改題や改作を含めた。なお歌舞伎作者としての著作・署名作品は略した。
- 二、「期」欄には、内山美樹子氏総監修・図録『並木宗輔展―浄瑠璃の黄金時代―』（早稲田大学演劇博物館、二〇〇九年）が採用した、並木宗輔の活動時期の区分を、次の略号を以て記した。

略号 時期区分

- I 第一次豊竹座時代（1） 安田蛙文との合作期
II 第一次豊竹座時代（2） 並木丈助との合作期
III 第一次豊竹座時代（3） 単独作期
IV 第一次豊竹座時代（4） 協作者・江戸滞在期
V 竹本座時代
VI 第二次豊竹座時代

なお宗輔の没後に行われた改作・改題などについては、空欄とした。

- 一、「No」欄には、成立年次順に二桁の通し番号を記した。
- 二、「年齢」欄には、並木宗輔の行年から逆算して、成立年当時の年齢を記した。
- 三、「劇場」欄には、当該作品を上演した劇団名を次の略称を以て記した。

略称 劇団名

- 竹本 大坂・竹本座
豊竹 大坂・豊竹座
肥前 江戸・肥前座

- 一、「作品名」欄は、浄瑠璃本の初板本の内題を採用した。参考のため作品名には、現代仮名遣いで読みを記したが、読みの根拠となる資料については註に記した。また内題と異なる表記のある場合も、註に触れた。推定でわたくしに読みを記した場合には、（〜）で区別した。
- 二、「角書」欄は、作品名の頭に記される角書を記した。内題になく、包紙や題簽、絵尽などにみえる場合には、角書のあとの（ ）内に記載位置・資料名を記した。
- 三、「西暦」欄は、当該作品の上演年月の和暦の年の、多くの日数が当たる西暦の年を記した。
- 四、「上演年月」欄は、当該作品を初演・上演する興行の初日の年月を記した。
- 五、「内題下」欄は、内題の下にある作者署名を記した。署名がない場合には、空欄とした。
- 六、「終丁裏」欄は、本文末・終丁裏にある作者署名を記した。署名がない場合には、空欄とした。
- 七、「資料残存」欄には、当該作品に関する資料の残存状況を次の略号を以て記した。

略号 資料名

- 七 浄瑠璃本・大字七行本
六 浄瑠璃本・大字六行本
十 浄瑠璃本・中字十行本
八 浄瑠璃本・中字八行本
包 浄瑠璃本大字本の包紙（天理図書館の板木を含む）
写 浄瑠璃本の写本
絵 初演絵尽
番 初演番付

該当する資料が無い場合は、記さなかった。

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

期	No.	年齢	劇場	作品名	角書	西暦	上演年月	内題下	終丁裏	資料残存
I	01	32	豊竹	ほうじょうじらいき 北条時頼記(1)		1726	享保11・04	作者 西沢一風・並木宗助 (2)		七・十・包・ 絵
I	02	33	豊竹	せいわげんじじゅうごだん 清和源氏十五段(3)		1727	享保12・02	作者 並木宗助・安田蛙文 (4)		七・十
I	03	33	豊竹	つのくにながらのひとばしら 撰津国長柄人柱(5)		1727	享保12・08	同右		七・十・絵・ 番
I	04	34	豊竹	たかうじしゅうぐんにだいかのみ 尊氏將軍二代鑑(6)		1728	享保13・02	同右		七・十・包・ 絵
I	05	34	豊竹	なんとしゅうさんがね 南都十三鐘(7)		1728	享保13・05	同右		七・絵
I	06	35	豊竹	ごさんねんおうしゅうぐんき 後三年奥州軍記(8)		1729	享保14・01	同右		七・十・絵・ 番
I	07	35	豊竹	ふじわらのひでさとたわらのけいず 藤原秀郷倭系図(9)		1729	享保14・09	同右		七・十・絵・ 番
I	08	36	豊竹	かばのかんじやふじとかつせん 蒲冠者藤戸合戦(10)		1730	享保15・01	同右		七・十・番
I	09	36	豊竹	ほんちようだんどくせん 本朝檀特山(11)	一休和尚・蟬川 新右衛門	1730	享保15・05	同右		七・十
I	10	36	豊竹	くすのきまさしげぐんぼうじつろく 楠正成軍法実録(12)		1730	享保15・08	同右		七・十・絵・ 番
I	11	37	豊竹	げんけしちだいしゅう 源家七代集(13)	前太平記・卅九 巻目	1731	享保16・01	同右		七・十・包・ 絵・番
I	12	37	豊竹	いずみのくとうきなのためいけ 和泉国浮名溜池(14)		1731	享保16・04	同右		七・番
I	13	37	豊竹	あかざわやまいとうでんき 赤沢山伊東伝記(15)		1731	享保16・10	同右		七・十・番
I	14	38	豊竹	たいけんもんよくさ 待賢門夜軍(16)	源平・三鼎	1732	享保17・09	同右		七・十
I	15	38	豊竹	ちゅうしんこがねのたんざく 忠臣金短冊(17)	小栗判官・横山 郡司(包紙)	1732	享保17・10	作者 並木宗助・小川丈 助・安田蛙文(18)		七・十・絵

IV	IV	III	III	III	III	III	III	III	III	II	II	II	II	II	II
31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
48	47	46	45	45	44	44	43	43	42	41	41	41	40	40	39
肥前	肥前	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹	豊竹
石橋山鎧襲(38)	田村磨鈴鹿合戦(36)	鷗山姫舎松(35)	狭夜衣鴛鴦剣翅(34)	奥州秀衡有髻壻(33)	茜染野中の隠井(31)	丹生山田青海剣(30)	釜淵双級巴(29)	安倍宗任松浦簗(28)	和合戦女舞鶴(26)	万萱桑門築紫轢(25)	万屋助六二代禰(24)	南蛮鉄後藤目貫(22)	那須与市西海硯(21)	曾我昔見台(20)	莠伶人吾妻雛形(19)
股野流石打・真田帯組打		大和女・四国女(絵尽)					七条・河原								
1742	1741	1740	1739	1739	1738	1738	1737	1737	1736	1735	1735	1735	1734	1734	1733
寛保02・03	寛保01・09	元文05・02	元文04・08	元文04・02	元文03・10	元文03・04	元文02・07	元文02・01	元文・元・03	享保20・08	享保20・05	享保20・02	享保19・08	享保19・06	享保18・07
	作者 浅田一鳥・豊田正蔵(37)	作者並木宗輔	作者並木宗輔	作者並木宗輔	並木宗輔添削 作者原田由良助(32)	作者並木宗輔	作者並木宗輔	作者並木宗輔	作者並木宗輔(27)	作者 並木宗輔・並木丈輔	並木宗輔添削 作者並木丈輔	(23)	作者 並木宗助・同丈助	作者近松氏 並木宗助・同丈助／集之	作者 並木宗助・同丈助
作者 為永太郎兵衛・並木宗輔(39)															
七	七・十・包・絵・番	七・十・絵	七・十・絵・番	七・十・絵	六・十・絵	七・十・絵	六・十・絵	七・十・絵	七・十・包・絵	七・十・包・絵	六・八・絵	写本	七・十・包・絵・番	七・包・絵	七

IV	V	V	V	V	IV	V	V	V	V	V	IV	IV	IV
45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
55	55	55	54	53	53	53	52	52	51	51	50	48	48
肥前	竹本	竹本	竹本	竹本	肥前	竹本	竹本	竹本	竹本	竹本	肥前	豊竹	豊竹
日蓮記兎硯 (60)	双蝶蝶曲輪日記 (59)	栗島譜嫁入雛形 (58)	あわしまけいずよめいりひながた	仮名手本忠臣蔵 (57)	かなでほんちゅうしんぐら	義経千本桜 (56)	よしつねせんぼんざくら	いろはにちれんき	傾城枕軍談 (52)	すがわらでんじゆてならいかのみ	楠昔噺 (49)	くすのきむかしはなし	ゆりわかこうらいぐんき
	放駒(包紙)	関取濡髪・名取	文章巻物・神楽太鼓		大物船矢倉・吉野花矢倉		都変名島勘左衛門・故郷呼名七草四郎	祖父は山へ柴刈に・祖母は川へ洗濯に	団七九郎兵衛・釣船三婦・一寸徳兵衛	軍法富士見西行 (45)	義経新含状 (43)	道成寺現在蛇鱗 (42)	百合稚高麗軍記 (40)
1747	1749	1749	1749	1748	1747	1747	1747	1746	1745	1745	1744	1742	1742
延享04・10	寛延2・07	寛延2・04	寛延2・04	寛延元・08	延享04・11	延享04・10	延享04・08	延享03・01	延享02・07	延享02・02	延享元・03	寛保02・08	寛保02・03
古人近松門左衛門作・当世並木宗輔添作(内題角書)		作者連名 竹田出雲・三好松洛・並木千柳(前見返し)				古人近松門左衛門作・当世並木宗輔添作(内題角書)	竹田出雲作(51)				(44)	作者 浅田一鳥・並木宗輔	作者為永太郎兵衛。文者 並木宗輔・浅田一鳥(41)
古人近松門左衛門作・当世市中庵添作	作者連名 竹田出雲・三好松洛・並木千柳		作者 竹田出雲・三好松洛・並木千柳	作者 竹田出雲・三好松洛・並木千柳	作者 竹田出雲・三好松洛・並木千柳	古人近松門左衛門作・当世市中庵添作(55)	作者 並木千柳・三好松洛・竹田出雲(53)	作者 並木千柳・三好松洛・竹田小出雲	作者 並木千柳・三好松洛・竹田小出雲(48)	作者 並木千柳・小川半平・竹田小出雲(46)		七・十・絵・番	七・十・絵・番
七	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番

											VI	VI	V	V
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	歿後	57	57	56	55
肥前	肥前	豊竹	豊竹	豊竹	肥前	竹本	肥前	竹本	竹本	豊竹	豊竹	豊竹	竹本	竹本
増補腰越状(88)	後藤伊達暱(86)	義経腰越状(84)	嬢景清八島日記(82)	新舞台咲分牡丹(80)	泉三郎伊達目貫(78)	年忘座鋪操(76)	苧萱左衛門墨染桜(74)	庭涼座鋪操(72)	庭涼座鋪操(70)	義経腰越状(68)	一谷嫩軍記(66)	日蓮聖人御法海(64)	文武世継梅(63)	源平布引滝(61)
													源頼信・源頼親	待宵侍従・優美蔵人
1744	1744	1770	1764	1763	1757	1755	1755	1755	1755	1754	1751	1751	1750	1749
延享元・03	延享元・03	明和07・01	明和01・10	宝暦13・04	宝暦07・07	宝暦05・11	宝暦05・10	宝暦05・07	宝暦05・06	宝暦04・07	宝暦元・12	宝暦元・10	寛延3・11	寛延2・11
作者並木宗輔(89)	作者並木宗輔(87)	(85)			(79)	(77)		(73)	(71)	(69)				
			若竹笛躬・黒藏主・中邑阿契／輯之(83)	集之 若竹笛躬・中邑阿契(81)			作者並木宗輔(75)				作者 浅田一鳥・浪岡鯨児・並木正三・難波三藏・豊竹甚六。故人並木宗輔(67)	作者 並木鯨児・安田蛙桂。添削 浅田一鳥・並木宗輔(65)	作者 並木千柳・三好松洛	作者 並木千柳・三好松洛(62)
七	七	七・十・包	七・包・絵・番	七・絵・番	七	七・包・絵・番	写本	七・包・絵・番	七・番	七・包・番	七・十・包・絵・番	七・十・包・絵・番	七・十・絵・番	七・十・包・絵・番

61	歿後	豊竹	よしつねこしえじょう 義経腰越状(90)	1782	天明02頃	(91)	七・包
----	----	----	-------------------------	------	-------	------	-----

- (1) 浄瑠璃本・七行本初板の包紙に振り仮名「ほうでうじらいき」とあり。
- (2) 「西沢一風」は、豊竹座の浄瑠璃本板元・正本屋西沢九左衛門の浄瑠璃本の作者としての筆名。ほかに浮世草子の作者でもあったひと。第一世代の作者・紀海音が家業に専念するために引退した頃から、豊竹座の浄瑠璃本の作者となった。田中千柳と八作(享保八年(一七二三)七月『井筒屋源六恋寒晒』、同年十一月『建仁寺供養』、享保九年(一七二四)二月『頼政追善芝』、同年十月『女婢丸』、享保十年(一七二五)正月『昔米万石通』、同年三月『南北軍問答』、同年五月『身替強張月』、同年十月『大仏殿万代石楚』)、並木宗輔と本作「北条時頼記」の、計九作を合作した。義太夫節創業期の歴史をまとめた演劇書『今昔操年代記』は西沢一風の著作であり、また自ら刊行したもの。同書には「並木宗助安田蛙文。美若なれ共。浄るり一段も書かねぬ器量西沢の下知に任せ。どをやらかをやら五段をつくり」とあって、浄瑠璃本に署名は無いが、安田蛙文も本作「北条時頼記」の執筆に加わったことが知られる。
- 本作「北条時頼記」の大字七行本には、初板と再板の二板があり、初板には内題下の署名を「作者 西沢一風・並木宗助」とする未改訂本と、「作者西沢一風」と埋木で改めた改訂本とがある。再板本は、ふたたび「作者 西沢一風・並木宗助」と改めたもの。本稿一八六(21)頁参照。
- (3) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「せいわけんじーだん」とあり。
- (4) 「安田蛙文」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。享保十一年(一七二六)二月『曾我錦几帳』に単独で署名したのち、本表No.02、14を並木宗輔と合作し、本表No.15では宗輔のほか丈助と合作した。享保十八年(一七三三)四月『鎌倉比事青砥銭』を単独で執筆したのち、豊竹座を離れ、歌舞伎の作者へと転じた。宝暦二年(一七五二)七月・江戸肥前座『太平記枕言』では、内題下に「作者浪華安田蛙文」と署名があり、「作者 東武商家一三軒・野沢鳩使」(終丁裏)と合作した。
- (5) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「つのくにながらのひとはしら」とあり。
- (6) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「たかうぢしやうぐん」だいか、み」とあり。豊竹肥前掾の道行揃「豊曲不二齋」(宝暦五年(一七五五)三月刊。国立国会図書館・早稲田大学演劇博物館)の目録に、振り仮名「たかうぢしやうぐんにだいか、み」とあり。
- (7) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「なんとーがね」とあり。
- (8) 註(6)豊竹肥前掾の道行揃「豊曲不二齋」の目録に、振り仮名「ごさんねんおうしうぐんき」とあり。
- (9) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ふぢはらのひでさとたはらのけいづ」とあり。
- (10) 正本屋西沢九左衛門板の道行揃「浄瑠璃比翼調」(東京大学文学部国文学研究室)の目録に、振り仮名「かばのくはんじやふじとがつせん」とあり。
- (11) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ほんてうだんどくせん」とあり。本作七行本内題の「檀特山」に振り仮名「たんどくせん」とあるのに引かれて、「ほんちやうたんどくせん」とよむ例があるが、本表No.49「一谷嫩軍記」二段目中「檀特(だんどく)山」の。うき別れ。」とあることから、これは「だんどくせん」と読む。
- (12) 初演絵尽の包紙に振り仮名「くすのきまさしげぐんほうじつろく」とあり。
- (13) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「げんけしちたいしう」とあり。
- (14) 初演の絵番付は外題を「いづみのくにうきなのため池」と表記する。
- (15) 絵尽の序文に振り仮名「あかざわ」とあり。註(10)「浄瑠璃比翼調」の目録に振り仮名「あかざはやまいとうでんき」とあり。
- (16) 註(10)「浄瑠璃比翼調」の目録に振り仮名「たいけんもんよくさ」とあり。
- (17) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ちうしんこがねのたんざく」とあり。
- (18) 「小川丈助」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。本表No.15で「小川丈助」、No.16、21で「並木丈助」と署名する。以後、歌舞伎の作者へと転じて、豊竹座へ復帰し、寛延元年(一七四八)正月「谷競出入湊」、同年七月「東鑑御待巻」では「並木丈輔」、同年十一月「撰州渡辺橋供養」、寛延二年(一七四九)三月「八重霞浪花浜萩」、同年十一月「物ぐさ太郎」では「豊丈助」と署名した。
- (19) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ふたばれいじんあつまひながた」とあり。
- (20) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「そかむしけんだい」とあり(か脱字)。註(6)豊竹肥前掾の道行揃「豊曲不二齋」の目録に、振り仮名「そがむかしけんだい」とあり。
- (21) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「なすのよいちさいかいすゞり」とあり。

(22) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(23) 『浄瑠璃譜』は本作について、二月七日の初日を予告したところ、上演許可が下りず（御上より御差留あり）、十二日初日として本表No.02『清和源氏十五段』を再演した、と伝える。浄瑠璃本は上演許可をすなわち出版許可とみなすものであるため、上演禁止とされた本作は出版に至らなかった。このため本作は写本でのみ残る。『南蛮鉄後藤目貫』（天理大学附属天理図書館・東京大学国語研究室・早稲田大学演劇博物館・神津）の「鉄」の文字には異同があり、「金」（大阪府立中之島図書館・山口県立文書館）、「銅」（早稲田大学演劇博物館・東洋文庫）、「鏡」（東京芸術大学附属図書館）、「鐘」（鳥取県立図書館）とする本がある。ほかに「後藤細工」と題する本がある（台湾大学図書館）。本作がのちに、本表No.34、No.50と改題・改作されて復元されていく過程については、内山美樹子氏「南蛮鉄後藤目貫考」（『演劇研究』第二号、早稲田大学演劇博物館、一九六七年所収）参照のこと。

(24) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「よろづやすけるくにだいがみこ」とあり。

(25) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「かるかやだうしんつくしのいへづ」とあり。

(26) 初演絵尽の包紙に振り仮名「わだかつせんおんなまひづる」とあり。浄瑠璃本・七行本再板の包紙に振り仮名「わだがつせんおんなまひづる」とあり。

(27) 初板本には、内題下の作者署名を削って「座本豊竹越前少掾」と埋木した第一次改修本、初丁を含む数丁を彫り直した第二次改修本がある。さらに全丁の板木を改めた再板本もある。初板未改訂本以外には作者署名がない。

(28) 初演絵尽の題簽に振り仮名「あべのむねとうまつらきぬかさ」とあり。

(29) 浄瑠璃本・六行本の宝暦四年（一七五四）七月再演時の後摺本の包紙に振り仮名「しちでう・かはら／かまがふちふたつともゑ」とあり。

(30) 初演絵尽の題簽に振り仮名「にぶやまだせいがつるぎ」とあり。道行揃『豊年蔵』（大阪府立中之島図書館、板元欠）の目録に振り仮名「にうのやまだせいがつるぎ」とあり。浄瑠璃本の本文をみると、「丹生」は次の八箇所にあつて、すべてに振り仮名がある。十八丁裏七行目「丹生（にふ）の山田の親仁さん。」「三十丁裏四行目「丹生（にう）の山田のやせ親仁（おやじ）。」「四十一丁表三行目「丹生（にう）の山田に。」「四十六丁表五行目「丹生（にう）の山。」「五十二丁裏四行目「丹生（にう）の山、六十六丁裏三行目「丹生（にう）の山田、六十七丁表二行目「丹生（にう）の山田の。」「七十五丁表五行目「丹生（にふ）の山家者。」「にう」と表記する限りは清音で、「にぶ」とは濁らない。作品名に、あえて本文と異なる読み方を選ぶとも考え難いので、ここでは絵尽の読みを採らない。浄瑠璃本の包紙の出現を俟ちたい。

(31) 初演絵尽の役割に振り仮名「あかねぞめのなか」こもりんど」とあり。

(32) 「原田由良助」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。ただし本作以外に署名はみえない。

(33) 初演絵尽の役割に振り仮名「おふしうひでひらうはつのはなむこ」とあり。

(34) 初演絵尽の題簽に振り仮名「さよごろもをしどりのつるぎば」とあり。

(35) 初演絵尽の配役に振り仮名「やまとむすめ・しこくむすめ／ひばりやまひめすてまつ」とあり。本作では「捨」に代えて「舎」と記す。享保十五年（一七三〇）竹本座初演『信州姨捨山』は、「捨」に代えて「拾」と記した。浄瑠璃本の外題では縁起をかついで「捨」の字を避けたものと推定する。

(36) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「たむらまろすゝかつせん」とあり。

(37) 内山美樹子氏「田村麿鈴鹿合戦」と『勢州阿漕浦』（『嵯峨康隆氏編『近世文藝論叢』中央公論社、一九七八年所収）は、「田村麿鈴鹿合戦」の番付で「宗輔新作上り」の記載をもつものが存在する」との秋葉芳美氏の報告に出発して、本表No.40『いろは日蓮記』の三段目が「謡曲で『阿漕』と二対の殺生禁断物『鶴飼』を脚色したもので」「人物設定が『田村麿鈴鹿合戦』四段目と類似している」ことを指摘して、本作四段目を並木宗輔作と推定しておられる。

(38) 註(6) 豊竹肥前掾の道行揃「豊曲不二」の目録、および伝法屋吉九郎・中島屋伊左衛門・中山清七板『恋娘昔八丈』（愛媛大学図書館・大阪音楽大学音楽資料館・金沢大学附属図書館・野田市立興風図書館・神津）の前表紙見返し「目録」に振り仮名「いしばしやまよろひがさね」とあり。

(39) 「為永太郎兵衛」は、はじめ竹本座の浄瑠璃本作者として、元文二年（一七三七）十月『太政入道兵庫岬』、元文三年（一七三八）正月『行平磯馴松』に「竹田正蔵」と署名した。豊竹座へ移って「為永太郎兵衛」と名乗り、元文五年（一七四〇）四月『本田善光日本鑑』、同年九月『武烈天皇鑑』、寛保元年（一七四一）三月『本朝斑女箋』に単独で署名した。本表No.31・No.32を並木宗輔らと合作したほかには、寛保元年七月『播州皿屋舗』、寛保二年（一七四二）九月『鎌倉大系図』、寛保三年（一七四三）三月『風俗太平記』、同年八月『久米仙人吉野桜』、延享元年（一七四四）四月『潤色江戸紫』、同年九月『柿本紀僧正旭車』、同年十二月『遊君衣紋鑑』、延享二年（一七四五）二月『詩近江八景』、同年八月『浦島太郎倭物語』に署名した。以後、歌舞伎へ転じ、「為永千蝶」と名乗った。

(40) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ゆりわかかうらいぐんき」とあり。

(41) 「浅田一鳥」は、はじめ竹本座の浄瑠璃本作者として、元文四年（一七三九）四月『ひらかな盛衰記』、元文五年（一七四〇）四月『今川本領猫魔館』、同年七月『将門冠合戦』に「浅

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

- 田可啓」と署名した。豊竹座へ移って「浅田一鳥」と名乗り、本表No.32・No.33・No.48・No.49を並木宗輔らと合作したほかには、寛保元年（一七四一）七月『播州皿屋鋪』、同年九月『田村磨鈴鹿合戦』、寛保二年（一七四二）九月『鎌倉大系図』、寛保三年（一七四三）三月『風俗太平記』、同年八月『久米仙人吉野桜』、延享元年（一七四四）四月『潤色江戸紫』、同年九月『柿本紀僧正旭車』、同年十二月『遊君衣紋鑑』、延享二年（一七四五）二月『詩近江八景』、同年五月『増補大仏殿歌麈』、同年八月『浦島太郎倭物語』、延享三年（一七四六）十一月『花筏巖流島』、延享四年（一七四七）二月『裙重紅梅服』、同年三月『万戸將軍唐日記』、同年七月『悪源太平治合戦』、寛延元年（一七四八）正月『容競出入湊』、同年七月『東鑑御狩卷』、同年十一月『摂州渡辺橋供養』、寛延二年（一七四九）三月『八重霞浪花浜萩』、同年十一月『物ぐさ太郎』、寛延三年（一七五〇）六月『夏楓連理枕』、宝暦元年（一七五二）正月『玉藻前蟻袂』、同年四月『浪花文章夕霧塚』、宝暦二年（一七五二）十一月『倭仮名在原系図』、宝暦三年（一七五三）七月『雄結勘助島』、宝暦四年（一七五四）二月『相馬太郎孝文談』、同年十二月『天智天皇菟穂庵』、宝暦五年（一七五五）七月『双扇長柄松』、宝暦六年（一七五六）三月『義仲勲功記』、同年閏十一月『甲斐源氏松軍配』、宝暦七年（一七五七）正月『写仙足利染』、同年三月『前九年奥州合戦』、同年十二月『祇園祭礼信仰記』、宝暦九年（一七五九）三月『芽源氏鶯塚』、同年十二月『先陣浮洲巖』、宝暦十一年（一七六一）五月『曾根崎模様』、同年九月『人丸万歳台』、宝暦十二年（一七六二）閏四月『岸姫松纏鑑』、明和四年（一七六七）正月『星兜弓勢鑑』に署名した。

(42) 浄瑠璃本・七行本の内題および包紙に振り仮名「だうじやうじげんざいうろこ」とあり。

(43) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(44) 本表No.19『南蛮鉄後藤目貫』の、江戸肥前座における改作。のちに本表No.54・No.55と改題される。作者署名なし。

(45) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ぐん・ほう／ふじみさいぎやう」とあり。

(46) 「小川半平」は、はじめ竹本座の浄瑠璃本作者として、寛保元年（一七四一）正月『伊豆院宣源氏鏡』、同年五月『新うすゆき物語』に署名した。豊竹座に移って、寛保三年（一七四三）三月『風俗太平記』に署名した。ふたたび竹本座へ移って、本表No.35を並木宗輔らと合作した。近松半二の兄かとみる説もある（『日本古典文学大辞典』「小川半平」項、井口洋氏）。

「竹田小出雲」は、竹本座の座本・二代竹田出雲（いわゆる親方出雲。竹田出雲掾定雄）の最初の筆名である。本表No.35・No.38を並木宗輔らと合作する以前に、元文二年（一七三七）十月『太政入道兵庫岬』、元文四年（一七三九）四月『ひらかな盛衰記』、元文五年（一七四〇）四月『今川本領猫魔館』、同年七月『将門冠合戦』、寛保元年（一七四一）正月『伊豆院宣源氏鏡』、同年五月『新うすゆき物語』、寛保二年（一七四二）二月『花衣いろは縁起』、寛保三年（一七四三）五月『丹州爺打栗』、延享元年（一七四四）三月『児源氏道中軍記』、同年十一月『八曲筐掛絵』に「竹田小出雲」と署名した。

父である、いわゆる元祖出雲、竹田出雲掾定雄の死去（延享四年（一七四七）六月四日）ののち、浄瑠璃本の作者として「竹田出雲」と名乗って、本表No.39、No.41・No.44を並木宗輔らと合作した以後には、宝暦四年（一七五四）二月『菖蒲前操弦』、同年四月『小袖組貫練門平』、同年十月『小野道風青柳硯』、宝暦六年（一七五六）二月『崇徳院讃岐伝記』、同年十月『平惟茂凱陣紅葉』に署名した。また「竹田外記」として宝暦元年（一七五二）十月『役行者大峰桜』、宝暦二年（一七五二）五月『世話言漢楚軍談』、同年十一月『伊達錦五十四郡』、宝暦三年（一七五三）五月『愛護稚名歌勝閑』に署名した。二代竹田出雲は、宝暦六年十一月四日死去。宝暦七年（一七五七）十二月『昔男春日野小町』の内題下に「故竹田出雲」と掲げる。

(47) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「だんしち・つりふねの・いつすん／なつまつりなにはかゞみ」とあり。

(48) 「三好松洛」は、竹本座の浄瑠璃本作者。本表No.36・No.39、No.41・No.44、No.46・No.47を並木宗輔らと合作する以前に、元文元年（一七三六）二月『赤松円心緑陣幕』、同年五月『敵討鑑樓錦』、同年十月『猿丸太夫鹿巻毫』、元文二年（一七三七）正月『御所桜堀川夜討』、元文三年（一七三八）正月『行平儀馴松』、元文四年（一七三九）四月『ひらかな盛衰記』、元文五年（一七四〇）四月『今川本領猫魔館』、同年七月『将門冠合戦』、寛保元年（一七四一）正月『伊豆院宣源氏鏡』、同年五月『新うすゆき物語』、寛保二年（一七四二）二月『花衣いろは縁起』、寛保三年（一七四三）五月『丹州爺打栗』、延享元年（一七四四）三月『児源氏道中軍記』に署名した。

以後には、宝暦元年（一七五二）二月『恋女房染分手綱』、宝暦二年（一七五二）三月『名筆傾城鑑』、同年五月『世話言漢楚軍談』、同年十一月『伊達錦五十四郡』、宝暦三年（一七五三）五月『愛護稚名歌勝閑』、宝暦四年（一七五四）二月『菖蒲前操弦』、同年四月『小袖組貫練門平』、同年十月『小野道風青柳硯』、宝暦六年（一七五六）二月『崇徳院讃岐伝記』、同年十月『平惟茂凱陣紅葉』、宝暦七年（一七五七）二月『姫小松子日の遊』、同年九月『薩摩歌妓鑑』、宝暦八年（一七五八）三月『敵討崇禪寺馬場』、同年八月『蛭小島武勇問答』、宝暦九年（一七五九）九月『太平記菊水之巻』、宝暦十年（一七六〇）七月『極彩色娘扇』、宝暦十一年（一七六一）正月『安倍晴明倭言葉』、同年五月『由良湊千軒長者』、同年十一月『古戦場鐘懸の松』、宝暦十二年（一七六二）三月『花系図都鑑』、明和二年（一七六五）九月『姻袖鏡』、明和三年（一七六六）正月『本朝廿四孝』、同年七月『小夜中山鐘由来』、同年十月『太平記忠臣講釈』、明和四年（一七六七）五月『四天王寺稚木像』、同年八月『関取千両幟』、同年十二月『三日太平記』、明和六年（一七六九）正月『振袖天神記』、同年七月『中元噂掛鯛』、同年十二月『近江源氏先陣館』、明和七年（一七七〇）八月『萩大名傾城敵討』に署名した。

明和八年（一七七二）正月『妹青山婦女庭訓』に「後見 行年七十六歳三好松洛」とあるので、直前の頃に死去したものと考えられる。同年十二月『桜御殿五十三駅』にも「後見

三好松洛」とある。

(49) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「ちい」やま「しばかり」は、かは「せんたく」／くすのきむかしはなし」とあり。

(50) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「すがわらでんじめてならひかゞみ」とあり。

(51) 「竹田出雲」は、竹本座の座本・初代竹田出雲（いわゆる元祖出雲。竹田出雲掾清定）の筆名のひとつである。本表No.38を並木宗輔らと合作する以前に、「竹田出雲掾」として享保八年（一七三三）二月『大塔宮儀鑑』、享保十四年（一七二九）八月『眉間尺象貢』、寛保二年（一七四二）七月『男作五雁金』、延享元年（一七四四）三月『兎源氏道中軍記』に署名した。また「竹田出雲」として享保九年（一七二四）七月『諸葛孔明鼎軍談』、同年十一月『右大将鎌倉実記』、享保十年（一七二五）五月『出世握虎稚物語』、同年九月『大内裏大友真鳥』、享保十一年（一七二六）九月『伊勢平氏年々鑑』、享保十二年（一七二七）四月『七小町』、同年八月『三莊大夫五人娘』、享保十三年（一七二八）三月『工藤左衛門富士日記』、同年五月『加賀国篠原合戦』、享保十四年（一七二九）二月『尼御台由比浜出』、享保十九年（一七三四）十月『芦屋道満大内鑑』、享保二十年（一七三五）九月『甲賀三郎窟物語』、寛保三年（一七四三）四月『入鹿大臣皇都證』に署名した。ほかに「千前軒」として元文三年（一七三八）八月『小栗判官車街道』、元文四年（一七三九）四月『ひらかな盛衰記』、元文五年（一七四〇）四月『今川本領猫魔館』、同年七月『将門冠合戦』、寛保元年（一七四一）正月『伊豆院宣源氏鏡』に署名した。延享四年（一七四七）六月四日死去、享年六十六才。命日は過去帳と『倒冠雜誌』、享年は『名人忌辰録』に拠る。

(52) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「みやこのかへなはしまのかんざゑもん・こきやうのよびなはな・くさしらう／けいせいまくらぐんだん」とあり。

(53) 註(46)に記す通り、本作以降にみえる「竹田出雲」は、「竹田小出雲」から改名した親方出雲・竹田出雲掾定雄である。

(54) 大坂板絵尽の内題に振り仮名「にちれんき」とあり。また絵尽包紙の題は「いろは宗日蓮記」とあり。

(55) 本作の内題上と本文末の作者署名によって、宗輔には「市中庵」という庵号があったことが判る。ただし本作および改題（本表No.45）以外、宗輔が浄瑠璃本の著作に庵号を用いた例はみられない。

(56) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「だいもつふなやぐら・よしの、はなやぐら／よしつねせんぼんざくら」とあり。

(57) 初演絵尽の内題に振り仮名「かなでほんちうしんぐら」とあり。

(58) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「あやのまきもの・かくらのたいこ／あはしまけいつよめいりひながた」とあり。

(59) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「せきとりのぬれがみ・なとりのはなれごま／ふたつてふく／くるわにつき」とあり。七行本の包紙は「双蝶々曲輪日記」と記すが、初演番付・初演絵尽（包紙・内題）・七行本（題簽・内題）・十行本（題簽・内題）ともに「双蝶々曲輪日記」と書く。

(60) 本表No.40『いろは日蓮記』の改題。

(61) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「まつよひのじしう・やさくらんど／げんへいぬのびきのたき」とあり。

(62) 「吉田冠子」は、竹本座の人形遣い・初代吉田文三郎の、浄瑠璃本作者としての筆名。本作No.46の五段目段切の本文「千枝（ちえ）の柳に雪折れなく。初冠（うあかうむり）の子四天王。松の洛（みやこ）の万々歳（ぜい）難波の。里ぞ栄（さか）へける」は、並木千柳＝宗輔と三好松洛の名を読み込むとされるが、同様に冠子の名をも読み込んだものと捉えるべきであろう。「吉田冠子」は、宝暦元年（一七五二）二月『恋女房染分手綱』、宝暦二年（一七五三）三月『名筆傾城鑑』、同年五月『世話言漢楚軍談』、同年十一月『伊達錦五十四郡』、宝暦三年（一七五三）五月『愛護雅名歌勝関』、宝暦四年（一七五四）二月『菖蒲前操弦』、同年四月『小袖組貫練門平』、同年十月『小野道風青柳硯』、宝暦六年（一七五六）二月『崇徳院讀岐伝記』、同年十月『平惟茂凱陣紅葉』、宝暦七年（一七五七）二月『姫小松子日の遊』、同年九月『薩摩歌妓鑑』、宝暦八年（一七五八）三月『敵討崇禪寺馬場』、同年八月『蛭小島武勇問答』に署名した。宝暦十年（一五六〇）正月十九日没。明和四年（一七六七）八月『花軍寿永春』に「故人吉田冠子作」の署名がある。

(63) 浄瑠璃本・七行本の題簽に振り仮名「ぶんぶよつぎのむめ」とあり。

(64) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「にちれんしやうにんみのりのうみ」とあり。

(65) 「並木鯨児」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。複数の筆名があり、「並木鯨児」として本表No.48、「浪岡鯨児」として本表No.49、宝暦二年（一七五二）十二月『倭仮名在原系図』、宝暦三年（一七五三）七月『雄結勘助島』、「浪岡蟹蔵」として宝暦四年（一七五四）二月『相馬太郎孝文談』、「浪岡黒藏主」として同年十二月『天智天皇勅徳庵』、宝暦五年（一七五五）七月『双扇長柄松』に署名した。また「黒藏子」として宝暦六年（一七五六）三月『義仲勲功記』、「黒藏主」として同年閏十一月『甲斐源氏桜軍配』、宝暦七年（一七五七）正月『写眞足利染』、同年三月『前九年奥州合戦』、同年十二月『祇園祭礼信仰記』、宝暦九年（一七五九）三月『芽源氏鶯塚』、同年十二月『先陣浮洲巖』、宝暦十一年（一七六一）五月『曾根崎模様』、同年九月『人丸万歳台』、宝暦十二年（一七六二）閏四月『岸姫松轡鑑』、明和元年（一七六四）四月『官軍一統志』、同年十月『娘景清八島日記』、閏十二月『いろは歌義臣鑑』、明和六年（一七六九）八月『殿造千丈嶽』に署名した。

「安田蛙桂」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。「安田蛙桂」として本作No.48以前に、延享四年（一七四七）七月『悪源太平治合戦』、寛延元年（一七四八）正月『容競出入湊』、同年七月『東

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

鑑御狩卷」、同年十一月『摂州渡辺橋供養」、寛延二年（一七四九）三月『八重霞浪花浜萩」、同年十一月『物ぐさ太郎」、寛延三年（一七五〇）六月『夏楓連理枕」、宝暦元年（一七五一）正月『玉藻前囃快」、同年四月『浪花文章夕霧塚』に署名した。のちに竹本座へ移って、「中邑閨助」として宝暦二年（一七五二）三月『名筆傾城鑑』、同年五月『世話言漢楚軍談』、同年十一月『伊達錦五十四郡』、宝暦三年（一七五三）五月『愛護雅名歌勝関』、宝暦四年（一七五四）二月『菖蒲前操弦』、同年四月『小袖組貫練門平』、同年十月『小野道風青柳観』、宝暦六年（一七五六）二月『崇徳院讀岐伝記』、同年十月『平惟茂凱陣紅葉』に署名した。ふたたび豊竹座へ移って、「中邑阿契」として宝暦七年（一七五七）十二月『祇園祭祀信仰記』、宝暦九年（一七五九）三月『芽源氏鶯塚』、同年五月『難波丸金鶏』、同年十二月『先陣浮洲巖』、宝暦十年（一七六〇）三月『桜姫賤姫桜』、同年十二月『祇園女御九重錦』、宝暦十一年（一七六一）五月『曾根崎模様』、同年九月『人丸万歳台』、宝暦十三年（一七六三）四月『新舞台咲分牡丹』、同年七月『新舞台扇子錦木』、同年十一月『番場忠太紅梅簾』、明和元年（一七六四）十月『嬢景清八島日記』、閏十二月『いろは歌義臣整』、明和六年（一七六九）二月『四天王寺伶人桜』、同年七月『双紋筐巢籠』、明和七年（一七七〇）九月『源平鶴鳥越』、明和八年（一七七一）正月『九州与次兵衛灘』、同年八月『落標浪花筏』、同年十二月『本卦復昔曆』、安永元年（一七七二）四月『忠臣後日嘯』、同年八月『千種結旧画舛紙』に署名した。

(66) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「いちのたにふたばぐんき」とあり。「嫩」とは別字であるので、「嫩」と書くべし（児玉竜一氏「二谷嫩軍記」攷）〈『演劇学』第三二号、早稲田大学演劇学会、一九九一年所収〉参照。

(67) 「並木正三」は、豊竹座の浄瑠璃本作者。本表No.49に署名したのちには、歌舞伎の作者へ転じた。以後人形浄瑠璃周辺での活動をみると、宝暦七年（一七五七）四月・大坂道頓堀大西芝居『四天王寺伽藍鑑』では、歌舞伎の作品ながら、人形芝居同様に通し本（大字七行本）を刊行して、内題下に「並木正三」と署名した。同作は翌宝暦八年（一七五八）八月・江戸肥前座『聖徳太子職人鑑』と改題再演され、これには「浪花作者並木正三」と署名がある。また明和五年（一七六八）九月・大坂道頓堀龜谷芝居興行は人形芝居で「座本後見並木正三」を勤めて、当該興行で初演した「容競唐土嘯」「寿館狐馬懸」「関取二代勝負附」の浄瑠璃本に署名を残した。

(68) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「よしつねこしこゑしやう」とあり。宝暦四年初演番付に振り仮名「よしつねこしこゑしやう」とあり。

(69) 本表No.19「南蛮鉄後藤目貫」の、大坂豊竹座における改作（大序より三段目まで）。ただし跋文に、本表No.34「義経新含状」の改作である旨を述べて、本当の原作名を伏せる。作者署名なし。

(70) 浄瑠璃本・七行本の巻頭目録題に振り仮名「にはすゞみざしきあやつり」とあり。

(71) 宝暦五年（一七五五）六月・京竹本座興行は、前浄瑠璃に『ひらかな盛衰記』初段・二段の通し・立て、後浄瑠璃に『庭涼座鋪操』と題して、付け物（一幕物）七段を並べた。『庭涼座鋪操』は既刊の浄瑠璃本・七行本から板木を流用して成る。収録曲の標題は次の通り。「返魂香相の山」（宝永五年（一七〇八）初演「けいせい反魂香」）、「対の花かいらぎ」（元文元年（一七三六）初演「敵討檻樓錦」）、「御所桜心の音調」（元文二年（一七三七）初演「御所桜堀川夜討」）、「腕久ゆかりの十徳」（享保二十年（一七三五）初演「元日金年越」）、「曾我草摺引」（元禄十二年（一六九九）初演「曾我五人兄弟」）、「双蝶々相合駕籠」（寛延二年（一七四九）初演「双蝶蝶曲輪日記」）、「浄瑠璃万歳 踊歌」（これは新作）。六曲目「相合駕籠」は本表No.44「双蝶蝶曲輪日記」六ツ目「橋本の段」を抜き出したもの。作者署名なし。

(72) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「にはすゞみあやつりざしき」とあり。

(73) 宝暦五年（一七五五）七月・大坂竹本座興行は、前浄瑠璃に「相模入道」（近松「相模入道千疋犬」）の初段・二段の通し・立て、後浄瑠璃に「庭涼座鋪操」と題して、付け物（一幕物）七段を並べた。『庭涼座鋪操』も既刊の浄瑠璃本・七行本から板木を流用して成る。収録曲の標題は次の通り。「相生三大臣」（これは新作）、「対の花かいらぎ」（元文元年（一七三六）初演「敵討檻樓錦」）、「千本桜狐の段」（延享四年（一七四七）初演「義経千本桜」）、「腕久ゆかりの十徳」（享保二十年（一七三五）初演「元日金年越」）、「団七祭の段」（延享二年（一七四五）初演「夏祭浪花鑑」）、「無間の鐘の段」（元文四年（一七三九）初演「ひらかな盛衰記」）、「浄るり万ざい」（これは新作）。三曲目「狐の段」は本表No.41「義経千本桜」四段目中「忠信狐・五曲目「団七祭の段」は本表No.36「夏祭浪花鑑」七ツ目「長町裏」を抜き出したもの。作者署名なし。

(74) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(75) 本表No.21「菰萱桑門築紫蝶」の改作。写本二点が残る。一本は、大倉集古館所蔵本で、成立年は同書の年記「千時宝暦五乙亥年初冬」（後ろ見返し）に拠る。また大倉集古館本の内題下には「近松門左衛門作」とある。もう一本は、早稲田大学演劇博物館辻町文庫本で、同書は「安永九庚子年九月十一日」（終丁裏）の書写である。辻町文庫本の本文末に「作者並木宗輔」とある。滑稽本「狂言田舎操」は、「地芝居」地方廻りの興行につき太夫と人形遣いの会話として「よく出るやつが菰萱の墨染桜」「それいの、江戸浄るりで石田詰将棋軍配たらいふ浄るりの三段目にはめた。彼大、焼飯菰萱か。」とみえる。続けて、肥前座のNo.34「義経新含状」へと話題が転じるのは、『菰萱左衛門墨染桜』を肥前座の上演作品だと認識するためであろう。「狂言田舎操」の作者は、式亭三馬と楽亭馬笑で、馬笑は四代竹本倉太夫の筆名である。同書の記述は、江戸（時代で無く、所の江戸）を拠点としたプロの太夫らの伝承や理解を反映したものと考えられる。

(76) 浄瑠璃本・七行本の包紙および巻頭目録題に振り仮名「としわすれざしきあやつり」とあり。

(77) 宝暦五年（一七五七）十一月・大坂竹本座興行は、前浄瑠璃に「相模入道」（近松「相模入道千疋犬」）の初段・二段の通し・立て、後浄瑠璃に「年忘座鋪操」と題して、付け物（一幕物）八段を並べ、さらに大切に「ふし事 拍子扇浄瑠璃合」を演奏したもの。『年忘座鋪操』も既刊の浄瑠璃本・七行本から板本を流用して成る。収録曲の標題は次の通り。「馬のだん」（享保十三年（一七二八）初演「加賀国篠原合戦」）、「いろは縁起 二段目物ぐるひ」（寛保二年（一七四二）初演「花衣いろは縁起」）、「静三味線の段」（元文二年（一七三七）初演「御所桜堀川夜討」）、「宇治川先陣物語」（元文四年（一七三九）初演「ひらかな盛衰記」）、「河内通四段目」（近松「井筒業平河内通」）、「西行桜の段」（延享二年（一七四五）初演「軍法富士見西行」）、「骨接の段」（元文二年（一七三七）初演「御所桜堀川夜討」）、「あこや責の段」（享保十七年（一七三三）初演「壇浦兜軍記」）。六曲目「西行桜の段」は本表No.35「軍法富士見西行」二段目口「墨染桜」を抜き出したもの。作者署名なし。

(78) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(79) 本表No.19「南蛮鉄後藤目貫」の、江戸肥前座における改作。同座・本表No.26「義経新合状」をさらに改めたもの。作者署名なし。

(80) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(81) 宝暦十三年（一七六三）正月九日夜豊竹座（若太夫芝居）類焼。豊竹座の劇場が再建した最初の興行が、四月十九日初日「新舞台咲分牡丹」興行である。ただし興行を予告する初演番付・初演絵巻には全体にかかる外題はなく、あとから出た浄瑠璃本で初めて「新舞台咲分牡丹」の外題がついたもの。『新舞台咲分牡丹』興行は、冒頭の新作「新舞台・式三番／三十石艦始」三番続を通し・立ての演目として、付け物（一幕物）四作品を並べた。『三十石艦始』の劇中劇として、冒頭に能「翁」を上演した（これが文楽現行の「寿式三番叟」の最初の上演となる）。

『新舞台咲分牡丹』は新作部分は新刻して、旧作については既成の板本を流用して成る。収録曲の目録題は次の通り。「三十石艦始 三番つゞき」（新作）、「東鑑御狩巻 三之口三之切」（寛延元年（一七四八）八月初演）、「双紋刀銘月 上下」（新作）、「北条時頼記 四段目之切」（享保十一年（一七二六）初演「北条時頼記」）、「女天神手習伝授 二冊物」（後述）、「御礼祝義女鉢木 出かたり出つかひ」（享保十一年初演「北条時頼記」）。四曲目「四段目之切」は本表No.01「北条時頼記」四段目切「しつと」、六曲目「御礼祝義女鉢木」は同「北条時頼記」五段目「女はちの木」を抜き出したもの。五曲目「女天神手習伝授」は本表No.38「菅原伝授手習鑑」四段目の改作で、端場は原作四段目口「飛梅」を書き替えた新作、切は四段目切「手習児家」を初演者である二代豊竹若太夫（二代竹本島太夫 自身が再演したもの）。

「若竹笛躬」は、豊竹座の人形遣い・豊松藤九郎（若竹東工郎）の、浄瑠璃本作者としての筆名。「若竹笛躬」の名は、宝暦九年（一七五九）五月「難波丸金鶏」、宝暦十年（一七六〇）三月「桜姫賤姫校」、同年十二月「祇園女御九重錦」、宝暦十一年（一七六一）五月「曾根崎模様」、同年九月「入丸万歳台」、宝暦十二年（一七六二）閏四月「岸姫松轡鑑」、宝暦十三年（一七六三）四月「新舞台咲分牡丹」、同年七月「新舞台扇子錦木」、同年十一月「番場忠太紅梅簾」、明和元年（一七六四）十月「娘景清八島日記」、明和七年（一七七〇）十二月「魁鐘岬」、明和八年（一七七二）八月「濡標浪花筏」、安永元年（一七七二）四月「忠臣後日晰」、同年八月「千種結田画舛紙」、同十二月「後太平記瓢実録」、安永二年（一七七三）二月「摂州合邦辻」、同年四月「伊達娘恋緋鹿子」、同七月「極楽往来蓮寄初」、同八月「呼子鳥小栗実記」、同十二月「けいせい恋飛脚」、安永三年（一七七四）八月「花柳会稽掲布染」、安永四年（一七七五）正月「軍術出口柳」、同年九月「倭歌月見松」、安永五年（一七七六）正月「鯛屋貞柳歳日園」、同年四月「三国無双奴請状」、安永六年（一七七七）五月「置土産今織上布」、安永七年（一七七八）正月「御堂前菖蒲帷子」、同年八月「讃州屏風浦」、安永九年正月「仮名写安土問答」、天明二年（一七八二）九月「吾妻海道茶屋娘」、天明七年（一七八七）九月「廓景色雪の茶会」、同年十二月「韓和問書帖」、寛政元年（一七八九）二月「木下蔭狭間合戦」、寛政三年（一七九二）三月「彫刻左小刀」、寛政五年（一七九三）七月「蝶花形名歌島台」、寛政九年（一七九七）二月「忠義墳盟約大石」、寛政十一年（一七九九）四月「纏緋紺屋譜」の三十七作にみえる。『日本古典文学大辞典』「若竹笛躬」項（井口洋氏）は、同名に二代あることを指摘した上で、「二代目が存在したとしても、その交替期は不明である。」とする。しかし豊竹越前少掾と同時代人である若竹東工郎は、明和初めの時点でよほどの高齢だと考えるべきであろう。越前少掾追善の明和元年（一七六四）十月「娘景清八島日記」までが初代、明和七年以降を二代と推定する。

(82) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「むすめかげきよしまにつき」とあり。

(83) 本作「娘景清八島日記」は、明和元年（一七六四）九月十三日に死去した、豊竹越前少掾（初代若太夫）の追善興行として初演された。越前少掾が初演した三作品からそれぞれ三段目切を取り集めて一編とした。すなわち本表No.14「待賢門夜軍」を二段目、享保十年（一七二五）初演「大仏殿万代石楚」を三段目、本表No.50「義経腰越状」（原題はNo.19「南蛮鉄後藤目貫」）を四段目に配した。並木宗輔の作者名の表示はないが、越前少掾の人生の象徴として、宗輔の作品が欠かすことの出来ない存在だったことが知られる。絵巻に拠ると、本作「娘景清八島日記」五段目節事「追善記念節」では舞台上に越前少掾の木像を飾り、座中が立って焼香を行なったらしい。

(84) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「よしつねこしごゑじやう」とあり。

(85) 本表No.19「南蛮鉄後藤目貫」の改作のひとつ。本表No.50「義経腰越状」は、大序より三段目までの未完本であったが、四段目を補ったもの。大坂北堀江市之側芝居・二代豊竹此太夫の劇団における改作。内題を「腰越状 四段目・九一段 座本豊竹此吉」とする四段目単行本が残る（香川県立ミュージアム近石泰秋資料国立劇場・国立国会図書館・早稲田大学演劇博物館・内山美樹子氏）。ほかに三段目までの未完本で、本表No.52「娘景清八島日記」に流用された三段目部分を補刻し直した本（京都万屋仁右衛門板）が出た。作

『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について

者署名はいずれにもなし。大序より四段目切までの通し・立ての上演であったものと推定する（拙著『浄瑠璃本史研究』二〇四頁～二〇六頁（八木書店、二〇〇九年）参照）。

(86) 包紙残存せず。ヨミは推定。

(87) 本表No.19『南蛮鉄後藤目貫』の改作。本表No.34『義経新含状』の内題を削り、埋木により改題したもの。No.19『南蛮鉄後藤目貫』の改題であって、作者を宗輔であると明記した最初の板本。番付が残らないので、上演があったものか定かでない。

(88) 註(38)伝法屋吉九郎・中島屋伊左衛門・中山清七板『恋娘昔八丈』前見返し「目録」に振り仮名「ぞうほこしごへでう」とあり。

(89) 本表No.19『南蛮鉄後藤目貫』の改作。本表No.34・No.59と板が異なり、板木をあらたに起こして改題したものである。刊行の順としては、No.59よりもあとと判断した。『義太夫年表 近世篇』は当該作の刊行時期を「天明三年末以後寛政前半以前」の上演時の刊行と推定したが誤り。註(38)伝法屋吉九郎・中島屋伊左衛門・中山清七板『恋娘昔八丈』は「安永四年十一月以後、安永五年二月以前の刊行」と推定されている（福田祐子氏『「恋娘昔八丈」の諸本』、『国文目白』第四十号、日本女子大学国語国文学会、二〇〇一年二月所収）参照。右『恋娘昔八丈』の見返しの目録は『石橋山鎧襲』（安永三年八月刊）・『鎌倉山緑翠勝閑』（安永四年正月刊）の間に『増補腰越状』の書名を掲げる。これらから『増補腰越状』の刊行は、安永四年十一月以前と推考する。番付が残らないので、上演があったものか定かでない。

(90) 浄瑠璃本・七行本の包紙に振り仮名「よしつねこしごえじやう」とあり。

(91) 本表No.19『南蛮鉄後藤目貫』の改作のひとつ。本表No.50の未完本（三段目板木補刻本）と、No.59の四段目をひとまとめにして、四段目冒頭に道行、末尾に五段目を加えて、完本としたもの。完本の初摺（名古屋蓬左文庫・関西大学図書館・内山美樹子氏）の奥付は、天明二年（一七八二）九月初演『吾妻海道茶屋娘』の初板初摺本に同じであるので、刊行は天明二年頃、上演は大坂北堀江市之側芝居・二代豊竹此太夫の劇団によるものと推定する。作者署名なし。